

黒野城主 加藤左衛門尉貞泰

さえもん の じょうさだ やす

# 関ヶ原合戦の史料研究



黒野城と加藤貞泰公研究会

黒野城主 加藤左衛門尉貞泰

関ヶ原合戦の史料研究

黒野城と加藤貞泰公研究会







加藤貞泰公肖像画  
愛媛県大洲市 曹溪院 所蔵



「四戦図屏風」六曲一隻  
関ヶ原合戦図（部分：加藤左衛門尉 黒野城）  
岐阜市歴史博物館 所蔵





関ヶ原役図 (部分：犬山城・竹ヶ鼻城・岐阜城の攻防・黒野城)  
 国立公文書館 所蔵「武家事紀」収載

## 発刊・お祝いの言葉

岐阜県観光国際局長 矢本 哲也

このたびは、「黒野城主・加藤左衛門尉貞泰 関ヶ原合戦の史料研究」誌が発刊されましたこと、心からお祝い申し上げます。

さて、岐阜県においても、これまで関ヶ原古戦場の魅力づくりとして、岐阜関ヶ原古戦場記念館の整備をはじめ、史跡整備や観光受入環境の整備、各種イベントを通じた誘客を進めて参りました。

特に、2020年は、関ヶ原の戦いから420年という節目の年を迎えることから、戦国武将観光のさらなる拡大推進に取り組んでおります。

折しも、このタイミングで本誌が刊行されることは誠に意義深いと存じております。

岐阜県としても、引き続き、広域周遊観光の柱として関ヶ原古戦場の魅力を発信して参りますので、今後も一緒に盛り上げていただきたいと考えております。

末筆ながら、貴研究会の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念いたしましたし、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 改訂版刊行に寄せて

岐阜市長 柴橋 正直

「関ヶ原合戦の史料研究」改訂版の刊行、おめでとうございます。本書では前作をはるかに上回る充実した史料群に依拠して、関ヶ原合戦に至る加藤貞泰公の事績の全貌を様々な観点からまとめ上げられました。発刊に至るまでの会員の皆様方の真摯な研究姿勢と不断の努力に敬意を表します。一読しますと、貞泰公が全く先の読めない厳しい時代を生き抜き、東軍勝利に貢献したことがよくわかります。様々な脅威や災害の渦中を生きる現代の私たちにとっても、貞泰公の生き様は示唆に富むものであるといえるでしょう。

私たちの岐阜市は、戦国時代を通じて歴史の重要な舞台となり、全国に大きな影響を与えましたが、黒野城はその歴史を語るかけがえのない文化財です。地域で大切に育み、その魅力と価値を次世代に伝えていけるよう、皆様とともに取り組んでまいります。

最後となりましたが、研究会がますます発展されますことを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

## はじめに

「天下分け目の戦」と、天下取りの場ともなった美濃。慶長5年（1600）9月15日、関ヶ原で雌雄を決する合戦の火蓋が切られた。

参戦武将の中で1万石以上の大名クラスでは、最年少武将と思われる、美濃国黒野城主加藤左衛門尉貞泰（20歳）・4万石。

貞泰公の生誕地は、通説が近江国でしたが高野山の墓石に「生国濃州岐阜橋詰」とあり判明。現在の岐阜市橋詰町辺りである。

甲斐国24万石領主であった父加藤光泰が文禄の役で朝鮮にて突然死去。石田三成による毒殺説も流布した。5ヶ月後の文禄三年（1594）、14才の嫡子貞泰は岐阜黒野4万石に国替となった。黒野城築城、城下町づくりに取り組み、4年後の慶長3年（1598）、本丸に入城、同年豊臣秀吉が死去。その2年後に関ヶ原合戦が勃発した。なお光泰の生誕地は多芸郡橋爪村と厚見郡今泉村橋詰の二説あり。

貞泰は、始め大坂石田方の指図で前線犬山城に加勢。この前後、徳川家康などからの書状が15通確認できる。書状によると貞泰の行動は加勢に行く前から徳川寄りであったことがうかがえる。今まで多くの書籍に、岐阜城が落城したので東軍に寝返ったと書かれてきたが間違いで、加勢後、籠城し犬山城を無血開城に導いた。関ヶ原合戦の前哨戦では徳川方の大功労者であり、今日、国宝犬山城天守が現存するのも貞泰の御蔭であります。

2012年、白峰旬氏研究論文「慶長5年6月～9月における

徳川家康の軍事行動について」の中で、一次文書等にて犬山城加勢衆の行動や、関ヶ原合戦の布陣が解明された。また2017年には東京都立大学の谷口央氏が「関ヶ原の戦い時の美濃国諸將の動向」と題し岐阜県博物館で、加藤貞泰らの行動について講演された。いずれも貞泰研究において大変心強い援軍になりました。

関ヶ原合戦の伝記物や布陣図・屏風絵は、戦後の江戸時代に書かれたものが多く、これらに加藤貞泰の義兄である竹中重門の名はあっても、貞泰の名は殆ど見られません。しかし研究会の名知勲氏らの調査で、貞泰名の資料が存在していることが判明。

2014年、岐阜県と関ヶ原町が古戦場跡を世界三大古戦場に位置付け、再整備計画の発表があり、研究会は2015年に関ヶ原町役場に布陣図に基づき「岡山烽火場に加藤貞泰の名を」と運動。その後、烽火場附近の電柱看板に貞泰名の表示に至りました。

2019年、初めて関ヶ原古戦場「秋の武将まつり」参加が認められ、419年ぶりに加藤氏の蛇の目紋旗をなびかせました。

2020年秋には、「岐阜関ヶ原古戦場記念館」のオープンを迎えます。これを記念し、また研究会発足十周年の節目として、地元美濃に生まれた、加藤貞泰公の関ヶ原合戦に於ける活躍を知って頂くために、本書の改訂版を発刊するにいたしました。

ここにあらためて各地の資料館・図書館・寺院など絵図の利用許可や寄稿及び編集にご協力を頂きました皆様方に深く感謝を申し上げます。

令和2年8月1日

黒野城と加藤貞泰公研究会 会長 河口耕三



黒野城主 加藤左衛門尉貞泰

関ヶ原合戦の史料研究

目次

発刊・お祝いの言葉	岐阜県観光国際局長	矢本哲也	1
改訂版刊行に寄せて	岐阜市長	柴橋正直	1
はじめに	研究会会長	河口耕三	2
寄稿「加藤貞泰公と関ヶ原合戦」		高木優榮	6
<b>第一部 前哨戦</b> . . . . . 8			
(1) 黒野城主の一大事			9
(2) 美濃の武将			9
(3) 岐阜城主織田秀信の去就			11
(4) 関ヶ原の前哨戦			11
(5) 八月二三日 岐阜城攻撃			12
(6) 岐阜城陥落			12
(7) 大垣城へ			13
(8) 黒野城主加藤貞泰の去就			13
(9) 貞泰、関東に味方・弟平内を人質に			13
<b>第二部 書状など</b> . . . . . 16			
三月九日付 黒野城主加藤貞泰宛て徳川秀忠書状			17

七月七日付	家康、諸大名に軍令を定める	17
七月十七日	三成ら家康の罪を挙げ兵を集める	18
七月二十日付	貞泰宛て家康書状	19
七月二十日付	貞泰宛て家康下臣加藤太郎左衛門書状	20
七月二六日	織田秀信ら豊臣秀頼に味方	20
八月三日付	貞泰宛て酒井忠世書状	20
八月三日付	貞泰宛て家康書状	21
八月三日付	貞泰宛て永井直勝書状	21
八月五日頃	犬山城に加勢	22
八月七日付	貞泰宛て家康書状	23
八月八日付	犬山城主石川貞清(光吉)宛て家康書状	24
八月八日	石田三成、岐阜衆と協議	25
八月十二日付	井伊直政・本多忠勝宛て家康書状	25
八月十五日	貞泰弟平内、関東で家康の過分な待遇	25
乱れ飛ぶ禁制		26
八月 石田方・岐阜城主織田秀信の禁制		27
犬山城内で加藤・竹中どちらに味方するか談合		27
八月二二日	犬山城を開き渡し	28
八月二三日	岐阜城陥落	28
八月二四日付	竹中・加藤・関宛て井伊直政書状	29
八月二五日付	山内一豊宛て加藤図書書状	29
八月二四日以降	徳川方・池田輝政の禁制判物	30
八月二八日付	貞泰・関・竹中宛て井伊直政書状	31
八月二八日付	貞泰宛て本多忠勝書状	31

九月三日付	貞泰・重門宛て家康書状	32
九月三日付	貞泰・稲葉道重宛て福島ら四武将連名書状	33
九月四日付	犬山城主石川貞清宛て家康書状	34
貞泰、大垣城の押さえ・本田に布陣		34
九月五日付	貞泰宛て家康書状	35
九月十一日付	貞泰陣宛て本多忠勝書状	36

**第三部 犬山城の軍事行動について** . . . . . 38

- (1) 犬山城籠城と明け渡しⅡ白峰旬論文 . . . . . 39
- (2) 関ヶ原の戦いと美濃Ⅱ徳川家康の視点からⅡ谷口久著 . . . . . 42
- (3) 犬山城開城の主役は加藤貞泰 . . . . . 46

**第四部 関ヶ原合戦** . . . . . 47

九月十四日	家康、木田く芝原北方経て赤坂へ	48
九月十四日	貞泰、本田に布陣・赤坂で家康と謁見	49
九月十四日夜	西軍・大垣城く関ヶ原へ移動	50
九月十五日	関ヶ原本戦 黒田・加藤・竹中丸山狼火場着陣	51
合戦		53
貞泰、二番隊で島津隊と戦闘		55
九月十六日く	徳川方の勝利後	57
九月十九日付	竹中重門宛て家康書状	58
九月二十九日	貞泰宛て家康書状 鮎鯨の御礼	58

**第五部 関ヶ原合戦布陣図** . . . . . 59

- (1) 布陣図について . . . . . 60

- (2) 江戸時代の布陣図分析 . . . . . 61
- (3) 江戸時代の布陣図考察 . . . . . 61
- (4) 丸山烽火場附近布陣の考察 . . . . . 63
- (5) なぜ貞泰名が伝記物にないのか . . . . . 64
- (6) 関ヶ原合戦の考察 . . . . . 64
- 表1 江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図 . . . . . 66
- 表2 本書に掲載の布陣図紹介 . . . . . 67
- 表3 A類相当のその他布陣図 . . . . . 68
- 表4 布陣図に記載された家康方武将名の比較 . . . . . 69
- 表5 家康方軍勢の布陣の構成 . . . . . 70
- 表6 軍記物や編纂史料等における加藤貞泰の記述有無 . . . . . 71

布陣図紹介

- 図① 参謀本部編纂『日本戦史 関原役』布陣図 . . . . . 72
- 図② 『高山公実録』「関原戦場畧圖」 . . . . . 73
- 図③ 岐阜県図書館所蔵「濃州関ヶ原合戦図」 . . . . . 74
- 図④ 国立公文書館所蔵『慶長軍記』「関ヶ原戦場之図」 . . . . . 75
- 図⑤ 国立公文書館所蔵『武家事紀』「関ヶ原役圖」 . . . . . 76
- 図⑥ 大洲市立博物館所蔵『北藤録』「濃州関ヶ原合戦之図」 . . . . . 78
- 図⑦ 大垣市立図書館所蔵『関原御合戦物語』所収図 . . . . . 79
- 図⑧ 岐阜県図書館所蔵「慶長之役古戦場之図」 . . . . . 80
- 図⑨ 岐阜県図書館所蔵「関ヶ原合戦図」 . . . . . 81
- 図⑩ 岐阜県図書館所蔵「関ヶ原御陣図」 . . . . . 82
- 図⑪ 岐阜県図書館所蔵「関ヶ原軍陣立ノ図」 . . . . . 83
- 図⑫ 垂井町教委会タルイピアセンター所蔵「垂井陣取図」 . . . . . 84





## 寄稿 「加藤貞泰公と関ヶ原合戦」

関ヶ原町文化財保存審議会委員長

高木 優榮 まさしげ

竹中重門公は、合戦場となった我が郷土の関ヶ原、山中村をはじめとした、八カ村を領していました。加藤家と姻戚関係による繋がりがある岩手の竹中家では、合戦後次のようなことがあったと、伝えられております。

それは慶長五年八月初旬から九月初旬までの約一ヶ月間、西軍の前線尾張犬山城に出陣中の際、西軍よりいち早く東軍に加わった加藤貞泰公の勧めで、共に重門公も東軍に帰属したことが、竹中家の安泰に繋がったと、当家では感謝されてきたことです。

そのため、当家では何と明治初頭まで、貞泰公の肖像画を神像として掲げ、崇め手厚く祀られてきたと伝えられているのです。

如何にもうなずける話で、当時の領民にとって深い感動を受ける話です。

合戦後、竹中家のみならず、その知行地が安泰だったのは、明らかに加藤の殿さまのお陰だったことは、歴史的に万人が認めることであります。因み



竹中重門 家紋 九枚笹  
美濃岩手城主



加藤貞泰 家紋 蛇の目  
美濃黒野城主

す。さもなければ、合戦後の論功行賞では西軍を支援した村々はどうなっていたことか、計り知れたものではありません。石田村の二の舞の騒動に発展していたかもしれません。

近代において、今の繁栄があるのは、加藤の殿さまの救いの神のお陰と、各旧村としても貞泰公を崇めなければなりません。

同時に、当地関ヶ原における、東軍勝利なくして、その後の国の平和、文明化はなく、また経済成長もなく、合戦が国家の転換点となったことは明白な事実です。

次に旧山中村の、貞泰公、重門公に関わっての伝承を記します。合戦直前の九月三日には、いち早く大谷隊が山中村に到着し、

それを後押しする形で、石田三成より山中村郷士（庄屋）宛に書状が、火急のなか認めたと、嶋左近の奥書付で届いたのです。

その内容は、浮田、大谷両将の陣取場所等の指図を賜りたく、地案内を含め陣造り作業等の支援も頼むという趣旨でした。

その時、竹中の殿は西軍の一員として、犬山の攻防戦で、犬山城に貞泰公と有事駐留されていて、お取り込み中で留守でした。

に、西軍敗北後、石田三成出生地の江州石田村では、徳川の追求・搜索を恐れ、村人によりあらゆる史料は焼却処分され、あまつさえ石田家の先祖の墓石までも埋め隠すなど、三成事績は残らず抹殺せざるを得なかったのです。

貞泰公の実に見事な千里眼に感服で



**第一部  
前哨戦**



## (1) 黒野城主の一大事

天下統一を果たした秀吉、朝鮮出兵の影響で重臣らに内紛の兆しが生まれ始めた。豊臣政権の政務にあたった五大老、五奉行に次ぐ地位までなっていた加藤光泰が文禄二年(1593)朝鮮で死去し、甲斐国二十四万石を召し上げられ、嫡男の貞泰はその四ヶ月後の文禄三年(1594)一月、美濃国黒野に四万石で国替えとなった。六分の一にもなる大幅な減封は大変厳しいものであった。

だが、懐かしい故郷に戻れた喜びもあったのであろうか。信長の孫、岐阜城主織田秀信の与力として新たに赴任した領内の統治と城作りに励み、慶長三年(1598)、仮住まいしていた西改田の山田之城(現教徳寺)から黒野城の本丸に入る。

この年、秀吉が死去。文禄の役、慶長の役と続いた朝鮮出兵の疲弊、秀吉の世継を巡って豊臣政権に暗雲が立ちこめ、豊臣武将の覇権争いが始まり、武将の命運を決する、慶長五年(1600)九月十五日の関ヶ原合戦へと進んでいくことになる。

## (2) 美濃の武将

岐阜城には元城主織田信忠の子秀信が入部し、黒野城主加藤貞泰、郡上八幡城主稲葉貞道らがその与力格とされた。また大垣城には伊藤祐盛が入った他、文禄・慶長期までに、曾根城主西尾光教、垂井城主平塚為広、岩手城主竹中重門、今尾城主市橋長勝、福束城主丸毛兼利、高須城主高木盛兼、竹鼻城主杉浦重勝、松ノ

木城主徳永寿昌、加賀野井城主加賀野井秀望、清水城主稲葉通重ら、小大名たちが確定し、その状況は江戸時代にも引き継がれることとなる。関ヶ原合戦は前哨戦を含め美濃西部の諸将にも、一族の命運がかかる大きな出来事でもあった。

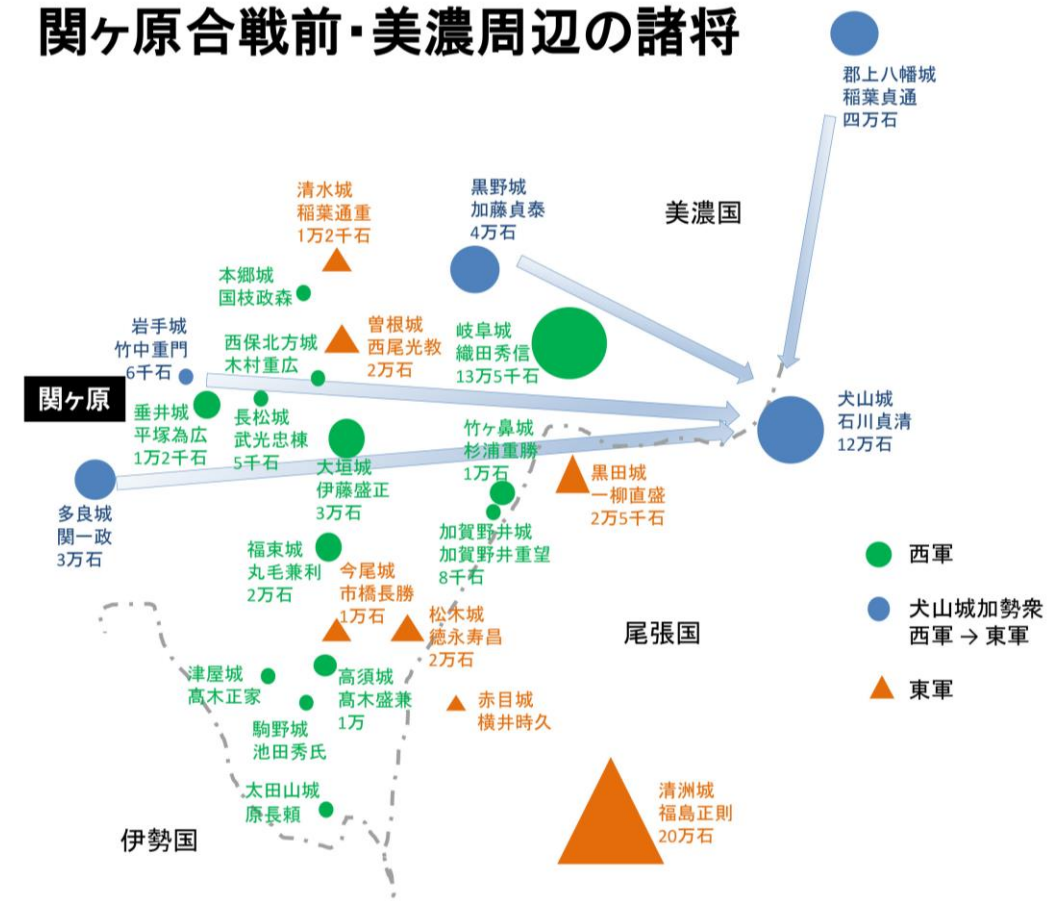
慶長五年四月一日、家康は会津の上杉景勝に謀反の疑いをかけ上洛を促した。これに対して上杉家の重臣直江兼継は、家康の非を促す文書(直江状)を送り返す。その文書に怒った家康は、諸大名を率いて上杉征伐へと諸大名に出兵を促す。

加藤貞泰(二十歳)は、岐阜城主の織田秀信(幼名は三法師・二十歳・十三万五千石)に従い、上杉討伐軍に加わる予定であった。秀信はこの時世の流れに合わない太閤秀吉のような華美な軍備調達で約十日遅れたため参戦の機を失ったとも、石田三成の勧誘に迷っていたともいう。

三成は、家康の大阪城不在に乗じて家康討伐の挙兵を企てた。このころ美濃の諸将らにも三成、家康双方から、味方になるよう誘いの情報合戦が続いた。

七月十六日、大阪城で石田三成が淀君らと毛利輝元を総大将で秀頼を立て、徳川討伐の挙兵をする。この頃、岐阜城主の織田秀信は、三成からの「西軍に付けば尾張、美濃国を与える」と誘惑の結果、西軍に決める。配下の加藤貞泰や竹中重門ら郷士の武将らは、秀信に同調せざるを得なかったようである。

## 関ヶ原合戦前・美濃周辺の諸将



## 慶長5年(1600)関ヶ原の戦い・美濃国内諸将

黒野城主 (方県郡) 四万石 加藤左衛門尉貞泰

多良城主 (石津郡) 三万石 関長門守一政

岩手城主 (不破郡) 六千石 竹中丹後守重門

郡上城主 (郡上郡) 四万石 稲葉右京亮貞通

清水城主 (大野郡) 四万石 稲葉甲斐守通重

はじめ石田方・後徳川方

松ノ木城主 (海西郡) 二万石 徳永法印寿昌

今尾城主 (安八郡) 一万石 市橋下諏訪守長勝

曾根城主 (安八郡) 二万石 西尾豊後守光教

小原城主 (加茂郡) 一万三千石 遠藤左馬助慶隆

妻木城主 (土岐郡) 一万三千石 妻木雅薬助家頼

東軍 (徳川家康方)

岐阜城主 (厚見郡十三万五千石) 織田中納言秀信

大垣城主 (安八郡三万石) 伊藤彦兵衛盛正

竹ヶ鼻城主 (中島郡一万石) 杉浦五郎左衛門重勝

高須城主 (海西郡一万石) 高木十郎左衛門盛兼

上有地城主 (武儀郡二万五千石) 佐藤才次郎方正

犬地寒城主 (加茂郡) 遠藤小八郎胤正

太田城主 (石津郡三万石) 原隠岐守勝胤

長松城主 (不破郡五万石) 武光式部忠棟

福東城主 (安八郡二万石) 丸毛三郎兵衛兼利

苗木城主 (惠那郡一万石) 川尻肥前守直次

岩村城主 (惠那郡四万石) 田村中務大輔具忠

北方城主 (安八郡一万石) 木村惣右衛門重則

西軍 (石田三成方)

「徳積町史」通史編より



「織田秀信肖像画」  
岐阜市 円徳寺 所蔵  
(岐阜市歴史博物館寄託)

### (3) 岐阜城主織田秀信の去就

● 『岐阜市史』通史編 近世 第四節 関ヶ原合戦(19、20頁)

秀信は、はじめ家康に加盟して、会津の上杉景勝討伐に向かう手はずであった。しかし「平常華奢を好むを以て、軍旅の美麗ならんことを欲し、其調度に時日を費し、期を過れど未だ発せず」『関ヶ原合戦図志』といった時代ばなれのていたらくから、ついに参戦の機を失ってしまった。七月朔日の出発を十余日も遅延してしまつたといわれる。

そうしたところへ、石田三成から美濃・尾張兩國を与えるからという甘い誘いがかかった。重臣木造具政と百々綱家は、家康が織田家との同盟をながく守ってきたこと、世の大勢は家康にかたむいていることを秀信に説いて家康に応ずるよう進言した。さらに具政らは、かねて信忠の遺命で秀信を補佐してきた前田玄以に

も相談したが、玄以も織田・徳川両氏の古くからの盟約を説き、家康につくよう助言した。家康も思い直すようながしてきた。秀信はこれらすべてをしりぞけて三成方につくことを決してしまつた。

生死にかかわる戦いの門出を飾って、豪勢奇抜な趣向を競うのは、かつての秀吉が率先してやったその時代の風潮であった。時代の推移をわきまえぬ秀信は、重大な時局に直面し、この本末を顛倒してしまつた。もつとも秀信には信長の嫡孫という空しい優越感があつたこともいなめない。ともかく家康を向こうにまわし、みずからの運命を逆転させてしまつた。時に弱冠十七歳であつた。そこで東軍はまず合戦の前哨戦を、この岐阜城攻撃に求めることになつた。

### (4) 関ヶ原の前哨戦

● 『岐阜市史』通史編 近世 第四節 関ヶ原合戦(20、21頁)

秀信が石田方につくとの知らせは、美濃国内でその去就に迷つていた諸将でこれにならう者を増加させた。石田三成は、伊藤彦兵衛盛正の守る大垣城を、八月十一日押し借りすることに成功し、島津義弘(維新)・同豊久・小西行長らが大垣城に招いて軍議のすえ、これら諸将を濃尾方面の防御に出動せしめることにし、自らはいったん近江佐和山城に入って待機することになつた。

三成は八月下旬、岐阜城へその家臣河瀬左馬助・柏原彦右衛門・同内膳・大西善左衛門・松田重大夫らを増援させたので、その守兵は、六、五〇〇となつた。木曾川の対岸犬山城には、石川備前守光吉(大谷吉継女婿)があり、豊臣氏麾下(直属の家来)の弓

銃隊一、七〇〇の援軍をえて石田方に属した。竹ヶ鼻城主杉浦五郎左衛門重勝には、三成から援軍毛利掃部らが送られてきた。

さらに三成は、尾張黒田（木曾川町）城主一柳監物直盛を招いたが応じなかった。また、清洲城主福島正則の留守居大崎玄番長行に開城を強要したが、玄番の胆勇にはばまれてこれも失敗した。この失敗は石田方当初の作戦に齟齬をきたし、主戦場を西濃地方の極限の線まで後退せざるをえなくなった。後日、家康は、関ヶ原の大勝は、玄番の清洲城死守によると、その功を褒めたたえたという『古老物語』。

こうして三成は、犬山・岐阜・竹ヶ鼻の三城を前線拠点とし、大垣城をその要として、東軍家康方にそなえた。

清洲に合同した東軍先登隊の諸将は、八月二十一日田中吉政と中村一栄の軍を尾張羽黒（犬山市）付近に出して犬山城にそなえ、その他は二手に分かれて岐阜に向かった。

福島正則・黒田長政・加藤嘉明・藤堂高虎らの一隊16、000は木曾川の下流尾張越（尾西市）の渡しに、一方、池田輝政・浅野幸長・一柳直盛らの一隊18、000は、上流の尾張河田（一宮市）の渡しに向かい、正則の軍が渡河し終わった合図の烽火を待つて、両軍いっきに岐阜城へ攻撃をかける手筈になっていた。これに対する秀信は、岐阜城を固守して大垣からの援軍を待つという木作具政の意見を用いず、諸将を木曾川右岸に配置し、清洲らの軍を迎撃する作戦に出た。秀信は城外加納の南にある川手村に出撃し、その家老木造具政・百々綱家をはじめ、上有地（美濃市）城主佐藤才次郎方正、三成の援軍河瀬左馬助など3、200の兵を新加納村と米野村の間に配置した。

八月二十二日の払暁、池田輝政の軍が河田の渡しより渡河に成功し、全面の秀信の守兵を敗走させたので、秀信は城内に引き揚げた。一方、下流に向かった福島正則の軍は、予定地点より少し下流の加賀野井村より渡河し、まず竹ヶ鼻城を陥れて、城将杉浦五郎左衛門重勝を自害せしめ、ついで岐阜城に迫った。

### （5）八月二三日 岐阜城攻撃

秀信は岐阜城へ敗走してきた八月二十二日夜、緊急会議を開き、城の外郭防衛のことを議決した。一方、東軍側は、福島正則、浅野幸長・本多忠勝・井伊直政らは、瑞龍寺山砦と追手口から、池田輝政らは搦手口から攻撃することとした。

その翌二十三日早朝、岐阜城攻撃はまず浅野幸長の兵五、〇〇〇により、瑞龍寺山砦に向かって開始された。瑞龍寺山の下を進んだ福島正則と、岐阜町口より進んだ加藤嘉明らが合流し、七曲口（追手口）と百曲口に進んだが、正則が市街地に火を放ったので進むことができず、さきの円清の情報にしたがい、西へまわって長良川沿いに水之手口より進んで本丸に迫った。

### （6）岐阜城陥落

秀信の城兵は二ノ丸にとどまって防戦に努めたが、東軍が続々本丸に突入し、ついに城中は秀信の従士三十六人と、来援の河瀬左馬助・大西善左衛門のみになった。東軍は八月二十三日城に火



を放つて城内に殺到した。こうしてついに岐阜城は陥落し、秀信は自害しようとしたが、具政・綱家ら重臣のすすめで投降し、上加納の常泉坊（円徳寺）に入つて剃髪した。そして尾張知多郡に移され、やがて高野山に送られ、慶長十年（1605）五月八日、二十二才で没した。信長の岐阜入城以来三十三年目で、織田氏家は三代で断絶した。

### （7）大垣城へ

東軍の岐阜城総攻撃にあつて、予想される西軍の岐阜来援を阻止するため、黒田長政・藤堂高虎らの東軍先鋒隊は、福島正則の本体と分かれて大垣城へ向かい、八月二十四日赤坂に本営を設けて、家康の来陣を待つのみであつた。

### （8）黒野城主加藤貞泰の去就

●『岐阜市史』通史編 近世 第四節 関ヶ原合戦（23、24頁）

家康は慶長五年六月、関東の諸将に会津の上杉景勝討伐の出兵を告げ、みずからも大坂を出発した。黒野城主加藤貞泰は、岐阜城主織田秀信にしたがつて家康軍に馳せ参ずることになつていゝた。貞泰は父光泰が「三成の讒に逢いたる事をしれば、いかにしても東国の御方して、其仇むくはんと思ひしかど、僅かなる勢にてはともかくも叶ふべからずとて、ためらふうちに」『徳川実記第二三〇〇頁』、石田方より犬山城を守ることを命ぜられた。しかし、



「加藤貞泰肖像画」  
愛媛県 大洲曹溪院 所蔵

家康がとつてかえして三成討伐に西上するとき、弟平内光直を人質として出し、不破郡岩手村の竹中重門（半兵衛重治の嫡子）とともに、家康の小田原陣中に二心なきことを伝え

た。そして、重門らと犬山を去り赤坂で家康に会い、井伊直政の指揮下に入つて本巢郡本田村に発向し、大垣城に対陣した。関ヶ原合戦が終つてから、郡上八幡城の稲葉貞通とともに、長束政家の近江水口城に向かったが、政家が一戦もまじえず城をすてて走つたので、貞泰らは家康にしたがつて大坂へ向かつた。……『徳川実記』（第二二二五頁）

### （9）貞泰、関東に味方・弟平内を人質に

|| 岐阜城落城を早めた犬山城加勢衆の動向 ||

|| 通説、「落城したので徳川に寝返つた」は、間違い ||

●『北藤録』巻之九 貞泰之伝（61頁）

一 秀吉公ノ命ヲ蒙リテ、貞泰新タニ黒野ノ城ヲ築ク。此地在城ノ内從五位下ニ叙シ、左衛門尉ニ任セラル。



一書二、此所住居十七年ナリト云フ。

●『大洲秘録』御家伝 貞泰（27頁）

文禄三年甲午 貞泰十五歳 甲州より濃州黒野江所替 四万石を領す 此故は 父光泰石田三成と不和なるによつて 三成秀吉公へ讒言申上るにより 光泰軍功空敷なり 甲斐国二十四万石をも召上 家督減少仰付らる 秀吉公の明智にて佞人石田に惑され給ふ事誠に可レ 惜事 なり 黒野在城の内 従五位下左エ門尉ニ任ぜらる 一書に 此居住十七年といふ 慶長三年 戊戌 秀吉公御佗界あり 同五年庚子 石田等謀反を起し 秀吉公の御子秀頼公の仰と偽り諸大名を催し濃州関ヶ原に出陣す 家康公御征伐なり 此時石河備前守貞清居城尾州犬山の城在 番二貞泰向ふへき旨三成下知すれとも 貞泰石田二恨あるニよ



「加藤光泰肖像画」  
東京大学史料編纂所蔵

り 関東の御味方となり 弟平内光直を人質の為江戸へ遣す。

後家康公より美濃国大野郡公郷村に於て三千六百石光直に下され 其後光直従五位下に叙し遠江守に任せらる 偕 貞泰

謀を廻し 城主貞清をして城 明退 しめ 度々飛札を以家

康公へ言上す 御感之余り御書教通を下さる

●『北藤録』卷之九 貞泰之伝（61頁）

一 慶長三年（二五九八）戊戌八月秀吉公薨去アリ、同五年（一六〇〇）

庚子石田治部少輔三成謀叛ヲ起シ、秀吉公ノ幼君秀頼卿ノ仰ト偽リ、諸大名ヲ催促シ濃州関ヶ原ニ陣ス。東照宮御征伐ナリ。

貞泰兼テ東照宮ノ御懇意ヲ蒙リ、其上石田三成ニ宿意アルニ依テ、関東ノ御味方ニ属シ無ニノ忠勤ヲ尽ス。

同年七月、東照宮奥州会津上杉中納言景勝ヲ御退治トシテ伏見ヲ御発向ナリ。石田三成兼テ景勝等ト牒シ合、諸大名ヲ語ラ

ヒ、其虚ニ乗シテ上方ニ於テ逆意ヲ企ツ。貞泰元來関東御味方ナレトモ、止事ヲ得スシテ暫ク石田力差図ニ随ヒ、尾州犬山

ノ城（城主石河備前守貞清）ノ加勢ニ赴ク。

●『北藤録』卷之九 貞泰之伝（61・62頁）

一書二、此時石田力方へ人質ヲ取ケレハ、貞泰ヨリ一人加藤図書光定力娘（貞泰と従弟ナリ、姫ト称差出ス）、竹中丹後守重門ヨリモ一人ヲ遣ス。図書力娘ニハ林孫太夫山利（当時市郎左衛門、山錦先祖）従

テ出ケルニ、石田カ勢ヒ次第二悪敷見エケレハ、如何ニモシテ盗出シ連帰ラント思ヒ、竹中家ノ臣ト云合ス。兩人質何レモ七、八歳計リノ小兒ナレハ、葛籠ニ入テ堀越ニ投出シ連テ立退ケル。此時凶書カ娘葛籠コシニ石垣ニ当リ、足ヲ損シ傷シカ生涯脚跛ナレリ（後渡辺次太夫ニ嫁ス。老後貞閑尼ト号ス）

又、貞泰ノ室（法願院）ハ、稲葉長右工門（当時稲葉八左衛門、豊矩先祖 留守ヲ預リ在ニ伏見一タリシカ、世上物騒敷、諸大名ノ妻子ヲ石田方ヘ仰取由 風説頻リニテ 甚難儀ニ及フ、内室此事ヲ聴テ、若人質催促ニ及ハ早く告知スヘシ、自害スヘキノ由ヲ長右衛門ニ命シケレトモ、大坂ニ於テ細川越中守忠興ノ室生害アリシ故、其後ハ催促ノ沙汰モナク、其難ヲ遁シトナリ。  
然レトモ、貞泰先達テ関東ヘ度々使冊ヲ呈シ、殊ニ弟平内光直ヲ人質トシテ野州小山ノ御陣所ヘ差下シ、又、竹中丹後守重門ト相議シ、犬山加勢ノ内、稲葉右京亮貞道父子、関長門守一政ヲモ関東御味方ニ属セシメケル。

●『北藤録』卷之九 貞泰之伝（62頁）

一書ニ曰。犬山ノ城ハ東山道・東海道両所ヲ差塞ク要害ノ地ナリ。木曾川ヲ越シニハ犬山ヨリ差塞キ、或ハ後口ヲ絶シニハコスコト叶 難キト古ヨリ云伝フ。ナレハ、岐阜（本名織田）中納言秀信・石田三成下知トシテ差向ル面々ニハ、加藤左衛門尉貞泰、竹中丹後守重門（濃州岩手城主、六千石ヲ領ス）、稲葉右京亮貞通（濃州郡

上城主、子息彦六則通、関長門守一政（濃州土岐多良、一万石ヲ領ス）、田丸中務少輔具直（濃州岩村城主、一万石ヲ領ス）、其外大坂弓鉄炮ノ頭七千余、加勢トシテ犬山ニ籠ルノ所、加藤・竹中既ニ裏切ノ沙汰アリ。稲葉父子モ是ニ同スルノ聞ヘアツテ、城中互ニ心ヲ置合ケレハ、手彊キ働モ叶ヘカラサルノ由石河備前守貞清ヨリ岐阜大垣ヘ注進ス、是ニ依テ逆徒大ニカヲ落シケリ。

其後関東ヨリ先達テ上ラレケル福島左衛門大夫正則ヲ初メ其外ノ諸將岐阜犬山ノ城攻ラルヘキ評定アリケルカ、犬山ノ加勢ノ内加藤・竹中・関・稲葉ノ面々、井伊直政・本田忠勝ヘ相通ルノ子細アレハ、犬山押勢計リヲ置テ岐阜城ヲ攻ヘキニ究リケル。

●『北藤録』系譜 卷之十九 籠流世系 遠江守光泰次男（240頁）

光直 平内 従五位下遠江守、母一柳藤兵衛女  
室本多因幡守俊政女。天正十二年（一五八四）甲申近江国ニ生ル。兄左衛門尉貞泰ノ所ニアツテ、慶長四年（一五九九）己亥、榊原式部大輔康政ニヨツテ始テ東照宮ニ拝謁奉ル。同五年庚子、東照宮上杉中納言景勝ヲ征伐シ玉フ。光直モ供奉ノ列タレトモ病ニ依テ御跡ニ止ル。此時上方ニテハ石田治部少輔三成謀反ヲ企テ諸大名ヲ語フ。兄貞泰関東無ニ御味方ナルニ依テ、光直ヲ人質ト為病中タリトイヘトモ関東ニ差下ス。

第二部 書状など

(慶長四年)

三月九日付 黒野城主加藤貞泰宛て徳川秀忠書状

徳川家康の嫡子秀忠は、文禄四年(1595)に秀吉の養女・江と再婚する。秀吉の時代に多くの武将が羽柴の名字を与えられている。なお秀忠は加藤貞泰より一つ年上になる。

●『北藤録』巻之十三 貞泰(120頁)

台徳君秀忠公ヨリ賜ル御書ノ写

先日以<sup>二</sup>鶴殿兵庫頭<sup>一</sup>如<sup>二</sup>申入候<sup>一</sup>、各より内府へ御断御座

候処、被<sup>レ</sup>任<sup>二</sup>御異見<sup>一</sup>入魂被<sup>レ</sup>申候由、令<sup>二</sup>満足<sup>一</sup>候。

弥可<sup>レ</sup>然様<sup>二</sup>頼入候<sup>一</sup>。猶重而可<sup>二</sup>申延<sup>一</sup>候。恐々謹言。

三月九日

羽柴武蔵守 秀忠公御書判

加藤左衛門尉殿 御宿所

考ルニ、慶長三年 戊戌太閤秀吉公薨去後、四大老ト東照宮御

不和ナリ、翌慶長四年己亥二月ニ至リ、四大老前田大納言利家・

上杉中納言景勝・毛利中納言輝元・宇喜田中納言秀家ト東照宮御

和談之時、貞泰兼テ御懇意ニヨリ其事ヲ取扱シ節、台徳君ヨリ此

御書ヲ賜シナルヘシ。

慶長五年

七月七日 家康、諸大名に軍令を定める

会津征伐前、家康朱印状の写しが加藤家に残っていたといふことは、黒野城主にも送られていたと思われる。

●『北藤録』巻之十三 貞泰(121頁)

慶長五年庚子、東照宮奥州会津上杉中納言景勝御征伐之節御軍令之写

軍法事

一 喧嘩口論堅令<sup>二</sup>停止<sup>一</sup>訖。若違背之輩に於ては、不<sup>レ</sup>論<sup>二</sup>理非

一 双方可<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>成敗<sup>一</sup>。其上或傍輩成知音の好を以令<sup>二</sup>荷担<sup>一</sup>

は、本人より曲事たるの間、急度可<sup>二</sup>成敗<sup>一</sup>、若令<sup>二</sup>用捨<sup>一</sup>者

一 仮雖<sup>二</sup>後日相聞<sup>一</sup>、其主人可<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>曲言<sup>一</sup>事。

一 於<sup>二</sup>味方地<sup>一</sup>放火濫妨狼藉仕にをひては可<sup>レ</sup>加<sup>二</sup>成敗<sup>一</sup>事。

一 付、於<sup>二</sup>敵地<sup>一</sup>男女不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>乱取<sup>一</sup>事。

一 味方之地作毛をとり散し、田畑中に陣取事堅停止の事。

一 先手へことハらすしてもものミを出す義堅停止之事。  
ぎかたくていしのこと。

一 先手を差越飯雖レ令ニ高名一、背ニ軍法一上は可ニ成敗一事。  
せんで さしこしかりにこうみょうせしむるといへども、ぐんぼうにそむくうえ せいばいすべきこと。

一 為レ無ニ子細一他之備へ相交、ともかく在レ之者、武器・馬と  
しさいなくして ほかのそなえ あいまじり、 これあらば、 ぶぐ うま

一 もに可レ取レ之。然ニ其主人及ニ異儀一は、是以可レ為ニ曲事一候。  
これをとるべし。 しかるにそのしゅじん いぎにおよば、 これもつてくせことたるべくせうろう。

一 但於レ有ニ用所一は其備へあひことはり通るへき事。  
ただしようしよあるにおいて、そのそなえ

一 人数押の時、脇みちすへからさる由堅可ニ申付一、若みたり  
にんずうおし (脇道) べ ざ よしかたくもうしつぐべし、 もしくは

一 に通に付てハ可レ加ニ成敗一事。  
とおる つき せいばいをくわうべきこと。

一 諸事奉行人の指図を違背せしめば加ニ成敗一事。  
しよじぶぎようにん さしず (違反) せいばいをくわうべきこと。

一 時の使として如何様の人を指遣といふとも不レ可ニ違背一。  
とき つかい いかよう さしつかわす (違反) いはいすべからず。

一 若右の旨そむくにをみては可レ為ニ曲言一事。  
もしみぎ むね くせことたるべきこと。

一 持鐘は軍役の外たるの間、長柄をさし置もたす事かたく停  
もちやうり ぐんやく ほか あいだ、 ながえ おき(停) こと

一 二止之。但、長柄之外令レ持は主人馬廻りに壺丁たるへき事。  
これをていしす。ただしながえのほかもたしむ しゅじんうまわ いっちょよう こと。

一 小荷駄押の事兼るニ可ニ相触一候条、軍勢ニ相交さる様ニ堅  
こにだおし ことかね あいふれるべくせうろうじよう、ぐんせい あいまじら ようにかたく

一 可ニ申付一。若狼ニ相交は、其者可ニ成敗一事。  
もうしつぐべし。 もしみだりにあいまじら そのものせいばいすべきこと。

一 諸商売押買狼藉かたく令ニ停止一、若於ニ違背之族一は見あひ  
しよしやうばいおしがいろうぜき ていしせしむ、 もし(違反)のやからにおいて

一 に可ニ成敗一事。  
せいばいすべきこと。

一 無ニ下知一而於ニ陣払仕一は可レ為ニ曲言一事。  
げちなくしてじんばらいつかまつるにおいて、くせことたるべきこと。

一 於ニ陣中一人返之義一切令ニ停止一事。  
じんちゆうにおいてひとかえしのぎいつさいていしせしむること。

一 右条々於ニ違背之輩一は無ニ用捨一可レ加ニ成敗一候也。  
みぎじようじよう (違反)のやからにおいて、ようしやなくせいばいをくわうべくせうろうなり。

慶長五年七月七日

家康公 御朱印

備考 徳川家康文書総目録。「加藤家文書」の他に「友部文書」、「本田家文書」、「鈴木重信氏旧蔵文書」の四通存在。

七月十七日 三成ら家康の罪を挙げ兵を集める

「内府ちかひの条々」



石田三成が挙兵し、西軍の代表、前田玄以・増田長盛・長束

正家などが連署して、豊臣秀吉が生前に定めた取り決めを守らない徳川家康への批判を書いた十三ヶ条からなる書状。この書状が、「秀頼公の命令」として全国の大名に届けられた。内府ちかひの条々が送付されたことをもって、西軍が挙兵したとされている。内府ちかひの条々の意義は、「上杉景勝に落ち度はなく、会津征伐は家康の独断である。」と弾劾した。これにより、家康は、会津征伐の名分を失い、江戸城に戻るとい判断を余儀なくされた。大義名分を失った家康は、江戸で一ヶ月身動きが取れなくなる。

### 七月二十日付 貞泰宛て家康書状

#### 上杉討伐、貞泰出陣延期の報に返書

「加藤貞泰が上杉討伐に加わる予定であったが雑節（噂話）（石田三成・大谷吉継と安国寺恵瓊の反家康の動きなど）があったため、これを監視するため従軍を延期することを貞泰が報じたのに対し、家康はもつともである、いよいよ岐阜城主の織田秀信談合ありて処置することが重要である。なお加藤太郎左衛門（家康家臣）から伝えます。と返書。」

● 『北籐録』 卷之九 貞泰之伝（63頁）

就其元雑説一出陣延引之由尤候。

愈岐阜中納言殿有ニ談合一仕置等肝要候。

猶加藤太郎左衛門可レ申候。恐々謹言。

七月廿日

加藤左衛門尉殿

家康公

御諱御書判

備考Ⅱ徳川家康文書総目録 有村松雲堂所蔵文



「徳川家康肖像画」  
岐阜市西荘 立政寺 所蔵

関ヶ原合戦直前の9月13日、家康が岐阜を通過したその最、立政寺の住持らが接待したとされる。

立政寺は明智光秀と細川藤孝の仲介により織田信長が將軍足利義昭を迎えた場所。

七月二十日付 貞泰宛て家康下臣加藤太郎左衛門書状

「雑節（うわさ）で出陣延期の理由分かりました。平内の病氣回復するまで待ちます。家康もそのように申される。こちら徳川の動きを伝え明日二十一日、家康出馬します。」  
貞泰は、上杉討伐不参加で、徳川へ忠誠の証しに弟平内を人質として江戸に差し出すことを伝えていたことになる。

●『北藤録』巻之十三 貞泰（122頁）・『大洲秘録』御家伝（30頁）

慶長五年庚子関ヶ原御陣之節、東照宮台徳君ノ御家臣ヨリ  
往復書状之写

就其許雑説一、御出陣被ニ相延一候由被ニ仰越一候。  
尤之由御返事被レ遺レ之候。不レ及レ申候得共、無ニ御油断一、  
岐草へ被ニ仰合一候得は懇被レ申候。随而平内殿御煩御養  
生次第に下待申候。内府も一段懇ニ被レ申候。爰許之儀  
昨日十九日、武蔵守出陣被レ申、明日廿一日内府出馬之旨、  
万事追而可ニ申入一候間、早々申入候。恐惶謹言。

七月廿日  
（加藤）  
加 左衛門尉様 令御中  
加 太郎左衛門  
（加藤）家康家臣

おつてもうしそろう。このたびのひまぐいちだんにふいものにて、さそろうあいた、かさねて  
追而申候。此度之飛脚一段驚者ニ而御座候間、重而は人を  
おえ おおせつけらるべくそろう、いじよう。  
御多らび可レ被ニ仰付一候、已上。

七月二十六日 織田秀信ら豊臣秀頼に味方

●『愛知県史』資料編13（647頁）  
中川秀成宛 長束正家・増田長盛・前田玄以連署状の一部

「三奉行（前田玄以・増田長盛・長束正家）は中川秀成に対し  
て、濃州のことは、織田秀信（岐阜城主）・稲葉貞通（美濃郡上  
八幡城主）と大垣城・犬山城は既に秀頼様に忠節をすることに  
きまり、人質を進上した」と報じた。

八月三日付 貞泰宛て酒井忠世書状

●『北藤録』巻之十三 貞泰（123頁）  
上方の騒ぎにつき貞泰から徳川秀忠に書状を送ったのに対し  
る返書。

八月三日付 貞泰宛て家康書状

「病中の平内、関東に差し出され喜ばしいことです。近日上洛  
しますのでご安心下さい。永井直勝から更にお伝えします。」  
●『大洲秘録』一 御家伝（28頁）

なおお（徳川秀忠） 猶々中納言以二書状一可レ被二申入一候得共、路次中如何候  
間、以二書状一不レ被二申入一候。其様御心中之通具御使  
如二御覽一 中納言可二申聞一候、已上。  
上方念劇二付而御使者被レ入ニ御念ニ之通委細中納言ニ為  
二申聞一候、遠路早々被二御達一之談祝着二被存候。  
具二自ニ拙者一相心得可ニ申達一之旨被レ申事候。委曲儀、  
口上二可レ被二申達一候間、不レ能レ具候。恐惶謹言。

八月三日 酒井右兵衛大夫 忠世判  
加藤左衛門尉様 貴居

八月三日付 貞泰宛て永井直勝書状

「二度の使者と病中の平内出陣に対する家康の賞詞を伝え、  
併せて家康軍の概況を報じた。」

●『北藤録』卷之十三 貞泰（122頁）・『大洲秘録』御家伝（30頁）

両度之御使者、殊平内殿御病中之処御出陣、一段祝着  
被レ申候。将亦爰二元之様子丈夫ニ被ニ申付一、近日上洛  
之事候間、其御心得可レ被レ成候。次政宗向ニ会津一出陣、  
白石之城被ニ責落一、数百人被ニ討取一、物主魁被ニ生取一

已入念使者 殊平内病中候之処被ニ差越一令ニ祝着候  
其元氣を察入候 近日可レ令ニ上洛一候之間、  
可二御心易一候 猶永井右近大夫可レ申候 恐惶謹言

八月三日 御諱 御判（家康公）  
加藤左衛門尉殿

のよしちゆうしんをうろ。このくちのばんじおころやすかるべくせうろ。いかようまかりのぼり、ばんばん  
 之由注進候。此口之万事可ニ御心安一候。如何様罷上、万々  
 ぎよいをうくせうろあいだ、つふさにあたわすせうろ。きようこうきんげん  
 可レ得ニ御意一候間、不レ能レ具候。恐惶謹言。

八月三日

永井右近大夫 直勝

加藤左衛門尉様

ひとびとおんちゆう  
人々御中

八月三日までの書状には犬山加勢のことを触れていないので、この頃に犬山城加勢に入ったと思われる。

## 八月五日頃 犬山城に加勢

●『関原軍記大成』第二卷（117頁）

犬山の城主石川備前守 數

（貞清の誤記）  
つぎょうすけ

正に、稲葉右京亮・同彦六・田丸中

務少輔・加藤左衛門佐・関長門守・竹中丹後守・伊東對馬守、其

外大坂より下りし弓・鉄炮の者頭兩人差加へらる。

●『武家事紀』中（209頁）

岐阜ノ手前ニ尾州犬山ノ城アリ、此ノ城ニハ石河備前守貞清

ならびに

在城ス、中納言秀信并石田三成力下知ヲ以テ加藤左衛門尉貞泰  
 濃州黒野城主四萬石 竹中丹後守重門 濃州岩手城主六千石 稲葉左京亮 同  
 彦六 関長門守 濃州土岐多良一萬石 田丸中務 濃州岩村城主一萬石 其外  
 大坂弓鉄炮衆ノ頭七千餘あまり 加勢トシテ犬山ニ楯籠ル間、先此城ヲ  
 可レ攻ヤ否ヤト評定アリケリ、犬山ノ加勢加藤・竹中・関・稲葉ハ  
 井伊・本多ニ内々申ヨツテ返忠ノアリ、シカラバ犬山ハサセル働  
 不レ可レ有レ之、・・・

●『北藤録』卷之九 貞泰之伝（65頁）

一書ニ曰。犬山ノ城ニハ、石河備前守貞清城主ニテ、加勢トシ  
 テ加藤左衛門尉貞泰・竹中丹後守重門・関長門守一政・稲葉右京  
 亮貞道・同彦六典通、并 摂州御旗本弓鉄炮ノ頭都合七千七百  
 余ニテ楯籠リケレハ、・・・

●『関ヶ原合戦史料集』・「慶長見聞記」（219・220頁）

八月五日

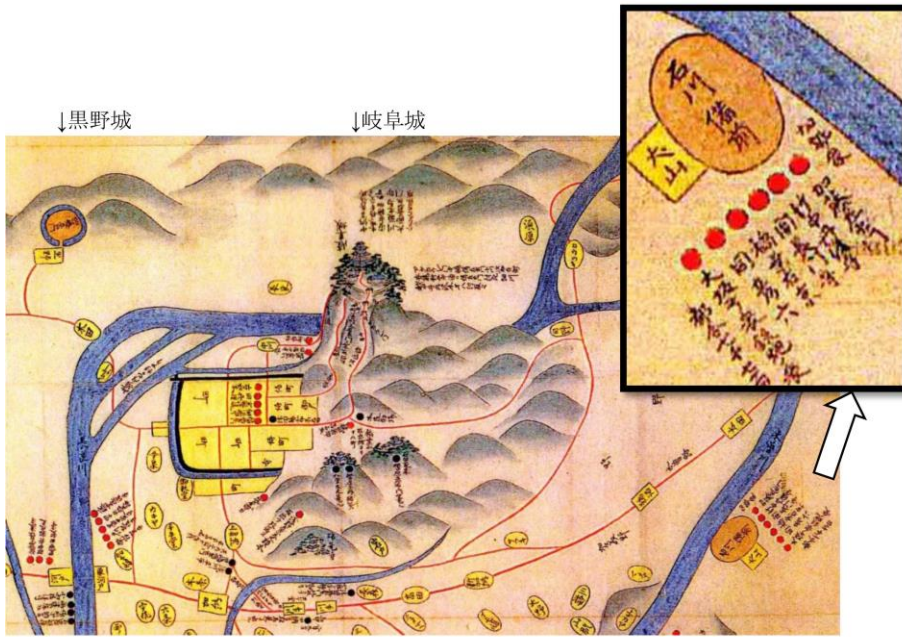
一 犬山城石河備前守城主也 加勢人数之事

一 稲葉右京亮 羽柴彦六 生熊玄番頭 加藤左衛門

弓之衆 鉄炮之衆 壹千七百余騎也

●『関ヶ原合戦史料集』「石川忠総留書」（220頁）

犬山城 石川備前・稲葉右京・羽柴彦六郎・生熊玄番・竹中  
 丹後・伊藤對馬・加藤左衛門尉、是等七人と相抱あひいだく 犬山城加勢衆、  
 合わせて七、七〇〇余人



図③ 「濃州関ヶ原合戦図」(部分) 年代不明  
岐阜県図書館 所蔵 請求番号204.9/セ-3

● 『関ヶ原大條志』三・四  
 犬山ノ城工聞エケレハ石川備前守・伊藤対馬守以ニ飛脚岐阜表  
 加勢ノ中エ此由ヲ云遺聞之稲葉右京亮貞道・同彦六・同甲斐・加藤  
 左衛門・竹中丹後・関長門守等犬山の加勢タリ岐阜秀信ノ指圖也  
さしすなり

八月七日付 貞泰宛て家康書状

「この度、平内病中であるにも差し出され満足に思います。  
 引き続き大久保長安から申し上げる。」

● 『大洲秘録』一御家伝(28頁)・『北藤録』貞泰の伝(64頁)

このたび いえどもびょうちゆうそうろう、おさししこんいのだんあさからすそうろういよいよこによきなく  
 今度平内雖病中候 御差越懇意之段不レ浅候 弥無ニ御如在  
 一候者 尤可レ為ニ祝着一候 猶大久保十兵衛可レ申候  
(長安) もつすべそうろう  
 きようきようきんげん。  
 恐々謹言。

八月七日 家康公 御諱御判  
おんいみなおんはん

加藤左衛門尉殿

● 『国史大系 徳川実記』第二編 吉川弘文館(258頁)

慶長五年石田治部少輔三成逆謀を企るに及んで、貞泰も其催促  
 に応じ、竹中丹後守重門、稲葉右京亮貞通、関長門守一政等と共に、  
 犬山城に籠りしかども、貞泰、三成には舊怨をふくみし程に。  
こも きゆうえん  
 (貞泰が父光泰は朝鮮より帰陣せし時、三成謀りて毒殺せしがゆ  
 へなりとぞ) 関東に志を通じ、弟平内光直を人質に獻じ。その九月



江戸よりお出馬有て、小田原に御止宿の時、貞泰は重門と共に飛札を獻じ、彌二心なきをあらはしければ、御感の御書を給る

八月八日付 犬山城主石川貞清（光吉）宛て家康書状

家康が石川光吉に返書を送り、光吉兄弟への信頼を表明する。詳細は田中清六が申し伝える。

●『愛知県史』資料編13（659頁）・譜蝶余録卷三十六

先度飛脚到来之砌可為返札之处、飛脚其儘立帰候間、無其儀候、其方兄弟之事連々懇切之事候間、弥不可有無沙汰与存候、

委細田中可申候、恐々謹言

八月八日

（光吉）

石川備前守殿

御諱御判

（家康）

●『石田軍記 全』国史研究会 大正3年（154頁）

尾州犬山城従西軍籠置兵卒事

尾州犬山は、石川備前守城主として之を守りける。加勢の大将

には、濃州岩手の城主竹中丹後守重門・同国郡上城主稲葉右京進貞通・同息彦六一通・加藤左衛門・関長門守等、都合其勢一万余騎にて楯籠り、二の丸をぞ堅めける。遠藤但馬守・西尾豊後守忠政は、東軍一味たるに依つて、八月廿日稲葉右京が郡上の城を攻むる所に、金森法印・同息出雲守、関東より馳来りて、又此陣に加はりけり。稲葉は犬山の城二の丸を固めて居たりしが、之を聞き、即時に來り後詰して、早合戦を始めて、関の音鉄砲の響、雷の激する如く聞こえる最中に、稲葉も豫てより東軍に内通あるに依て、早速に和睦して、互いに陣をぞ引いたりける。関長門守・加藤左衛門、此等も俱に内通して、内府君に降参をぞしたりける。

●『武家事紀』中（210頁）

秀信・三成方ヨリ大分ノ加勢ヲツカワシ置ノ處、加藤・竹中ステニウラ切ノ沙汰有リ、稲葉父子モ是ニ同スルノキコヘアリテ、城中互ニ心ヲオキ合ケレハ、手堅働モ不レ可レ叶ノ由石川備前守方ヨリ岐阜大垣へ注進ス、是ニ依テ逆徒大イニ力ヲオトス

### 八月八日 石田三成、岐阜衆と協議

●『愛知県史』資料編 939号 佐竹義宣宛石田三成書状

八月十日付 石田三成は、佐竹義宣に対して、八月八日に石田三成が「尾・濃境目」の仕置のため尾張方位に出陣し、「岐阜衆」（岐阜城主の織田秀信）と協議した、・・・と報じた。



犬山城



岐阜城（金華山）

犬山城天守から望む岐阜城  
距離15km、岐阜城の後方6kmに黒野城  
8月22日の落城の日、城下町延焼の煙が見えたかも知れない

### 八月十二日付 井伊直政・本多忠勝宛て家康書状

貞泰の長敷者（宿老クラス重臣）が犬山城に籠もる貞泰の様子を伝えるにきた。家康は井伊直政・本多忠勝に対して福島正則と協議するよう命ずる。

●『北藤録』巻之九 貞泰之伝（64頁）

このものかどうさえもんじょうながしきものさうろう。しかれば、いぬやまへさえもんじょうあいこもりさうろう。此者加藤左衛門尉長敷者候。然者、犬山江左衛門尉相篋候につきようすのさむしつかわしさうろう。そのちにおいて福島正則にさうだんにせしめしかるべきようおぼえ付様子之義申遣候。於二其地一羽左太令二相談一可レ然様覚もじもにさうろう。なおまたこうじようもうすべくさうろう。きんげん。尤候。猶復口上可レ申候。謹言。

八月十二日

家康公 御諱御判

井伊兵部少輔との  
（直政）  
（忠勝）  
本多中務大輔との

此御書故アツテ当家ニ伝フ

### 八月十五日 貞泰弟平内、関東で家康の過分な待遇

●『北藤録』系譜 卷之十九 胤流世系 遠江守光泰次男（241頁）

光直 平内 従五位下遠江守 母一柳藤兵衛女

・・・慶長五年八月十五日、下野国小山ノ御陣所ニ於テ謁シ奉ル。東照宮其志ヲ感シ玉ヒ、御懇ノ仰セヲ蒙リ、下総国古河ヨリ舟ヲ出シ、先達テ奉リテ江戸ニ至ル。此時永井右京

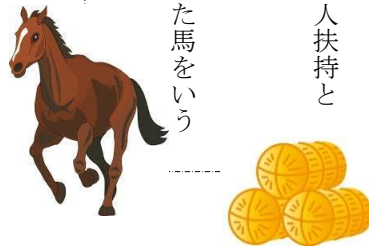
大夫直勝・大久保十兵衛長安ヲ以テ三百人分ノ御扶持并伝馬十五ひきをたまふ。又本多・丹下ヲ以テ仰二日、所労保養ノ為メ相州小田原宮城野ノ温泉ニ浴スヘシト。光直謹テ拝謝シ、宮城野ニ趣キ、病氣平癒シテ、東照宮石田御征伐ノ時供奉ス。

・下野国（栃木県）・下総国（千葉県）・相州（神奈川県）

・扶持（一人一日米五合を一人扶持と呼ぶ（一合は普通茶碗二杯分））

・伝馬（公用の人や荷物の継ぎ送りにあつた馬をいう）

・宮城野温泉（箱根温泉）



乱れ飛ぶ禁制

●『岐阜市史』通史編 近世 第四節 関ヶ原合戦（18、19頁）

風雲急を上げる慶長五年（一六〇〇）、石田方と徳川方、それぞれしきりに禁制を出した。……岐阜城攻防戦と関ヶ原直前との時期に、東西両軍武将により禁制が入り乱れて発せられ、中に

《禁制の発給者・宛所・数量》

宛所（現在地）	数
岐阜市	25
安八郡	5
大垣市	4
滋賀県	4
揖斐郡	3
不破郡	3
本巢郡北方	2
羽島郡岐南町	2
関市	2
愛知県江南市	2
羽島郡笠松町	1
各務原市	1
養老郡	1
不明	4
計	59

発給者		数
西軍		
織田秀信		11
石田三成		1
石田三成長	連名	2
小西行長		
島津義弘	連名	1
宇喜多秀家		
石田三成	連名	1
島津義弘		
平岡頼勝		1
計		16
東軍		
池田輝政		16
徳川家康		12
池田輝政	連名	8
福島正則		
井伊直政	連名	3
本多忠勝		
福島正則		4
計		43

は両軍よりあたえられたものもある。元来禁制は、戦国武将が占領地に下したものが多く、社寺や町村が軍勢の乱暴・陣攻を防ぐため、謝礼を出して禁制を下してもらうことが多かったようである。ともかく、禁制を下す側、与えられる側ともにいろいろの思惑が交錯して、混乱していた様子がうかがわれる。

●『別府大学史学研究会「史学論叢」第42号』

慶長五年六月〜九月における徳川家康の軍事行動について（その3）  
表6「禁制の一覧表」（慶長五年八月〜九月）データを左記に集計。

# 八月 石田方・岐阜城主織田秀信の禁制

●〔岐阜県史〕史料編 古代・中世一（144頁）  
●〔同文の禁制（判物） 明治二八年五月寺院調〕 本派本願寺別院高札写（黒野村多賀神社写蔵）

禁制 <small>きんせい</small> 柿内正木郷寺内 <small>じない</small> 一、甲乙人濫妨狼藉之亵 <small>こうおつにらんぼうろうぜきのこと</small> 一、陣取放火之亵 <small>じんとりほうかのこと</small> 一、伐採竹木亵 <small>ぼつさいちくぼくのこと</small> 右條々於違犯之輩 <small>みぎじょうじょういほんのやからにおいては</small> 速可處嚴科者也仍 <small>すみやかにげんかにしよすべきものなりよつて</small> 下知如件 <small>げちくだんのごとし</small> 慶長五 <small>けいちよう</small> 八月日 <small>おだひでのぶ</small> 織田秀信 <small>かおう</small> 花押 <small>かお</small>
--

正木村柿内（垣内）正木御坊に  
立てた三ヶ条の禁制

正木寺内とは正木御坊のこと。慶長 15 年、  
貞泰が黒野城下へ移転し黒野御坊になる。  
後の黒野別院。

## 犬山城内で加藤・竹中どちらに味方するか談合

● 両者の使者目代を徳川へ送りその情報に安堵

●〔愛知県史 通史編上巻〕一〇八五（782〜784頁）

### 関ヶ原物語

尾州犬山籠軍士関東味方江参事

犬山ノ城ハ・・・岐阜ノ枝城トシテ要ノ所也・・・秀頼卿ト三  
 成遂評談、犬山ノ城主石川備前守為加勢、濃州黒野城主加藤左  
 衛門、同岩手ノ城主竹中丹後守、同郡上城主稲葉右京亮・同彦六、  
 伊勢関長門守、大坂弓鉄炮ノ組ニ、都合七千七百余騎楯籠テソ居  
 タリケリ、掛ル所ニ丹後守 左衛門尉ニ向テ窃ニ私言ケルニ、今度  
 西国大名不残出張スルト云ヘトモ、此頃為躰ヲ見ルニ、戦勝ニ威  
 勢ヲ角ヒ緒言我意ニフルマフ族計也、古今ノ軍様品々有ト云ヘ  
 トモ、奇正虚実ノ外ニ不出、奇正虚実は勝負ノ二ツニ有、勝負ノ二  
 ツハ大将ノ心裏より出、然ルニ八陣ノ心ニ備テ威シ敵軍ニ振ヒ、勇知  
 仁義ノ器用有テ大将ノ機ニ合ヘル人一人シテナシ、何レヲ大将ト  
 モ何ノ下知ニ可随トモ不覚、面々格格々ノ軍立ニシテ一戦ノ期ニ  
 及ナハ軍可敗事ハ無疑、只今世ノ変化大乱ニ成スルニ付テ考ミ  
 ルニ、智仁勇ノ三ツヲ兼其徳広博ニシテ無双ノ良将、天下ノ武將タ  
 ルヘキハ家康公也、イサヤ此手ニ属スル事ヲ計リ見ント、兩人ウ  
 ナツキ合テ使節ヲ関東ヘ下シテ伸去ヤリケルハ、奥州御陣触ニ依  
 テ面々軍用迄シテ己ニ可打立所ニ、岐阜秀信卿より催促ニ仕テ義兵  
 ヲ挙ルノ条、奥州出張ノ儀相止リ、当年軍法ヲ可励軍忠、若違背ノ  
 輩ハ其館ヘ馳向テ可遂一戦ノ旨権柄ノ使及数度、僅ノ要害ト云楯  
 付可申程ノ手勢もナケレハ、本意ニハアラサレトモ不及是非シテ、  
 不慮ニ叛逆人ニ与党シ候畢、謂然内心ハ全変違ノ義ナシ、家康  
 公当表御陣ノ節ハ必味方ニ参可励軍忠ナレハ、却而吉事ニ可成事モ

ヤ候ラント、委細口上ニ云合テ使節ヲ関東ヘ下ス、跡ニ三州吉田ニテ両目代本多中務・井伊兵部ニ行合テ、シカシカノ趣ヲ申伸ナサレハ、両目代今度出勢首途ヨシト悦喜シ、家康公ノ前ハ心安ク思セ能ニ取成申サン、日頃の懇意無失念、忠節ノ至無比類ノ旨申伸、兩人ノ使是より帰候ヘト念頃ニ返事成シカハ、急キ馳帰リテ使ノ者角トソ申ケル、加藤・竹中一々聞テ喜悦ノ笑ヲ含穴賢隠ストイヘトモ、天知地知ナレハ傍ニハヒソメケレハ、兩人談合シテ稲葉・関ノ藤原ニモ語り進メレハ、是モ又誘引水者ヲハト思折柄也、イナム気色モナク同心シテケリ、雖然城主備前守ニハ深く隠密セリ、かくのしとく如此ナレハ美濃国中ノ敵城或ハ降参シ或ハ明退テ漸岐阜ト大垣ト両所計ニ成ニケリ、敵方ノ城トテハ外ニナカリケレハ、先岐阜ヘ取掛リ攻落セトテ諸事八月廿一日ニ尾州清洲ヲ打立テ、美濃路ノ戦場ニ越ケリ、

### 八月二三日 犬山城を開き渡し

貞泰らの加勢衆は、徳川方と内通し、岐阜城攻めの前日、犬山城を開城し、城に駐在する作戦があった。

●『北藤録』卷之九 貞泰之伝（65頁）

一書ニ曰。犬山ノ城ニハ、石河備前守貞清城主ニテ、加勢トシテ加藤左衛門尉貞泰・竹中丹後守重門・関長門守一政・稲葉右京亮貞道・同彦六典通、并撰州御旗本弓鉄炮ノ頭都合七千七百余ニテ楯籠リケレハ、井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝・福島左

右衛門大夫正則・池田三左衛門輝正等ノ諸將ト評議シテ、黒田甲斐守長政・藤堂佐渡守高虎・田中兵部大輔吉政・戸川肥後守達安・桑山伊賀守ヲ犬山城ノ庄ニ差置レケルニ、竹中・加藤ハ元来東方一味、殊ニ兩人共ニ内府公ノ御懇意ニ付テ誓紙ナシニ御味方トナル衆故ニ、残ル人々ヲモ内々意見アリ、元ヨリ城主石河備前守貞清城主モ同意アレハ、八月廿二日ノ朝犬山城ヲ開キ渡シ、関ヶ原ヘ押出シケリ。

### 八月二三日 岐阜城落城

●『関ヶ原合戦史料集』（273頁）

是の日岐阜城の大手から福島正則・細川忠興・加藤嘉明・井伊直政・本多忠勝・生駒一政・寺沢広高・蜂須賀豊雄等、搦手からは池田輝政・浅野幸長・山内一豊・堀尾忠氏・有馬豊氏・一柳直盛・戸川達安等が攻撃し、午後三時、これを陥れた。

●『関ヶ原合戦史料集』「大垣藩地方雑記」（274頁）

岐阜之出丸犬山モ降参シ、新加納ノ合戦ニ、岐阜方宗徒ノ侍、数多打死故、旁同廿三日巳ノ刻岐阜モ落城也



黒野城方面から望む岐阜城  
(手前の山は鷲山)



八月二四日付 竹中・加藤・関宛て井伊直政書状

「井伊直政は、西軍石川貞清の犬山城に籠居している竹中重門・加藤貞泰・関一政に対し、昨日岐阜城を攻略し、石田方を討ち果たした。速やかに城を出て帰順せよと指示する。」

●〔加藤光泰貞泰軍功記〕「続々群書類従 第三」史傳部（22頁）

内々道中筋、岐阜昨日乗落候、然處、為二後卷一、治部少輔  
 先手之者共、江戸川端迄差出候、即一戦および追崩、悉討  
 果候、早々内々如二筋目一可二引退一候、此通駿河衆へも申遣  
 候、可レ被レ成二其心得一候、恐々謹言、

八月廿四日  
 井伊兵部少輔直政 判

竹中 丹後守殿  
 加藤左衛門尉殿  
 関 長門守殿  
 人々御中

八月二五日付 山内一豊宛て加藤図書書状

「貞泰の重臣光政（図書）から美濃国に在陣中の遠江国掛川城主山内一豊に、貞泰の犬山城籠城について迷惑をかけているが、やがて犬山城主石川貞清光吉が城を明け渡すことを伝える。このことは野々村右衛門殿も申され本多忠勝殿と井伊直政両陣所の判形をとり満足です。これも一豊様のお助けのお陰です。」と礼状。

●〔愛知県史〕資料編13（688頁）加藤光政書状 御家伝羽翼

乍好便以一書申上候、今度之御出陣御苦身共奉察候、  
 今度之御手がら共中申上もおろかなる御事ともに候、  
 左衛門尉いぬ山に居申候てなに共めいわく仕候、寔石  
 備前も御ことわり申候ハでなり申まじく候間、やがて  
 罷出候ハんと存事に候、この方之儀者右衛門殿きも入  
 被申候て、本多中務殿・井伊兵部殿御両所之御判形  
 とり候て被越候間、満足仕候、是も貴公様御祐と存事  
 に候、以使者も御見廻申度存候へ共、手前取紛忘却仕

ゆたそのつかあたまわすめいわくつしまつりそうろう。きこうこうきんげん  
故不能其使迷惑仕候。恐惶謹言、

八月廿五日

加藤図書ずしよ

光政

(山内対馬守一豊)

山対州様

人々御中

●『関ヶ原合戦史料集』「谷川七左衛門覚書」南路志所蔵(330頁)

同廿三日岐阜城落城。同廿四日惣軍赤坂岡山辺に陣を取、岡山  
八家康公の御本陣也。惣軍九月十四日迄、家康公御出馬を相待、  
一豊公ハ西牧野に御在陣被レ成。但犬山の城主石川備前守並に加  
藤左衛門・石田三成一味二付、一所に籠城す

一豊公御取持を以、加藤図書之政無ニ異議ニ、本多忠勝殿・井伊  
直政殿判形を取、野々村右衛門五郎を以送レ之、八月廿五日に図  
書より御礼状□(来)る

八月二四日以降 徳川方・池田輝政の禁制判物  
(岐阜城落城後二、三日中の文書)

●『専長寺所蔵文書』岐阜市黒野



「池田輝政禁制」岐阜市黒野 専長寺 所蔵

己上いじよう

当手乱妨狼とうてらんぼうろう

藉放火之事仍ぜき、ほうかのこと、よって

雖為御人数此ごにんずうたりといえどもこの

折紙を以可申理おわがみ もつて、ことわりもうすべき

者也ものなり

慶長五年八月日

(池田輝政)  
三左衛門 (花押)

木田郷中

### 八月二八日付 貞泰・関・竹中宛て井伊直政書状

「二十四日付の書状拝見しました。人質のことは、福島正則から犬山城へ遣わした衆へ念を入れて渡されたので、間違いなく当陣へ人質が来るであろう。そちらから申し越した紙面の通りに、家康へ申し遣わした。いよいよ家康へ忠節を思うように、御用のことあれば、拙者（井伊直政）が馳走するつもりなので安心するように。なお夜を日に次いで當地まで御参陣するように。遅れては最前の首尾と違うことになる。當地に着いたならば、そのことを家康に申し遣わすつもりである」と報じた。

- 『北籐録』卷十三頁泰（123頁）・
- 『岐阜県史』史料編 古代・中世4（1125頁）

にじゅうよっぴのじようさんちやくはいけん、すなわちおしらせもうしたつせうらいき。  
 廿四日之御状参着拜見、即御報申達候キ。先書如二申候一、  
おんしちもつぎ、御質物之儀、羽柴左衛門大夫殿より其許江被レ遣候衆へ被レ  
ごねんをいれられおわたしうけとり、とうじんおこしならるべくせうろう。  
 入二御念一御渡請取、当陣へ可レ被レ成二御越一候。次被二仰  
こゝろをこしめんとおとり、越二御紙面之通、内府へ令二申遣一候。取前より関東迄被二  
おおせとおおされせうろうぎ、このせういよいよちゆうせつ仰通二候儀、此節は弥御忠節と存事、御用之儀何分二茂拙  
しやうしやうしやう者御馳走可レ申候間可二御心易一候。何も懸二御目一可二申達

せうろう、きようこうきんげん。  
一候。恐惶謹言。

八月廿八日

井伊兵部少輔 直政判

加 左衛門様

関 長門様

竹 丹後様 令御中

(略)

猶々夜を日に次當地迄御参陣、御尤二存候。延候得は前  
 之首尾違候。当地御着候ハ、又内府へ加レ申候。以上。

### 八月二八日付 貞泰宛て本多忠勝書状

犬山城は、早くも家康へ渡すとのことなので、貞泰の「御（身）上之儀」は精一杯肝煎するつもりである、早々に本多忠勝の陣所まで出てくるように、先ほど陣寄せをした時も貴所（貞泰）の老母のことも異儀のないように、と忠勝が折紙を遣わした。どのようなのことも手ばかりがあつてはいけない。早速出てくるようにと報じた

- 『北籐録』卷十三頁泰（124頁）

乍二便一書申入候。其城はや御渡之事二候間、貴所御身上

之儀涯分肝煎可レ申候間、早々扣候陣所迄御出可レ被レ成候。  
 取前此表陣寄之刻も、貴所御老母の儀も無<sub>二</sub>異儀<sub>一</sub>様ニと存候。  
 折紙迄遣<sub>レ</sub>申候。何へ二茂如在申間敷候。早速御出可レ被<sub>レ</sub>  
 成候。恐々謹言。  
 八月廿八日

加藤左衛門尉殿

本多中務 忠勝判

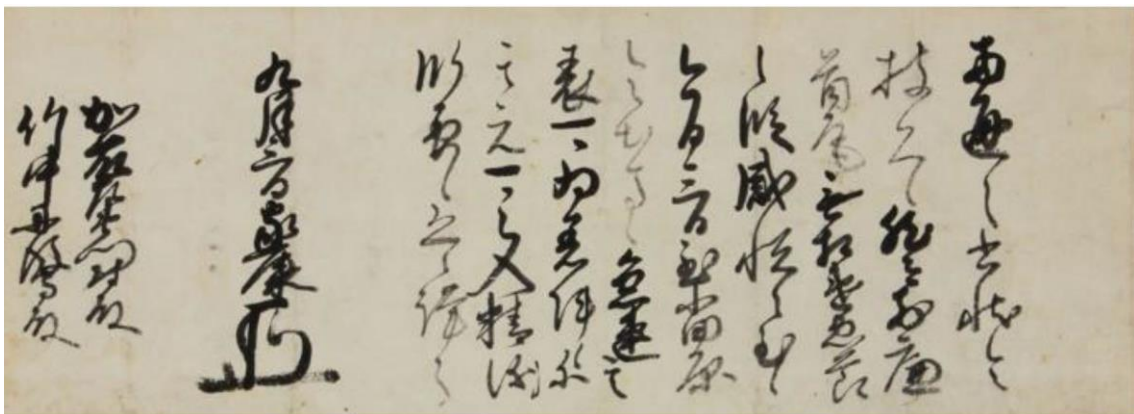
●『北藤録』巻之九 貞泰之伝(63頁)

一 同年九月三日、東照宮逆徒御誅罰トシテ御上り、今晚小田原ノ馱御止宿ナリ。加藤貞泰・竹中丹後守重門、逆徒ノ催促ニ依テ犬山ニ加勢ストイヘトモ、井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝ヲ以テ内通之趣小田原へ申来ル。今日兩人へ御書ヲ賜テ其志ヲ感セラル。此御書竹中主膳元滌家ニ伝フ。

九月三日付 貞泰・重門宛て家康書状

犬山城明け渡しにおける忠節を賞する。

●『関ヶ原町歴史民俗資料館所蔵』



「加藤貞泰・竹中重門宛徳川家康書状」  
関ヶ原町歴史民俗資料館 所蔵

両通之書状令ニ  
 披見一候。然は前廉  
 首尾無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>忠節  
 之段感悦之至候。  
 今日三日、至小田原  
 令ニ出馬一候。急速其  
 表可レ為<sub>二</sub>着陣<sub>一</sub>候。弥  
 其許可レ被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>精儀  
 肝要候。恐々謹言。  
 九月三日 家康公  
 御諱御判  
 加藤左衛門尉殿  
 竹中 丹後守殿

●本文訳 平成27年度春季特別展「天下人の時代」(71頁) 発行 岐阜県博物館友の会

一通の書状を披露させました。前から合わせていた通り、忠節を尽くしておられること大変うれしく思います。今日三日、小田原へ向けて出馬しました。急ぎそちらへ着陣することとします。あなた方も、いよいよ精を入れ働かれることが大切です。

〈家康書状の行方考察〉

明泉寺所蔵「三埜古領侍傳」に「連名二下サル其□□方県郡黒野加藤家ノ処ニアリ略」と記されている。その後の推測であるが、貞泰が米子に国替えの頃、重門に渡り、後に子孫の竹中家が関ヶ原町・民俗資料館に寄贈されたものと思われます。加藤氏では現存する唯一の家康書状。

八月八日〜九日頃に犬山城籠城が開始されたと考えられるので、九月三日〜四日の時点で、犬山城の明け渡しが終わったとすると、犬山城への籠城の期間は約一カ月弱であったことになる。

九月三日付 貞泰・稲葉道重宛て福島正則・池田輝

政・本多忠勝・井伊直政 連名書状

貞泰と美濃清水城主稲葉通重に牛牧村、本田村に在陣し、夜討ち等を命じられる。

●〔加藤光泰貞泰軍功記〕「続々群書類従 第三」史傳部(22頁)

わさもうしれそうらう、しからばおおがきじよちゆう  
態申入候、然ば大柿城中より、刈田に罷出候間、稲葉甲(稲葉道重)  
ののみどの、きしよおさえてして (牛牧むら、(本田)  
斐守殿、貴所為レ押うしき村 ほんてん村両所ニ御在陣可  
なうさく、もうすにおよばず、 そのせほい、 被レ成、不レ及レ申、其御精を被レ出、夜待等被二仰付一尤候、  
恐々謹言、  
きようきようきんげん

九月三日

羽 左衛門大夫 正則 判  
羽 三左衛門 照正 判  
本多 中書 忠勝 判  
井伊 兵部少輔 直政 判  
加藤左衛門尉殿  
稲葉 甲斐守殿

(右書状の解説)

●〔月刊西美濃わが街2009一月号〕庶民の関ヶ原合戦(29頁)

東軍の福島正則や池田輝政・本田忠勝らが、同じ東軍方である美濃の黒野城主加藤貞泰や清水城主稲葉通重に大垣城中の西軍方が城外で刈り田をした。ということとは西軍の兵糧が無くなっていることだから、稲葉通重に揖斐の清水城を出て、大垣に近い牛牧村に陣取り、隙に乗じて大垣城に夜討ちをかけてくれと述べている。



●『北藤録』巻之九 貞泰之伝 (65頁)

其後貞泰ハ関東ノ差図ニ依テ犬山ノ城ヲ退キ、濃州ニ趣キ、東照宮赤坂御着陣以前、本田ニ陣シテ大垣ノ押ヘトナル。此時福島正則・池田輝政・井伊直政・本田忠勝ヨリノ来書ニ曰。

### 九月四日付 犬山城主石川貞清宛て家康書状

「兩人(井伊直政・本多忠勝か?)方への書状を見て、この度の「不慮之儀」は、やむを得ないなりゆきであつたが、日頃のよしみを思つて(家康へ)忠節をおこなつたことに満足している。詳細は田中静六に申しています」と伝える。

●『愛知県史』史料編(697頁)  
(古田織部正重然)

追而古織かたへ之書状得其意候、己上、

兩人かたへ之御状令披見候、仍今度不慮之儀無是非仕合

共候処、日来之御好味思召可有忠節由満足候、委細田中

可申候条令省略候、恐々謹言、

九月四日

御諱御判

石川備前守殿

### 貞泰、大垣城の押さえ・本田に布陣

●『大洲秘録』御家伝 貞泰 (32頁)

貞泰関東の御先鋒井伊兵部少輔直政の指図に応じ犬山を出て岐阜に移動

●『曹溪院行状記 加藤家傳』「続々群書類従 第三 史傳部 (29頁)

慶長三年戊戌、豊臣公薨、庚子、石田挟ニ公子秀頼卿、令ニ諸候、陣ニ于美之関原、源家康公自將レ討レ之、石河備前守ニ尾之犬山、石田令ニ貞泰屬レ之、貞泰通ニ於源公、遣ニ舍弟光直ニ質ニ于江府、石河遂退聽、貞泰略ニ定犬山、屢飛ニ羽翰、以達ニ其事情、公悦レ之辱ニ華檄兩封、既而貞泰應ニ源軍先鋒井伊兵部少輔之指麾、發ニ犬山ニ向ニ美州、公着ニ美之赤坂、貞泰謁見、迺禽ニ屯州之本田、拒ニ大垣城、公大破ニ関原、直抵ニ近之佐和山、貞泰從行、公遣ニ稻葉右京亮ニ興ニ貞泰ニ攻ニ同州水口城、城主長束氏不レ戰而遁、公入ニ撰津難波城、貞泰隨而往焉、

●以下の文書は、右記原文を読みやすく解説。(作成 郷孝夫氏) 〓

慶長三年(1596)戊戌(つちのえいぬ)、豊臣公薨(死ぬ)の尊敬語、みまかる。庚子(かのえね)、石田公子秀頼卿を挟して(ひき連れて)、諸侯に令し(号令し)、美之関原(美州関ヶ原)に陣す。源家康公自ら將に之を討たんとす。石河備前守、尾(尾

州)の犬山を守る。石田貞泰をして(石田三成が貞泰を遣つて)之に属せ令む。貞泰源公に通じて舍弟光直を遣わし、江府に質す(貞泰は家康に味方となり、自分の弟光直を江戸へ人質として出した。《舍弟・・・自分の弟をへりくだつて言う語。江府・・・江戸の異称》)。遂に退聽す(石河備前守は城を明け渡し退却する意)。貞泰犬山を略定す(ほぼ平定する)。屢羽翰(ふみ)を飛ばし、以つて其の事情を達す(知らせる)。公之を悦び華檄尙封(みごとな二通の触れ文)を辱うす(有りがたく受け取る)。既にして貞泰源軍の先鋒井伊兵部少輔の指麾(指図・下知)に應ず(応えた)。犬山を發し美州に向かふ。公(家康公)は美(美州)の赤坂に着く。貞泰謁見す(お目にかかり)、迺ち(そこで)屯州之(屯集と同じ意・兵がたむろしているところ)本田を虜にす。大垣城を拒つ。公大いに關原に破る。直ちに近(近州)の佐和山に抵る。貞泰從行す(ついて行く)。公稻葉右京介を遣わし、貞泰與同州水口城を攻む。城主長束氏戦はずして遁ぐ(逃走する)。

九月五日付 貞泰宛て家康書状

念の入った書状、喜び祝います。犬山の問題、貞泰殿の知恵の働きで早々に解決したこと大変満足です。先頭に立つての参陣すばらしいことです。清見寺に着きましたが、やがてそちらに着陣しますと返書。

●『加藤光泰貞泰軍功記』「続々群書類従 第三二 史傳部 (20頁)」

切々被レ入レ念来状祝着之至候、殊ニ犬山之儀、其方以ニ才  
 覚一早々相濟候事、令ニ満足一候、将又先手へ参陣之由尤候、  
 今日至ニ清見寺一、令ニ着馬一候之間、頓而其表可レ為ニ着  
 陣一候、猶期ニ其節一候、恐々謹言、  
 九月五日  
 御諱御判(家康公)  
 加藤左衛門尉殿

九月十一日付 貞泰陣宛て本多忠勝書状

書状受取と柿のお礼。家康が明日には岐阜に参られるので是へ来て下さい。取り次ぎしますのでご安心ください。また清洲への書状申し訳ありません。

●『関ヶ原合戦史料集』「加藤家文書」(346、347頁)

被<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>御念<sub>一</sub>御飛札候。殊見事之柿<sub>ニ</sub>籠送被<sub>レ</sub>下候。  
 御懇志之至忝奉<sub>レ</sub>存候。内府も明日者、定此方まで可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>参候と存候。是へ被<sub>レ</sub>参候者、涯分御取合申候。  
 爰元へ御越被<sub>レ</sub>成候様に可<sub>レ</sub>仕候。可<sub>ニ</sub>御心安<sub>一</sub>候。  
 将亦清洲へ書状被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>遣候由忝存候。何も以<sub>レ</sub>面可<sub>レ</sub>申候間、早々、恐々謹言。  
 九月十一日 忠勝 花押  
 加藤左衛門尉殿陣

●『愛知県史』通史編 上巻「慶長見聞記」(779頁)

一 犬山(丹羽郡)の城に石河備前守(光吉)籠候、為加勢加藤左衛門・丹後・関長門・稻葉右京(貞通)・同彦六(典通)、弓頭衆・鉄炮頭衆以上七千籠、其内ニ加藤左衛門・竹中丹後、本ハ内府方ニテ可罷下用意有しに、  
(織田秀信) 岐阜より留られ不及是非上方一味しける、何とそ関東方江忠

節可仕申使を進上申、此詩使者参川迄下り、本多中務二逢、此由申間、中務使者を添関東江下しケレハ、家康公御満足被成、使御対面被成御返事被下けれハ、使罷帰 兩人ニ此旨為申聞間、兩人安堵し此加勢衆江申談遣候、何茂関東方江降参一味有けり、  
(忠勝)

●『関ヶ原合戦を読む 慶長軍記 翻刻・解説』2019年発行(寛文3年本235頁)  
 以下の文書は、原文を読みやすくしてあります。(作成 郷孝夫) 〓

尾州高須犬山城落居ノ事

犬山ノ城主石川備前守・同ノ加勢ノ加藤左衛門・竹中丹後守・稻葉右京亮父子ハ、岐阜中納言ノ催促ニテ、上方ト与シテ楯籠ルカ、各評議シテ、「小ヲ以て大ニ適スル事、成シ難ケレバ、一旦岐阜ノ催ニ随フト云ヘドモ、其ノ実ハ、内府公へ随ハンコソ本意

「ナレ」トテ、則チ使者ヲ以テ申シケレバ、井伊直政(井伊直政)・本多中務(忠勝)、使者ニ対シテ、其ヨリ内府公へ申達シケレバ、彼ノ使者召シ出ダサ被、今般ノ忠節セラルル事、御感悦ノ旨仰セラレ、加藤・竹中・稲葉父子ハ安堵イタシ、同ノ犬山ノ籠城衆へモ折々諫ケレバ、同心シテ降参ヲ乞ヒケル故ニ、一命御赦免有リテ、美濃国中ノ敵方残ラズ降参シテ、岐阜・大垣両城計リニ成ル。「破竹ノ勢ヒ、今ニ始リ又習リ」トテ、下向ノ諸將、弥勇ミケリ。八月十四日、各尾州清洲ニ集会シテ詳議スル。然ルニ内府公、御出馬ノ沙汰ナケレバ、大早ノ雲霓ヲ望ムガ若クニシテ待兼タル処ニ、八月十三日、江戸ヨリ使節トシテ村越茂助来タル。

(語釈)

「大旱」は大干ばつ。大ひでり。「雲霓」は雲と虹。「大ひでりに雨の前触れである雲や虹が出てくるのを望むかのように」、の意。ここは、家康公の出馬を大いに期待していることへの比喩的表現になっている。

● 『関原軍記大成二』(117頁)  
濃尾諸城の動静

秀信卿、上方と同意の聞ありければ、美濃・尾張に在國の輩、

皆関東の御敵となり、城々に楯籠る。中にも尾州犬山・濃州竹ヶ鼻は、関東勢の先鋒なり。敵若し寄来らば、堅固に禦ぐべしとて、犬山の石川備前守(直清の誤記) 正に、稲葉右京亮・同彦六・田丸中務少輔・加藤左衛門佐・関長門守・竹中丹後守・伊東對馬守、其外大坂より下りし弓・鉄炮の者頭兩人差加へらる。又竹ヶ鼻の城主杉浦五郎左衛門に、花村半左衛門・毛利掃部・梶川三十郎等を、秀信卿より加勢せらる。・・・濃州大垣の城主伊藤彦兵衛方へ使者ヲ遣し、城を明け渡さるべしとありけれども、彦兵衛同心なかりけるを。福原右馬助・平塚因幡守、大垣に至り、三成自分の所存にあらず、秀頼公の御為なれば、速に城を開き渡し、貴殿も要害の地を選び、塞を築きて移り給へといひければ、彦兵衛終に承引して、領内今村に塞を構えて移りけり。されば、大垣を上方の根城とすべき為に、石田方より人数を遣わし、此彼繕ひけるとなり。

● 『愛知県史』通史編 上巻「犬山里誤記卷之三」(779頁)  
一 石川備前守貞清

一名光吉、秀吉公ニ仕ふ、文禄四年木曾谷之御代官を兼給ふ、十式万石を領す、公薨後ニ、徳川公ニ属す、慶長五年石田三成ニ一味し岐阜中納言秀信卿に属す、此城ニ籠て三成之敗軍を聞、一戦に及ハすして犬山を退給ふ、保城六年、後ニ京都ニ隠居し、入道して宗林と云、寛永三年四月四日卒去、・・・

## 第三部

### 犬山城の軍事行動について



## (1) 犬山城籠城と明け渡し II 白峰旬論文

● 「別府大学大学院紀要」第14号 2012年発行

慶長五年六月～同年九月における徳川家康の軍事行動について(その2) 及び(その3) より部分転載

犬山城には石田三成方として、城主の石川貞清のほか、加勢として加藤貞泰(美濃黒野城主)・竹中重門(美濃岩手城主)・関一政(美濃多良城主)・稲葉貞通(美濃郡上八幡城主)など美濃国内の諸将が籠城していた。

七月下旬の犬山城に関する状況から見ていくと、七月二六日付で三奉行(前田玄以・増田長盛・長束正家)は、中川秀成に対して、濃州のことは、織田秀信(岐阜城主)・稲葉貞通(美濃郡上八幡城主)と大垣城・犬山城(引用者注:犬山城は尾張国内に位置する)はすべて秀頼様に忠節をすることに決まり、人質を進上した、と報じた。<sup>(25)</sup>このことから、七月二六日の時点では、まだ犬山城への籠城はされなかったようであり、八月三日付加藤貞泰宛家康書状<sup>(26)</sup>や八月八日付石川貞清宛家康書状<sup>(27)</sup>には、犬山城への籠城に関する記載はない。

家康書状における、犬山城への籠城に関する記載の所見は、八月十二日付井伊直政・本多忠勝宛家康書状である<sup>(28)</sup>。この書状では、加藤貞泰は犬山城に籠城しているの、「其地」(犬山城の近辺か?)において福島正則と相談して、しかるべき次第に才覚をするように家康が指示している。

この家康書状は、井伊直政・本多忠勝からの注進状を受けて出されたと考えられ、井伊直政・本多忠勝が犬山城の近辺に布陣していたとすると、注進状が家康のいる江戸まで、あしかけ四日～五日かかったと仮定した場合<sup>(29)</sup>、八月八日或いは同月九日に注進状が出されたことになる。とすると、八月八日～同月九日頃に犬山城籠城があきらかになったことになるが、石田三成は八月八日に尾・濃境目の仕置きのために尾州表に出陣している<sup>(30)</sup>、この軍事的動きに合わせて、石田三成の指示により、八月八日～同月九日頃に犬山城籠城が開始された可能性が高い。

八月十九日付で、黒田長政・徳永寿昌・奥平貞治は井伊直政・本多忠勝に対して、犬山表に「押之城」をつくり、木曾川を渡河<sup>とが</sup>して出陣する予定を報じているので<sup>(31)</sup>、八月十九日の時点でも犬山城は継続しており、犬山城籠城に対峙するため、家康方軍勢から一定の兵力をまわす必要があったことがわかる。

八月二一日付で、佐々正孝は秋田実季に対して、犬山城は城主の石川貞清のほか、加勢として加藤貞泰・竹中重門が籠城していることを報じているので<sup>(32)</sup>、八月二二日の時点でも犬山城籠城が継続していたことがわかる。

八月二四日付で、井伊直政は、犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政に対して①内々に申しているように、昨日(八月二三日)岐阜城を乗り落としたところ、後巻(II後話)として、石田三成の先手の者共が河渡川端まで出てきたので、一戦に及び追い崩し、すべて討ち果たした、②(よって)早々に内々に「其筋目」を引き退くべきであり、その通り駿河衆へも申し遣わ

したので了承するように、と報じた(こま)。

この内容は、八月二四日、前日に岐阜城を落城させたことと、岐阜城救援に後詰として出陣してきた石田三成の軍勢が敗北したことを報じることにより、こうした石田三成方軍勢の不利な状況を認識させて、加勢として犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政に対して、早々に犬山城から撤退するように圧力を掛けたものであることがわかる。この場合の駿河州とは、中村一栄の軍勢を指すものと思われ、上述のように、中村一栄の軍勢は岐阜城攻城戦に参加していないことを考慮すると、犬山城籠城の軍勢に対峙するため犬山城の至近距離に布陣していたと考えられる。よって、加勢として犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政が犬山城から撤退する可能性があることを、井伊直政が中村一栄に伝えた、という意味であろう。つまり、加勢として犬山城に籠城している竹中重門・加藤貞泰・関一政に撤退を勧告して、城主の石川貞清と離間させることが井伊直政の狙いであった、と考えられる。このように、岐阜落城の翌日に井伊直政が加勢している三名に対して犬山城からの撤退を勧告した、という点が注目される。

八月二五日付で、加藤光政は山内一豊に対して、加藤貞泰が犬山城に籠城していることについて何とも当惑しており、石川貞清もやがて(犬山城から)出るだろうと思っている、と報じている(こま)。このことから、八月二五日の時点で、犬山城主の石川貞清についても、やがて犬山城を明け渡すことが予想されていたことがわかる。

八月二八日付で、井伊直政は加藤貞泰・関一政・竹中重門に対

して、①質物(人質)のことは、福島正則から「其許」(犬山城)へ遣わした衆へ念を入れて渡されたので、間違ひなく当陣(人質)来るであろう、②次に(そちらから)申し越した紙面の通りに、家康へ申し遣わした、③最前より(そちらから)関東まで申し通していることは、この時なので、いよいよ(家康への)忠節を思うように、④御用のことがあれば、拙者(井伊直政)が馳走をするつもりなので、安心するように、⑤いずれもお目にかつて申し達するつもりである、なお、夜を日に次いで、「當地」まで御参陣するように、⑦(参陣に)遅れては最前の首尾と違うことになる、⑧「當地に着いたならば、(そのことを)家康へ申し遣わすつもりである、報じた(こま)。

この内容からは、犬山城に籠城している加藤貞泰・関一政・竹中重門から人質を取り、家康への忠節を誓わせるなど、八月二八日の時点で犬山城明け渡しに近づいていたことがわかる。そして、家康への取り次ぎは井伊直政が行うということで安心させて、早々に井伊直政が在陣している場所へ来て家康方の軍勢に加わるように伝えていくことがわかる。井伊直政が在陣している具体的場所は不明であるが、八月二八日の時点では岐阜城攻城戦が終了して、家康方の軍勢は岐阜より西進しているので、赤坂あたりまでに在陣していたのかも知れない。

八月二八日付で本多忠勝は加藤貞泰に対して、①「其城」(犬山城)は、早くも(家康方へ)渡すことなので、「貴所」(加藤貞泰)の「御作(身カ)上之儀」は精一杯肝煎をするつもりである、②(そして)早々に「我々」(本多忠勝)の陣所まで出て来るように、③最前、「此表」へ陣寄せをした時も「貴所」(加藤貞泰)の

老母のことも異儀のないように、と「我々」(井本多忠勝)が折紙を遣わした、④(よって)どのようなことも手抜かりがあつてはいけない、⑤早速(本多忠勝の陣所まで)出てくるように、⑥なお「其城」(犬山城)について才覚をして、早々に(家康方へ)渡すようにすべきである、と報じた(148)。

この内容からは、犬山城の明け渡しについて、加藤貞泰が才覚をするように本多忠勝から要請し、その後は早々に本多忠勝の陣所まで出てくるように伝えたことがわかる。上記の同日付の井伊直政書状の宛先が三人であるのに対して、この本多忠勝書状の宛所は加藤貞泰だけであり、上記の同日付の井伊直政書状には「才覚」という文言がない点を考慮すると、犬山城明け渡しの中心的役割を果たしたのが加藤貞泰であつたことがわかる。そして、上記の同日付の井伊直政書状と、この本多忠勝の書状の内容を勘案すると、井伊直政と本多忠勝の在陣しているところは同じ場所であつた、と考えられる。

九月三日付で、家康は加藤貞泰・竹中重門に対して、両通の書状を披見し(家康への)忠節について感悦の至り、と伝えている(149)。また九月四日付で家康は石川貞清(犬山城主)に対して、兩人(井伊直政・本多忠勝か?)方への書状を披見し、この度の「不慮之儀」は、やむを得ないなりゆきであつたが、日頃のよしみを思つて(家康へ)忠節をおこなつたことに満足している、と伝えている(150)。

この九月三日付及び九月四日付の家康書状における「忠節」という文言が、犬山城明け渡しを指しているとするれば、九月三日と同月四日の時点では、犬山城の明け渡しは完了していたことにな

る。

上述のように、八月八日同月九日頃に犬山城籠城が開始されたと考えられるので、九月三日同月四日の時点で、犬山城の明け渡しを完了していたとすると、犬山城への籠城の期間は、約一ヶ月弱であつたことになる。

九月三日付で、福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政は連著して、加藤貞泰・稲葉通重に対して、「うしき村・ほんてん村両所」(現岐阜県瑞穂市牛牧・本田)に在陣するように指示した(151)。加藤貞泰はそれまで犬山城に籠城していたので、こうした指示を受けたということは、九月三日の時点では、犬山城の受け渡しが完了して、福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政の陣所の近くに加藤貞泰と稲葉通重が在陣していたということになる。

九月五日付で、家康は加藤貞泰に対して、犬山城のことは「其方」(加藤貞泰)の才覚により早々に済んだことに満足していると述べ、先手へ参陣したことを了承している(152)。このことから、犬山城明け渡しについて、加藤貞泰が中心的役割を果たしたことがわかるとともに、九月五日の時点では、犬山城の明け渡しがすでに完了して、加藤貞泰は犬山城から撤退して家康方の軍勢の先手へ参陣していたことがわかる。

九月七日付で、家康は稲葉貞通に対して、(稲葉貞通はそれまで)犬山城に籠城していたが井伊直政が(犬山城を明け渡すように)述べたため、犬山城を明け渡して、長島城(城主は福島高晴)への加勢のために(長島城へ)移つたことを了承した、と報じた(153)。

- 〔注〕
- (135) 〔慶長5年〕7月26日付中川秀成宛長束正家・増田長盛・前田玄以連著状」(神戸大学文学部日本史研究室編「中川家文書」-89号)
- (136) 〔慶長5年〕8月3日付加藤貞泰宛徳川家康書状」(徳川家康文書の研究) 中巻-549頁)
- (137) 〔慶長5年〕8月8日付石田貞清宛徳川家康書状」(徳川家康文書の研究) 中巻-567頁、「愛知県史」資料編13-933号)
- (138) 〔慶長5年〕8月12日付井伊直政・本多忠勝宛徳川家康書状」(徳川家康文書の研究) 中巻-570頁、「愛知県史」資料編13-941号)
- (139) この日数計算は、岐阜城攻城戦の際に井伊直政・本多忠勝が家康に出した注進状が、岐阜から江戸まであしかけ4日〜5日かかった(本書は2通の書状例を省略)ことをもとに計算している。
- (140) 〔慶長5年〕8月10日付佐竹義宣宛石田三成書状」(「愛知県史」資料編13-939号)
- (141) 〔慶長5年〕8月19日付井伊直政・本多忠勝宛黒田長政・徳永寿昌・奥平貞治連署状」(「愛知県史」資料編13-959号)
- (142) 〔慶長5年〕8月22日付秋田実季宛々々政孝書状」(「愛知県史」資料編13-970号)
- (143) 〔慶長5年〕8月24日付竹中重門・加藤貞泰・関一政宛井伊直政書状」(「岐阜県史」史料編 古代・中世4-1126頁)
- (144) 〔慶長5年〕8月25日付山内一豊宛加藤光政書状」(「山内家史料・第一代一豊公記」-367〜368頁)
- (145) 〔慶長5年〕8月28日付加藤貞泰・関一政・竹中重門宛井伊直政書状」(「岐阜県史」史料編 古代・中世4-1125頁)
- (146) 〔慶長5年〕8月28日付加藤貞泰宛本多忠勝書状」(「岐阜県史」史料編 古代・中世4-1127頁)
- (147) 〔慶長5年〕9月3日付加藤貞泰・竹中重門宛徳川家康書状」(「徳川家康文書の研究」中巻-664頁、「新脩徳川家康文書の研究」第2-810頁、「愛知県史」資料編13-1007号)
- (148) 〔慶長5年〕9月4日付石田貞清宛徳川家康書状」(家康・中-665頁、

- 〔愛知県史〕資料編13-1008号)
- (149) 〔慶長5年〕9月3日付加藤貞泰・稲葉通重宛福島正則・池田輝正・本多忠勝・井伊直政連署状」(「岐阜県史」史料編 古代・中世4-1127頁)
- (150) 〔慶長5年〕9月5日付加藤貞泰宛徳川家康書状」(「徳川家康文書の研究」中巻-667頁、「愛知県史」資料編13-1011号)

## (2) 関ヶ原の戦いと美濃Ⅱ徳川家康の視点からⅡ

●「関ヶ原〜天下分け目の合戦と美濃〜」平成二十九年春企画展  
岐阜県博物館友の会発行 東京都立大学教授 谷口央著<sup>ひんせ</sup>より部分転載

### 一 美濃・飛騨両国内で活動する東軍と同諸氏の動向

・・・最後に、美濃国黒野城主の加藤貞泰を見ていく。犬山に籠城した人物である。しかし、その動向は一貫して東軍であった。会津攻めが進む七月二十日、家康は貞泰に対し、この出陣に対し噂話など「雑説」があつたため出陣は遅れてしまったようであるが、今後は岐阜城主の織田秀信と相談して対処するようとの指示を出している(注29)。これにより、家康は貞泰に会津攻めへの参加を指示していたこと、貞泰は結果的に会津に進軍していないが、そのことは問題ではなく、家康との連絡はとれていたこと、美濃国の諸将をまとめる立場として織田秀信が位置づけられていたことと、その秀信は当初は家康と敵対する者と認識されていたわけではなかったことが確認できる。

このような家康からの指示を受けた貞泰は、即座に弟光直を家康のもとへ人質として送る予定であった。しかし、光直が病気であったため、家康からはその移動はその快気を待つようとの指示が出された(注30)。それでも貞泰は急いだようで、快気を待つことなく光直を家康のもとへ送っており、その到着は八月三日と考えられる(注31)。

貞泰が、人質の送付を急いだ理由は、岐阜城の織田秀信の同行があつたこともその一つと考える。と言うのも、家康が貞泰に対し秀信と協議することを指示した六日後の七月二十六日には、前田玄以等の豊臣奉行衆が、秀信は自軍に賛同し人質を進上したと、中川秀成に伝えて居ることが確認できるからである。

貞泰は当初より一貫して東軍支持を打ち出し、またそのことを証明するために人質の送付を急いだのであろう。なお、貞泰と家康を取り次いだ人物は、前に見た妻木頼忠同様に徳川家臣の永井直勝であった。

以上、一貫して東軍と行動しており、また家康文書によりその連絡の確認が取れる、金森・遠藤・妻木・加藤の四氏の家康との関係について見てきた。その結果、美濃国内の差配の中心は飛騨国の金森父子が担っており、遠藤慶隆を除く人物は、会津攻めへの参陣を求められたが、病気等の理由により参陣できず在地に留まっていた者であった。慶隆の場合、当初より会津参戦を意識していたことは読み取れず、また縁者の胤直が西軍に与したことを考えると、以下は全くの推測であるが、状況を自身で把握した後の東軍参加であったということになるかも知れない。また、一貫して東軍与同者である頼忠・貞泰両者と徳川氏をつなげる人物が

ともに直勝であることから、この時の永井直勝については注意していく必要があると推測される。

では、東軍に当初は参加せず、最終的に東軍に与することになった美濃国諸将の犬山籠城中の家康とのやりとりおよび、その貞泰の人脈でもある永井直勝との関係を軸に、章を改めて見ていくこととしたい。

## 二 犬山城に籠もる美濃国諸将の動向

尾張国犬山城は石川光吉が城主であり、遺される史料からは、稲葉貞道・典通兄弟、加藤貞泰、竹中重門、関一政が加わり籠城したことが確認できる。これら加わった四氏は全て美濃国内に知行地を持つものであるが、なぜ西軍に与し、また国を超えた犬山に籠城することになったのであろうか。

まず、これら四氏が西軍に与することになった理由についてであるが、これは美濃国をとり仕切る立場にある岐阜城の織田秀信が西軍に与したことであることは間違いないであろう。西軍による秀信の位置づけは、例えば前章で見た豊臣奉行衆が中川秀成に宛てた書状の第二条に「濃州之欺、岐阜中納言殿・稲葉右京(以下略)」(注32)とあるように、西軍に与道する美濃国諸将の先頭に秀信の名が記されることから確認できる。これについては、前章で見た加藤貞泰宛の書状に見るように、敵方となる徳川家泰自身が、当初は秀信を美濃国諸将の中心人物と認識していたことも裏付けられる。

次に、これら美濃国諸将が犬山の籠城した理由についてである



が、これも岐阜城の織田秀信に関連して考えるべきである。すなわち、東軍のこれ以降の進軍ルートを考えれば、借りに尾濃国境近辺での激突となった場合、岐阜城を守るためには、川向この犬山城を準備する必要があったからである。このような理由から、美濃国の西軍に与する諸将は犬山城に籠もることになったと考える。

続いて、籠城衆と家康とのやりとりであるが、当初から見られるのは前章で確認した加藤貞泰である。家康は、江戸に留まっていた時期に、市橋長勝や横井時泰などの木曾川筋の東軍に与している諸将に対しても、徳川氏からの先勢派遣などの動向を伝えていた(注38)。このような中で、貞泰以外に連絡を取っていたことが確認できない理由は、家康が当初、貞泰以外の犬山籠城衆は敵方と判断していたためと言うことになろう。前章に見た遠藤慶隆とのやりとりの中で、犬山籠城衆の一人である郡上人幡の稲葉貞通の知の安堵を認めないことを前提としていることから、このことは裏付けられることになる。

ところが、その中で家康と連絡を取っていた者が存在した。犬山城主の石川光吉である。光吉は恐らく七月末頃に家康に飛脚を送っており、家康から八月八日付けでその返書を送っている(注39)。ここでは田中清六が使者を務め、家康からの光吉兄弟に対する信頼の旨が伝えられている。

これ以降、犬山城を明け渡すまで、籠城衆と家康とのやりとりは見られない。しかし八月十二日に、家康は家臣であり先勢として派遣していた井伊直政と本多忠勝に対し、貞泰から遣わされた加藤家重臣を遣わすと同時に、犬山城の状況が伝わったので尾張

国に先に到着している福島正則と協議するよう伝えている(注40)。貞泰が一貫した東軍加担者であったことが改めて示されよう。このように城主である光吉及び籠城衆の一人である貞泰による家康とのやりとりがあったためか、同月二十三日にあった岐阜城攻撃の際に犬山城への東軍の攻撃はなく、八月二十五日には、光吉は近々犬山を開城するであろうことが伝えられた。なお、この時に貞泰家臣の加藤光政は、直政・忠勝両名からの「御判形」、すなわち花押を捉えた書状を得たことを記している。恐らく加藤貞泰(もしくは籠城衆全員カ)が、徳川先勢の責任者二人から開城後の保障を得たということになろう。

犬山の開城が決まる前後と思われる時期、徳川先勢の井伊直政から籠城衆に出された文書が確認できる。八月二十四日付の、加藤貞泰に不破郡岩手の竹中重門と石津郡多良の関一政を加えた三人に宛てられた、岐阜での戦勝を伝えると同時に犬山の開城を急ぐ旨を伝えた書状と、四日後の二十八日付の同じく三名に宛てられた、犬山城に置かれている人質を福島正則から遣わされた衆に引き渡すことと、そちらからの書状の内容は家康に伝えていることなどを記した書状である(注41)。これらの書状は直政・忠勝両名の連署による判物ではないため、前述の「御判形」とは異なる。しかし、その「御判形」に定められると想定される内々の承諾を遵守するためには、まずは犬山開城を急ぐよう指令しているものとなる。また、宛先に注目すると、少なくとも徳川先勢の直政からは、貞泰・重門・一政の三人がセットとなって犬山開城に向けての交渉が進められていたことが確認できる、逆に言えば、直政を交渉先とした者の中に、同じく美濃国からの籠城者である稲

葉貞通・典通兄弟は含まれていなかったことになる。

九月三日までに犬山は開城したようで、同日付で家康は、加藤貞泰と竹中重門を連名の宛先とした忠節を認める書状を出している(注30)。この書状は「両通之書状披見せしめ候」で始まることから、貞泰・重門両者の書状が同時に送られ、それを見た上での犬山開城を評価した返書となる(注31)。前述の井伊直政書状に記される、書状内容については家康に伝えている、とする内容が忠実に実行されていたことを示すことになる。また、同月五日には貞泰個人宛で、「殊に犬山の儀、其方の才覚を以て早々に相済み候事満足せしめ候」と、手柄を賞することが記される家康書状も出されている(注32)。

本章で確認した、これまでの籠城者の徳川氏との交渉状況に、この書状が連名個人宛で出されていることを加味すると、重門は貞泰を通じて家康に降伏した(東軍に与した)ことを示すことになる。……すでにこれまでの研究でも知られるが、まずは美濃国から入城した加藤貞泰の活躍が大きかったことが指摘できる。……

〔注〕

- 注29 7月20日付加藤貞泰宛徳川家康書状写  
 (「新訂徳川家康文書の研究」中巻、513頁)
- 注30 (慶長5年)7月20日付加藤貞泰宛加藤成之書状  
 (「新訂徳川家康文書の研究」中巻、513頁)
- 注31 (慶長5年)8月3日付加藤貞泰宛徳川家康書状  
 (「新訂徳川家康文書の研究」中巻、519頁)
- 注32 (慶長5年)7月26日付中川秀成宛前田玄以等豊臣三奉行連署書状

〔愛知県史〕資料編13.織豊3、923号)

注33 注32史料

注34 例えば、(慶長5年)8月4日付市橋長勝・横井時泰等宛徳川家康書状  
 (「愛知県史」資料編13.織豊3、933号)

注35 (慶長5年)8月8日付石川光吉宛徳川家康書状写  
 (「愛知県史」資料編13.織豊3、933号)

注36 (慶長5年)8月12日付井伊直政・本多忠勝宛徳川家康書状写  
 (「愛知県史」資料編13.織豊3、941号)

注37 (慶長5年)8月25日付山内一豊宛加藤光政書状  
 (「愛知県史」資料編13.織豊3、991号)

注38 (慶長5年)8月24日付竹中重門・加藤貞泰・関一政宛井伊直政書状  
 (慶長5年)8月28日付加藤貞泰・関一政・竹中重門宛井伊直政書状  
 (「岐阜県史」史料編古代・中世四、1125・1126頁)

注39 (慶長5年)9月3日付加藤貞泰・竹中重門等宛徳川家康書状  
 (「愛知県史」資料編13.織豊3、1007号)。

注40 「新訂徳川家康文書の研究」中巻、665頁で、このような解釈をされる  
 が、筆者もその見解に従う。

(慶長5年)9月5日付加藤貞泰宛徳川家康書状  
 (「愛知県史」資料編13.織豊3、1011号)。なお、東京大学史料編纂所蔵  
 謄写本「竹中家譜」(請求番号2075-992)を確認したが、(一)では貞泰・  
 重門の連名宛の家康書状しか写されていないことから、重門個人宛の同  
 書状は発給されなかったと考えられる。

### (3) 犬山城開城の主役は加藤貞泰 研究会・筆者記

今日まで歴史書籍や伝記物には、「岐阜城が落城したので犬山城加勢衆は東軍に寝返った」と書かれてきたが、加藤家文書や徳川家文書(写)を基に白峰旬氏や谷口央氏らが犬山城籠城衆の動向をつぶさに分析された結果、既に岐阜城の落城前から徳川方であったことが判明した。尾張犬山城に加勢に行く前に家康に味方することをほぼ決めていたようである。

加藤貞泰は、織田秀信の与力として、共に上杉討伐に向かう予定であったようであるが、秀信は石田方に傾いておりその機会を失った。よって貞泰は家康に忠誠を示すために、弟平内を江戸の家康に人質として差し出した。同じ頃に石田方の尾張・美濃の前線である犬山城へ加勢衆として出陣した。

家康にとって、犬山城の動向について、貞泰宛ての家康書状が五通もあり、石田方前線の重要視が伺うことができる。

犬山城主の石川貞清は、妻が石田三成の娘、あるいは大谷吉継の妹説があり、まさしく石田方である。犬山城内は加勢の武将の間には各々に葛藤があったことであろう。当初は西軍の加勢衆、途中から東軍の籠城衆、その後は、たてこもる籠城というより駐留していた状態であった。約一ヶ月にも及ぶこのような状況下、貞泰の指導で犬山城の加勢衆を徳川に味方させたのである。

そんな動向があつて、犬山城での戦闘は一切なく、東軍は犬山

城の押さえに中村一栄らを残し、池田輝政ら主力が木曾川を渡り、織田秀信軍を米野で破る。福島正則らは竹ヶ鼻城を攻略。翌日、岐阜城攻めに集中し、早々に落城する結果にもなった。岐阜城主織田秀信としては、犬山城加勢衆が岐阜城に加勢しなかったことは痛恨の極であつたであろう。

家康は岐阜城陥落の報を受け、ようやく江戸から美濃に行くきっかけにもなったのである。その後は、大垣城・関ヶ原へと戦況が移っていった。

これまでの前哨戦の流れから、美濃の武將の動向が関ヶ原の戦への火ぶたを切つたといつても過言ではない。

加勢衆の中で最年少(二十歳)の貞泰が、どうして指導力があつたのであろうか。推測するに、貞泰の才知や人柄もあつたことだと思われるが、貞泰より八才年上になる竹中重門の影響も大いにあつたと思われる。竹中半兵衛と加藤光泰は、岐阜城主信長の頃、共に秀吉の家臣として繋がりがあり、その縁からか半兵衛の嫡男重門と光泰の娘(貞泰の姉)が婚姻関係になっている。織田秀信の与力として両者は犬山城へ加勢に向かつたが、両者が家康に味方する決意を固めたものと思われる。

また若い貞泰を支える側近の存在もある。一人は父光泰の弟で叔父の凶書光定。もう一人は父光泰が長女に養子で迎えた(一柳)信濃光吉で、共に貞泰の親族である重臣である。

犬山城を戦場化にせず、無血開城した両者の功績は、目立たないが、徳川方にとっては、関ヶ原合戦の前哨戦として評価に値する攻防戦であつたと思います。

第四部 関ヶ原合戦

前記までは関ヶ原合戦の前哨戦・犬山城について一次史料の写などを基に紹介してきました。

関ヶ原合戦については、加藤貞泰の名がある史料は少ないが、伝記物の記述や布陣図を紹介します。

### 九月十四日 家康、木田く芝原北方経て赤坂へ

貞泰、領内の鵜飼船を数十艘集め舟橋を架ける

●〔愛知県史〕史料編13「慶長前記」(778・779頁)

#### 家康公御上洛第十九

・・・同十三日ニハ美濃国岐阜ノ町ニ御旗ヲ被立ケル、町人共御礼申上ル、則御感有テ永代諸役御免ノ御朱印ヲソ下シ賜フ、又黒野

左衛門尉モ御礼申上る、さて河度 偕川戸ノ河上シツケト云処ヨリ鵜飼船ヲ

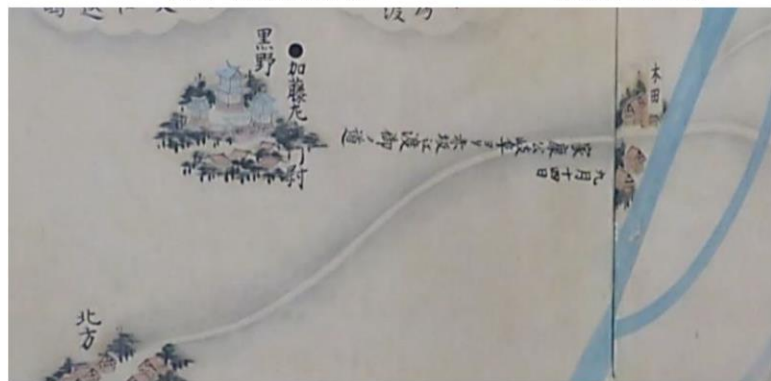
数十艘取集メ舟橋ヲカケ、長良ヨリ廻リテ神戸ノ村ニ御休息ノ剋、神戸ノ町人共御柿ヲ持参仕御礼申上ケル処ニ、則近習ノ人々ニ被下ケルヲ奪合ヲ御覧ナサレ、早ク大ガキヲトルト御秀句ヲホメセラレ御機嫌ヨク、神戸ノ町人共ニモ永代諸役御赦免ノ御朱印ヲ下サレ各勇ヨロコビケリ、・・・

●〔関ヶ原合戦史料集〕「内府公御陣場覚書」(358頁)

三日岐阜に御泊、同十四日には木田之舟渡し、芝原北方・本庄・神戸町より西之保村入口・・・同日正午頃、赤坂岡山へ御着陣。

木田尻毛(しつけ)

黒野 加藤左衛門尉



「九月十四日 家康公岐阜ヨリ赤坂江渡御ノ道」

原画 四戦場之図屏風(部分) 金沢市 前田土佐守家資料館 所蔵  
標本(犬山市 所蔵)より撮影



舟橋のイメージ  
歌川広重 越中富山  
舟橋図 部分より

●〔関ヶ原合戦を読む 慶長軍記 翻刻・解説〕2019年1月発行(306頁)

十四日ニハ稲葉右京進、御迎ニ出、黒野左衛門・西尾豊後守参テ御共。岐阜ヨリ木田ノ渡船、莚田郡ノ道筋ヲ押給処ニ、安八郡八条村瑞雲寺ト申禅宗、大ナル木練柿ヲ一折路頭ニテ、「大柿我手ニ入タリ」ト仰、則「小性共奪取ニセヨ」ト有ケレハ、近臣立寄テ拝レ之。瑞雲寺ニハ知行拾石永代寄附セラル。于レ今寺社御帳ニ柿寺ト載ケリ。赤坂諸將道々出向ヒ、角ヲ崩シテ稽首、岐阜・江

渡ノ忠功ヲ称美シタマフ。午ノ刻赤坂ノ岡山ニ御着陣ナリ。

(木田の舟渡し前の仏心寺に家康が小休止したと伝える腰掛石がある。)



家康公の腰掛石と伝える木田の仏心寺境内  
2011年11月筆者撮影

●『岐阜市史の扉をひらいて』吉岡勲著 昭和59年大衆書房発行(132頁)  
●『木田だより令和2年3月』木田歴史文化研究会 後藤信義記

貞泰は黒野へ移って数年で、関ヶ原の役にまきこまれた。織田秀信が岐阜城に抛り美濃の旗頭であったので、岐阜城に近い黒野城主として秀信の意向通り、西軍に応じ、犬山城を守る一部隊となったが、後に東軍となり、西上する家康に加わって、九月十四日家康が長良川を渡る折、鵜舟を集めて木田村に船橋をつくった。

### 九月十四日 貞泰、本田に布陣

#### 赤坂で家康と謁見・出陣の命

●『大洲秘録』御家伝 貞泰(32頁)  
家康公同国赤坂に御着陣 貞泰彼地に至り御目見す 此時仰せによつて同州本田に陣して大垣の押へとなる 本田は寺祐西備中守定持居城也

●『国史大系 徳川実記』第二編吉川弘文館(258頁)  
其後井伊兵部少輔直政が指揮にて美濃國本田に発行し、大垣に對陣し、關原の軍終て後、

●『関原軍記大成』第二卷(416・417頁)  
稻葉京兆父子・竹中丹後守・加藤左衛門尉・関長門守、其外信州木曾住人馬場半右衛門・千村平右衛門・山村甚平衛等も、岡山の御陣所に参りけるに、各御前へ召出され、竹中丹州・加藤金吾・関長州には、本領を給はる。千村・山村、其後に尾張の御家人になる。此時、稻葉京兆は、暫く領地を没収せられ、勢州山田の社に蟄居ありしが、程なく豊後國臼杵を與へらる。

●『北藤録』卷之九 貞泰之伝(66頁)  
一 同月十四日、東照宮赤坂ニ御着陣、貞泰彼地ニ趣キ拝謁ス。  
忠勲ノ儀ヲ御感アリ、明日関ヶ原へ趣クヘキモノ由ヲ命セラル。

●『関原軍記大成』第三卷(115頁)  
尾州犬山の隣人関長門守は、先鋒へ馳赴くべき為に、馬をめぐるが、途中にて井伊兵部を見懸け、某は誰の御手に付き申すべきやといひければ、我等同道申さんといふによつて、長州も討連れて進みけるが、本多中務少輔、横合より馳来り、井伊兵部に向ひ、御邊と我等両先鋒を承りたるに、何とて拔懸せらるるや。



## 九月十四日夜 西軍・大垣城へ関ヶ原へ移動

### 石原峠を通り布陣

合戦の前夜、西軍の石田三成・小西行長・島津義弘・宇喜多秀家らは、雨の夜大垣城を出て南宮山の南を迂回し、全軍を安全地帯の藤古川西岸に引き入れて山中村と石原峠から所定陣地へ移動。その石原峠の所在地を調査された田邊信行氏論文の一部を紹介。

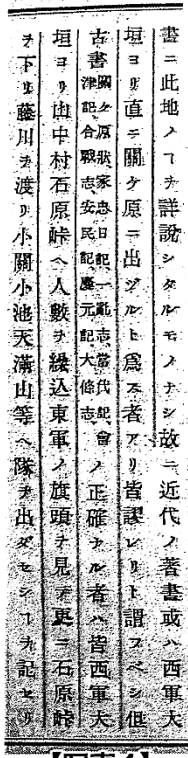
●〔関ヶ原の歴史 No.274 2014年4月号〕 関ヶ原歴史を語る会発行「テーマ 失われた石原峠を探す」部分掲載 提案 田邊信行

### 三、石原峠と関ヶ原合戦

#### ① 決戦前夜の関ヶ原

決戦前夜から当日未明にかけての関ヶ原方面に於ける西軍の動きを「関ヶ原合戦圖志」によって見ると、同書付録第二八頁に次の記述がある。

『西軍大垣ヨリ山中村石原峠へ人数ヲ繰込東軍ノ旗頭ヲ見テ更ニ石原峠ヲ下リ藤古川ヲ渡リ小関小池天満山等へ隊ヲ出ダセシ。』(写真4)



【写真4】

即ち大垣城から関ヶ原へ転進した西軍約三万の軍勢は一旦藤古川を越えて山中村と石原峠附近に集結し東軍の様子を見計らった後、石原峠を下り再び藤古川を渡って所定陣地へ各隊左記の如く展開したのである。

#### 西軍各隊展開の様相(原文要旨)(図2及び写真6参照)

・浮田秀家「石原嶺ヲ引下シ谷川ヲ渡リ関ヶ原西北ノ山ヲ後口ニ当テ辰巳ニ向テ陣ス。西北ノ山トハ即チ天満山ヲ曰フナリ」(同書本文第一八二頁)

(注、石原嶺は石原峠と同義。また谷川とは藤古川の一部を指し、今はダム湖に沈んでいる部分。この辺りは当時渡渉可能で天満山裏手へ渡れた。)

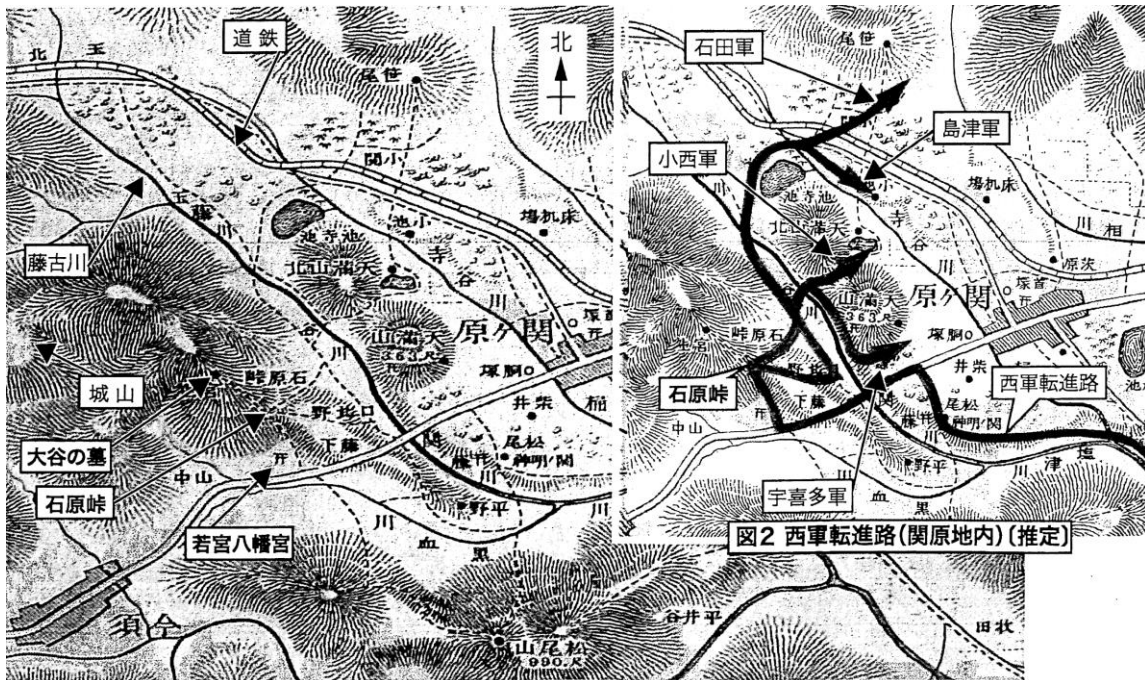


図1. 関ヶ原地理略図(関ヶ原合戦圖志の図に名称等追加)  
明治25年当時の道(点線部)に注目

図2 西軍転進路(関原地内)(推定)

九月十五日 関ヶ原本戦

―黒田長政・加藤貞泰・竹中重門 早朝、丸山狼火場着陣―

《高田屋九兵衛の記述 B類布陣図の原点か》

●〔綿考輯録〕第二巻 卷十六(348、349頁)

扱関ヶ原町ニ而高田屋九兵衛と申者、御合戦の次第を先祖以来伝来せし由ニて、<sup>はなし</sup>絵図をも所持致候間、則古戦場ニ伴ひ所々見廻りて色々<sup>はなし</sup>漸を承候に、実もと思ふこと多く、また誤り伝へたりと聞ゆるも有之候、則九兵衛絵図に添て持伝へ候覚書之内ニ左之通有之候、高田屋九兵衛か覚書之内ニ 関原町ニ而古戦之事精く書記いたし候を所持

一 家康公御本陣野上村之西、南山麓桃配に御陣を居られ、御旗関原の本町口迄、御旗本は右桃配より段々拾貳町之内陣とり、関原西海道より南方大関村之関屋明神之辺迄、福島左衛門大夫・京極修理大夫・蜂須賀阿波守・藤堂佐渡守乾之方ニ向て陣を取、関原海道より北合川山口より八幡宮森迄、金森法印・細川越中守・加藤左馬助・田中兵部少輔、右合川山口より三丁程東の山手丸山といふ所ニ、黒田甲斐守・加藤左衛門尉・竹中丹後守、此所より松尾山西方筑前中納言之備迄道法三十式丁有、右丸山烽火場也、…

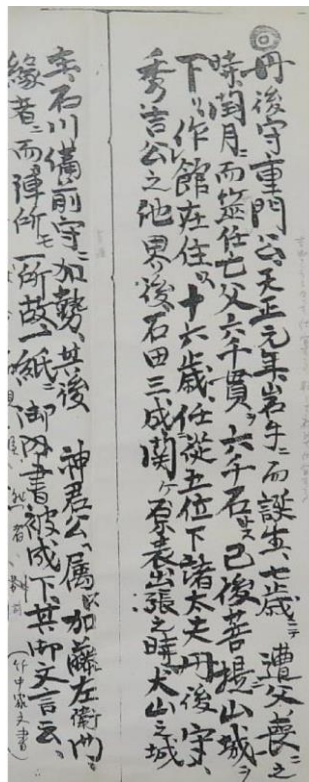
●〔関東御合戦当日記〕「関ヶ原合戦史料集」(391頁)

関東勢備、関原町西入口ヨリ、松尾村関姫明神ノ森迄ニ、福島左衛門大夫・京極修理大夫・蜂須賀阿波野守・藤堂佐渡守等乾ノ方向へ向テ備フ。合川山口ヨリ八幡宮森ノ辺マデニ、金森法印・加藤左馬之助・細川越中守・田中兵部等、ソレヨリ五町程引退テ、瑞竜寺ノ丸山ニ黒田甲斐守・加藤左衛門尉・竹中丹後守陣ス

●〔明泉寺旧記 過現二世牒〕垂井町岩手明泉寺所蔵

「岩手の歴史と文化を守る会」内海会長や「竹中半兵衛重治公顕彰会」栗田会長らとの交流会にて紹介して頂く

過現二世牒は、明泉寺第十世、竹中元甫<sup>げんぼ</sup>が竹中氏第七代領主竹中重栄の整理記録した文書を調査研究し記したもの。



「明泉寺旧記 過現二世牒」  
明泉寺 垂井町岩手所蔵

丹後守、秀吉公之他界後、石田三成関ヶ原表出張之時、犬山之城主、石川備前守ニ加勢、其後神君公へ属ス加藤左衛門、縁者ニ而、陣所モ一所故、一紙ニ御内書被成下、其御文言云。

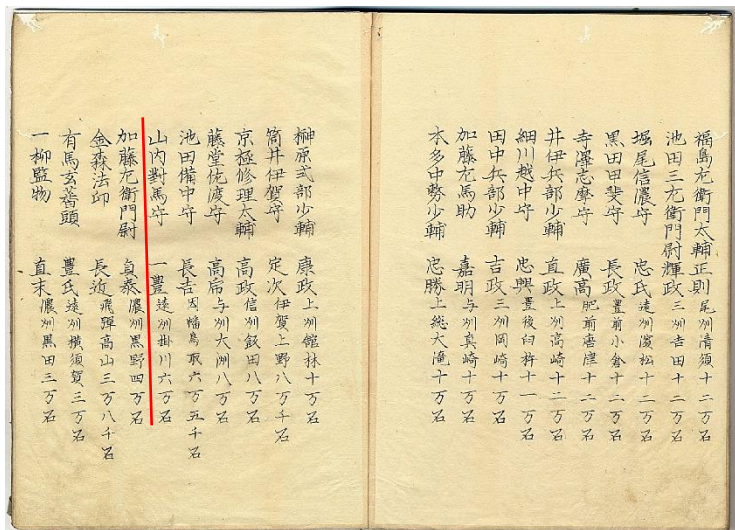
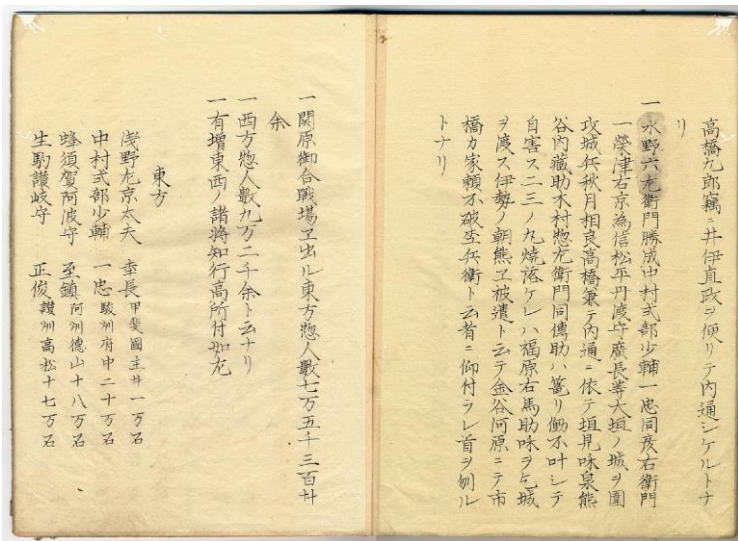
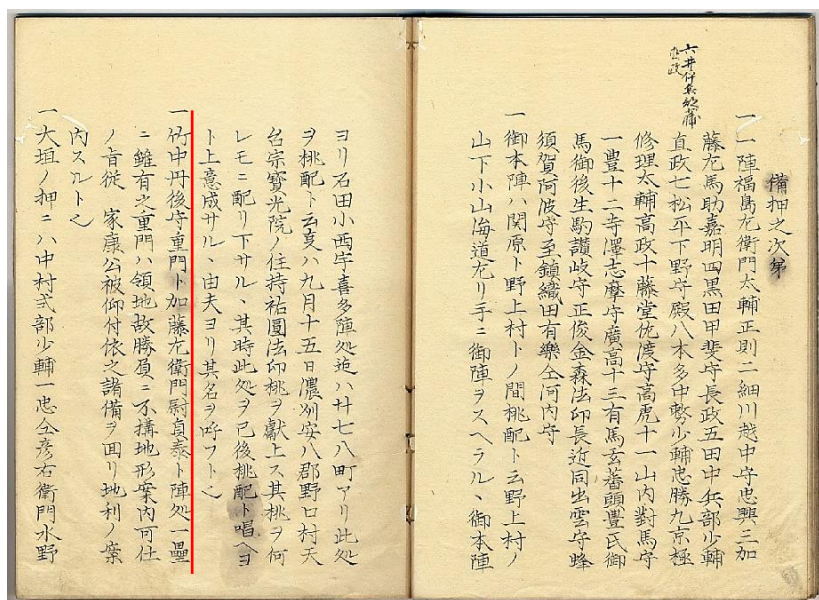


●「関ヶ原御合戦物語」(大垣市立図書館蔵)

一 竹中丹後守重門ト加藤左衛門尉貞泰ト陣処一壘ニ雖有之重門ハ領地故勝負ニ不構地形案内可仕ノ旨従 家康公被仰付依之請備ヲ回り地利ノ案内スルト之

この「関ヶ原御合戦物語」は、宝永三年(1706)に竹中家の古記を七代目竹中重栄が編纂したもので、陣所が竹中・加藤・黒田が同じ烽火場附近の布陣図(図⑦)と共に綴じられている。三代目が竹中重門であり、当事者の文献である。

(嘉永三年(1850)の写本)



「関ヶ原御合戦物語」大垣市立図書館 所蔵

●『綿考輯録』第二卷 卷十六(334頁)  
黒田・竹中等ハ合川を渡り丸山と云処ニ取登 此所合図の狼煙場也

考察Ⅱ「竹中等ハ」の等は加藤左衛門尉と思われる。

## 合戦

●『関原軍記大成』第二卷(93頁)  
『関ヶ原町史』 通史編上巻(322頁)

### 内府公、岡山御出馬

家康の出馬

家康、諸將を部署す

り、明日拂曉に出馬して、一戦に敵を打果すべし。内府公も、續いて御馬を出さるべしと仰せらる。法齋、御前を退きければ、御使番を召し給ひ、定置かるゝの次第の如く、諸將、青野が原へ發向せらるべしと、御下知あり。是に依つて、一番羽柴左衛門太夫正則父子・藤堂佐渡守高虎父子・田中兵部大輔吉政父子・生駒讚岐守正俊・戸川肥後守政利・坂崎出羽守貞盛・桑山伊賀守貞晴・舍弟相摸守一貞・大野修理亮治長。二番羽柴越中守忠興父子・黒田甲斐守長政・加藤左馬助嘉明・織田有樂父子・竹中丹後守重門・羽柴伊賀守定次・松倉豊後守重正。三番下野守殿・井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝・關長門守一政・加藤左衛門佐直泰、此外、小身の輩にては、猪子内匠助秋信・天野周防守景俊・岡田勝五郎善長・山城宮内小輔秀宗・野々村三十郎雅成・平野權平長泰・津田長門守信成・中村文藏行安・舟越五郎右衛門永景・佐久間久右衛門安政。

内府公岡山御出馬

九三



「徳川家康肖像画」

岐阜市西荘 立政寺 所蔵

関ヶ原合戦直前の9月13日、家康が岐阜を通過したその最、立政寺の住持らが接待したとされる。武将姿の家康肖像画は少なく貴重な画像。

立政寺は明智光秀と細川藤孝の仲介により織田信長が將軍足利義昭を迎えた場所。

↑(加藤左衛門佐直泰は誤記)  
佐↓尉  
直↓貞



●『改正三河後風土記(下)』 関原御陣備付先手合戦の事(329頁)

東軍の御先手福島左衛門大夫・同刑部大輔正之は当年十六歳、その跡に引続き井伊兵部少輔は下野守忠吉朝臣を伴ひ参らせ、不破の関八幡を後にあてて、山中の道筋を立切て備を立る。福島が右の方北へ連て黒田甲斐守・細川越中守・同与一郎・同与五郎・加藤左馬助北国筋に向ひ中筋に備を立る。又井伊が備の脇牧田筋には藤堂佐渡守・京極修理大夫、夫より北伊吹山の麓に当りて、田中兵部大輔・同民部少輔・生駒讚岐守・寺沢志摩守、引続き織田有楽・同河内守・津田長門守・戸川肥後守・竹中丹後守・稲葉右京亮・関長門守・加藤左衛門佐、是に並んで本多因幡守・松倉豊後守・桑山伊賀守・小出遠江守・佐々淡路守・亀井武藏守・筒井伊賀守・遠藤左馬助・蜂須賀長門守は魚鱗に備へ、本多中務大輔・同内記は先陣と御旗本の間に在て、弱からむ方を救はんと伊吹川原に備へたり。

(両陣の備大成記は蹠脱にて誤あるに似たり。成績・基業によりしるす。家忠日記とは大同小異なりとしるべし)

●『関原軍記大成』第3巻(94頁)

関原軍記大成 卷之二十四

吉

舍弟源六勝元吉田織部正信勝石川伊豆守定政伊丹兵庫入道意頼村越兵庫頭征直福原平左衛門直員能勢宗左衛門頼方志水小八郎忠仲祐植平右衛門則明溝口源太郎政一赤井五郎忠家同五郎作忠泰野間久左衛門秋弘甲斐庄喜右衛門正直長谷川甚兵衛一世森宗兵衛忠盛落合新八郎顯公堀田若狭守重氏別所孫次郎友次佐藤三河守信元佐々淡路守顯政三好新右衛門入道道三同新左衛門慶清同越後守慶正堀田權八郎重國中川半左衛門清一池田備後守知政同彌右衛門忠政兼松又四郎正吉山岡修理亮兼彌松波平右衛門秋徳仙石式部渡邊筑後山中參河佐々喜三郎大島雲八加藤平内河村助左衛門林丹波杉原四郎左衛門庄田小太夫父子多羅尾村越伏屋野尻石尾山口沼野長崎田中奥山此輩或諸將の手に付くべしと仰せ出さる。總て、御先鋒廿六隊なりとかや。遊軍は蜂須賀長門守至鎮・稻葉右京亮

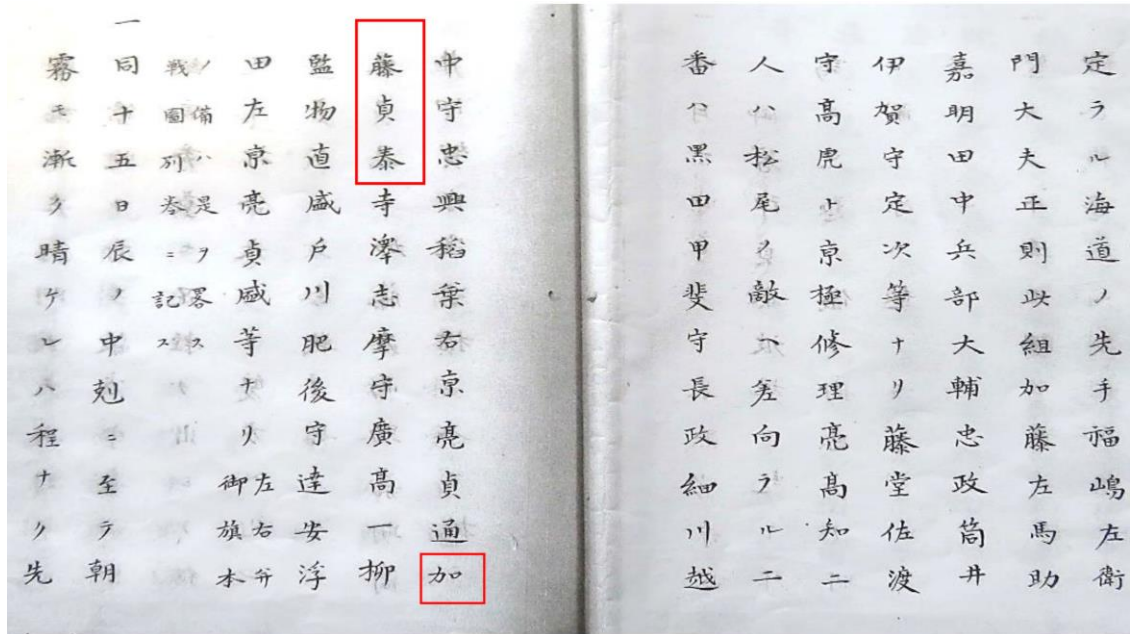


紙芝居「関ヶ原」より  
研究会制作 画名知歎

↑加藤平内は貞泰の弟で四才年下の十六才。家康が上杉討伐の際、貞泰は平内を人質として江戸の徳川へ差し出した。平内は、江戸から小身の者どもとして中の寄合衆と共に関ヶ原に参戦する。これらの後ろに桃配山に本陣を置く家康の本隊があった。

●「関原軍記大成」第三巻(141頁)

石田治部少輔は、合戦の勝負區々なるを見て、高野越中・大山伯耆兩人を二將として、北の山手へ廻し、敵の横を討つべしと謀りしを、内府公、遙に之を御覽じて、本多中務方へ御使を立てられ、敵兵、横鎧に突懸ると見えたり。其心得せしやと仰せけるに、中務承り、右備へ寄合衆を差向けたりと申しけるが、彼の輩、高野・大山と戦ひて突類し、佐久間久右衛門・加藤平内・渡邊筑後守首を取る。高野・大山、既に崩れければ、



加藤氏家史「北藤録」巻之九 貞泰之伝 部分

### 貞泰、二番隊で島津隊と戦闘

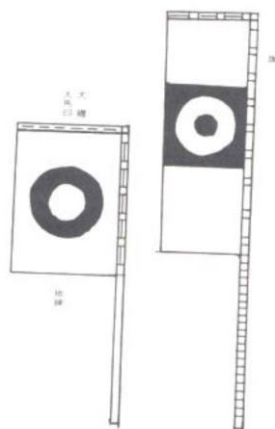
●『北藤録』巻之九 貞泰之伝(66、67頁)

一 翌レハ十五日、関ヶ原ニ於テ御合戦アルヘキトテ其備ヲ定ラ  
ル。海道ノ先手福島左衛門大夫正則、此組加藤左馬助嘉明・田中  
兵部大輔忠政・筒井伊賀守定次等ナリ。藤堂佐渡守高虎ト京極修  
理亮高知二人ハ松尾ノ敵ヘ差向ラル。二番ハ黒田甲斐守長政・細  
川越中守忠興・稻葉右京亮貞通・加藤貞泰・寺沢志摩守広高・一  
柳監物直盛・戸川肥後守達安・浮田左京亮貞盛等ナリ(左右并御旗  
本ノ備ハ是ヨリ略ス。戦図別巻ニ記ス。)

一 同十五日辰ノ中刻ニ到テ朝霧モ漸ク晴ケレハ、程ナク先手  
福島左衛門大夫正則手ヨリ鉄炮ヲ打ス。敵方宇喜多中納言秀家  
モ足輕ヲ出シテ鉄炮ヲ打合、夫ヨリ双方入乱レ思ヒクニ合戦ヲ  
始メケル。是ヲ見テ加藤左馬助嘉明・筒井伊賀守定次横ニ入りテ  
挑ミ戦ケリ。細川忠興・稻葉貞通・加藤貞泰ハ中筋島津兵庫頭入道  
義弘ト取結フ。寺沢・一柳・戸川等ハ宇喜多ノ二ノ見小西衆ヲ突  
崩シテ其ヨリ中国勢ニ突懸ル。前後左右御旗本ノ面々モ入乱レ戦  
フテ、分捕高名シテ争ヒシカ、石田方既ニ負色ニナリシカトモ、  
宇喜多勢尚喰留テ我モクトカセケリ。島津入道義弘ハサル小兵  
ニテ、他ノ勢ヲ交ス手ノ者四千ニテ、備ヲ五百充小組ニシテ幾ツ  
モ入替々々軍サセ、疲ルレハ本陣ヘ引取り、休セテハ出シテ働カ  
ス。其進退寂軽ク、兵ヲシテ手足ノ如ク遣ヒケリ。是ニ依テ負レ  
トモ少シモ弱ラス。是ニ依テ負レトモ少シモ弱ラス。又味方ニハ  
松平下野守忠吉卿ノ手ノ者并井伊直政従軍共モ来リ加テ大勢ニ



成シカハ、毎度敵ヲ突崩シ追討スレハ、又敵ノ荒手ヲ以テ追返ス程ニ、細川忠興・加藤貞泰・稲葉貞通共ニ以上五備、筑紫衆ニ懸テ挑合トイヘ共、勝負未タ見ヘサリケリ。時剋移テ松尾山ヨリ筑前(本名小早川)中納言秀秋裏切アレハ、敵將大谷刑部少輔吉隆・平塚因幡守為広・戸田武蔵守重政、或ハ自害或ハ討死シケレハ、石田方総敗軍ニナツテ、諸將思ヒクニ落行、終ニ御理運トソ成ニケル。



加藤氏の旗と馬印  
「蛇の目紋」  
「北藤録」より転載

●〔関ヶ原合戦図志〕神谷道一著 明治二十五年四月刊  
●〔綿考輯録〕第二卷(329頁)

合戦誌ニ(二)番ハ黒田長政、細川忠興、稲葉貞通、加藤貞泰、寺澤廣高、一柳直盛、戸川達安、浮田貞盛、編年補、濃鬪雌雄、花村氏古圖、皆之ニ同ジ御手配留ニ〔関ヶ原海道ヨリ北、相川山口ヨリ八幡宮森迄金森法印、細川越中守等云々〕安樂寺奮記略と同ジ 古山氏所有圖ニ〔相川ノ北黒田長政、加藤貞泰、竹中重門〕黒田長政北ノ山手ニ陣セシ會津記、烈祖成績、皆同ジ 「トアルニ據リ之ヲ實地ニ比照スルニ關ヶ原驛ノ北ヨリ岡山ノ下迄平地凡ソ六町許相川其中ヲ貫キテ流ル川南ハ概ネ原野ニシテ其北ハ田園ナリ岡山ノ下ニ数戸ノ人家アリ蓋

シニ番隊ノ諸將ハ此六町許ノ内ニ陣セシモノニシテ黒田竹中加藤ノ三隊ハ相川ノ北岡山ノ下迄ニ屯シ細川等ノ六隊ハ相川ヨリ南、八幡神社ノ後口迄ニ陣セシモノナルベシ然レモ一々其誰ノ陣地タリト云フ□ヲ詳カニシガタシ……

二番隊 細川忠興、稲葉貞通、寺澤廣高、一柳直盛、戸川達安、浮田直盛ハ中山道ノ北、中筋 関ヶ原驛神社ノ後ヨリ相川ニ至ル迄北国道ニ沿ヒタル地ヲ云フニ備ヲ並列シ黒田長政、加藤貞泰、竹中重門ハ岡山ノ麓ニ屯ス此諸隊ハ笹尾小池天満山ノ西軍ニ對セリ 始末記、手配○竹中ハ小身ナルヲ以テ寄合集一隊ノ中ニアリシガ此邊ノ地頭タルヲ以テ豫テ家康ヨリ地理ノ内ヲ糞スベキ旨ヲ命ゼリ此岡山ノ下ニ來リ來リシハ蓋黒田ノ為ニ地理ノ嚮導ヲ兼テタルモノナルベシ……

東軍ニ番隊ノ細川忠興、稲葉貞通、加藤貞泰等ハ松平忠吉井伊直政 合戦誌ニ細川稲葉加藤貞泰ハ中筋島津ト取詰ト又下野守殿ノ衆直政ノ從軍共馳加テ五備大勢ニ成トアリ ト興ニ小池村ナル島津ノ先隊ヲ攻撃セントス其景況ヲ進退秘訣ニ(公ハ○公トハ島津義弘ヲ云)……

●〔綿考輯録〕第二卷(329頁)  
考に一書、……又関ヶ原軍記大成に、十五日御備定、一番福島・藤堂・田中・生駒・戸川・坂崎・桑山・大野、二番細川・黒田・加藤・織田・竹中・羽柴定次・松倉、三番下野守殿・井伊・本田・關・加藤直泰此外小身之輩誰々とあり、……  
(考察ニ直泰は貞泰の二男でまだ生まれていない。貞と直の誤記。)

●『関ヶ原合戦史料集』「徳川十五代史」(330、331頁)

加藤貞泰作十郎ト称ス。美濃ノ人、其先世橋詰莊七十貫ノ地ヲ領ス。父ハ光泰作内ト云、豊臣氏ノ起ルニ従ツテ、シバシバ戦功アリ。近江高島ノ地ヲ賜ヒ二万石、又犬山大垣ニ従リ<sup>ワラ</sup>四万石、佐々成政ヲウツ時、罪ヲ得テ地ヲ失ヒ、大和納言秀長ニ仕フ。後ユルサレテ佐和山ノ城ヲ賜ヒ二万石、遠江守トナル

小田原平ヲキテ、改メテ甲斐ヲ賜ヒ、朝鮮ノ役ニ従フ。明人ト戦ツテ大ニ之ヲ破ル。石田三成其功ヲ忌ム。光泰俄ニ卒ス。世ニ伝フ三成ノ為ニ毒セラルト。貞泰ハ時ニ年十四、年幼キヲ以テ甲斐ヲ収メ、美濃ノ黒野ノ地ヲ賜フ四万石、左衛門尉トナル。会津ヲ征スルトキ、貞泰従フテ東行セントス。織田秀信、三成ニ応ス

貞泰兵寡クシテ独立スルコトアタハズ。陽ツテ秀信ニ従ツテ犬山ヲ守ル。弟平内ヲ質トシテ志ヲ徳川氏ニ通ス。貞泰東軍ノ至ルヲ聞テ、関一政・竹中重門等ト共ニ赤坂ノ營ニ至ル。関ヶ原ニ戦フ。功ニヨリテ二万石ヲ増ス、(合六万石)、伯耆米子ノ城ニ徙ル。左近将監トナル。大坂ノ冬陣ニ従ヒ、夏ノ役ハ戦フニ及バス。元和三年大洲ニ徙リ、今年卒ス

(考察Ⅱ今年卒スの年は、元和九年(二六二三)である)

●『NHKカルチャージャラジオ』関ヶ原合戦と直江兼続 笠谷和比古

貞泰弟平内光直・寄合衆で江戸から参戦

東軍の布陣は……それぞれ先鋒の備を構成した。

これに中小の将士が寄合勢として加わる。織田長益(有楽)・津田高勝・佐々行政・古田重然・亀井茲矩・加藤光直らである。こ

れらの後ろに桃配山に本陣を置く家康の本体があった。

関ヶ原合戦での東軍の前線部隊は四万人強と言われたが、うち徳川の主な兵力は井伊直政と松平忠吉の軍勢あわせて六〇〇〇人余でしかなかったのである。残りはすべて豊臣系の将士であった。

九月十六日

## 徳川方の勝利後

●『北藤録』巻之九 貞泰之伝(67頁)

一 関ヶ原合戦御勝利ニ依テ、東照宮直ニ江州佐和山へ御進發、貞泰御共ス。此時稲葉右京亮貞通ト貞泰兩人、江州水口ノ城ヲ攻ヘキ旨ヲ命セラレ發行ス。城主長東大蔵大輔正家城ヲ明退ク故合戦ニ及ス。夫ヨリ摂州大坂マテ共奉シ、此地ニテ御暇下サレ黒野へ帰りケリ。程ナク三成以下ヲ京都ニ於テ誅伐シ玉ヒ、天下悉ク関東ニ帰セリ。

●『国史大系 徳川実記』第二編吉川弘文館(258頁)

関原の軍終て後、稲葉右京亮貞通と共に、長東大蔵大輔政家が水口の城にむかふ。政家一戦にも及ばず城を捨て走りければ。貞泰等はお供して大坂にいたる。

●『大洲秘録』御家伝 貞泰(32頁)

関東御勝利によつて 家康公直ニ江州佐和山江御出 貞泰御共す

此時稻葉右京亮貞通と貞泰兩人 江州水口の城を責へき旨仰付られ発向す 城主長束蔵太夫正家明退く故合戦に及ハす 夫より撰州大坂迄御共し 大坂に於て御暇を下され黒野に帰セリ



「四戦図屏風」六曲一隻  
関ヶ原合戦図（部分）  
岐阜市歴史博物館 所蔵

### 九月十九日付 竹中重門宛て家康書状

西軍の將、小西行長を捕まえたことへの礼状。

● 『不破郡史』 上巻 竹中家文書（597頁）

こにしせつつかみめしとりたまひ、せいをいれらるのだん、しゆくちやくのいたりにせうろう、  
小西撰津守召捕給、被レ入レ精之段、祝着之至に候、  
猶期ニ後音一、恐々謹言  
九月十九日  
（重門）  
家康 朱印  
竹中丹後守殿

### 貞泰宛て家康書状 鮎鯨の御礼

● 『北藤録』 卷之九 貞泰之伝（120頁）

一 濃州黒野在城ノ節、東照宮ヨリ賜ル御書ノ写。

えんろあゆずし おけおくりたまわりせうろう  
遠路鮎鯨五桶送給候、祝着之至候。  
しゆくちやくのいたりせうろう。  
なおこういんのときをさしせうろう じようしよりやくせしめせうろう。  
猶期ニ後音之時一候条令二省略一候。  
きようきようきんげん  
恐々謹言。  
うずき二十  
卯月廿九日 家康公 御諱御書判  
おんいみなおんかきはん  
加藤左衛門尉殿

### II 鮎鯨献上は関ヶ原の前？後？II

左衛門尉の名は、黒野在城の官職名。米子へ転封後は、左近太夫将監。よつてこの書は黒野在城のときであるが年代が不明。卯月は旧暦四月。貞泰は文禄三年（1594）〜慶長十五年（1610）の間に黒野城に在城。

美濃岐阜の鮎鯨資料によると、將軍への鮎鯨献上は、慶長八年（1603）に美濃国奉行であった大久保長安が徳川家康、秀忠に鮎鯨を献上したのが最初と言われている。また大坂夏の陣の元和元年（1615）の帰途、長良川を訪れた徳川家康が、地元のスシ元にあゆずし作りを命じたことが始まりと伝えている。

慶長八年より年代が前だとしたら慶長五年九月関ヶ原合戦前の四月の可能性も考えられる。あるいは合戦後、慶長六年以後の可能性もある。

第五部 関ヶ原合戦布陣図

## (1) 布陣図について

2013年、別府大学の白峰旬氏が「関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察」を発表、関ヶ原合戦の武将や配置など布陣に関する研究成果の解明で大きな進展となった。要約すると明治に発行の参謀本部編纂「日本戦史 関ヶ原役」が近年の関係書籍に引用されてきた。しかし江戸時代に流布した布陣図は、陣形に着目するとA類・B類・その他の3種類に分類(56頁・表1)され、参謀本部図(58頁)は江戸時代に流布した布陣図をトレースしたものではなく、参謀本部が明治時代に作成したオリジナルであると研究発表された。

江戸時代に流布した布陣図は、「高山公実録」(藤堂高虎伝) 収載等の布陣図(59頁) A類と、「武家事紀」(山鹿素行編著) 収載等の布陣図(60頁) B類に分けられ、概ねB類が参戦武将の一次文書に近い布陣図のようだとまとめられた。布陣図の特徴は、絵図の大きさにもあり、大山から近江まで広範囲の表示で比較的大サイズのA類と、合戦場周辺表示の小サイズのB類に分類整理された。

また、武将名や位置にA類とB類に相違があり、B類では、そのひとつに岡山(丸山)烽火場附近に竹中丹後守・加藤左衛門尉・黒田甲斐守が布陣している。A類や参謀本部図には加藤貞泰の名がない。また加藤家の家史「北籐録」収載布陣図には、「武家事紀」布陣図と同じく烽火場附近に貞泰の名があるが、記載文には烽火

場布陣の記述がない。よって絵図との整合性がないので信憑性を指摘されている。

土山公仁氏(元岐阜市歴史博物館学芸員)は、A類の元になっている布陣図は江戸時代前期に描かれたという個人蔵(徳川宗家)「関ヶ原御陣之図」の可能性を推定されている。

また「武家事紀」の布陣図は、本文と整合性がないので、絵図の成立が遅れ、素行没後、門弟達が收拾したものではないかと推定。これについては今後の検証が必要と言われる。

2019年に「慶長軍記」の翻刻・解説版が井上泰至・湯浅佳子氏により発行された。「慶長軍記」は関ヶ原軍記物の先駆けとして書かれていると報告され、現存する多くの屏風・絵図・伝記はこれを基に書かれたという。

その「慶長軍記」には加藤貞泰らの合戦記述が書かれていない。よって他の伝記物や屏風絵に加藤貞泰の記述がない訳にもなる。白峰旬氏が調査した「表1 江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図」の他にも、研究会の調査でB類などの布陣図が各地に多数存在していることが判明した。

本書は、江戸時代に描かれた加藤左衛門尉(貞泰) 又は誤記の表示がある布陣図を中心に博物館、資料館、寺院などの所蔵者に掲載許可を頂き、「表2 本書に紹介の布陣図紹介」に及び、それぞれの布陣図を紹介します。

## (2) 江戸時代の布陣図分析

- ・表1 白峰旬氏論文「江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図」。所蔵者・名称・成立年・布陣図の大きさ・布陣状況をA類、B類、その他に分類した表。
- ・表2 「本書に掲載の布陣図紹介」加藤左衛門尉（加藤貞泰）の名があるB類などの布陣図のリスト。（表1の布陣図5枚と新たな布陣図12枚）を掲載。
- ・表3 「A類相当のその他布陣図」加藤貞泰の記載が無い布陣図で、主に畳サイズ程度のリスト。
- ・表4 白峰旬氏論文「高山公実録」・「武家事紀」・「日本戦史 關原役」収録の布陣図に記載された家康方武将名の比較表。
- ・表5 白峰旬氏論文「家康方軍勢の布陣の構成」加藤貞泰名の記載分のみ表示。
- ・表6 「軍記物や編纂資料等における加藤貞泰の記述有無」犬山加勢・烽火場布陣・本戦の記述有無の表。
- ・布陣図紹介 図①～図②（表2の全布陣図）

## (3) 江戸時代の布陣図考察

- ▲ A類は、関ヶ原～大垣城～岐阜城～犬山までの広域を描かれている。A類には加藤貞泰の名はない。
- ▲ 布陣図の大きさは、A類が広範囲の表示で畳一枚相当のサイズが多い。B類のサイズはA6～A1相当。

### ▲ 布陣図の普及

- ・ B類の布陣図が世に広く普及しているのは、絵図の大きさも小さく、写し易く、刷り物も多数発行されていることも要因の一つであると思われる。

### ▲ A類、B類共に東軍の武将が分散しており、関ヶ原到着頃の布陣と思われる。戦闘の直前ではないようである。

- ▲ 「武家事紀」収録布陣図・「北藤録」収録布陣図・「高山公実録」収録布陣図は、綴じてある紙面2枚分。「慶長軍記」収録布陣図は、綴じてある紙面3枚分を繋いで掲載。

- ▲ 「武家事紀」延宝元年（1673）編纂 所収の戦略図（川中島・大坂の役など全42戦図）を観察すると、多くの戦図が同一の絵師のようで、山・川・道・文字などが同色の様式で描いていることが分かる。多くが別図を基にまとめたようである。

- ▲ 図④「慶長軍記」所収「関ヶ原戦場之図」は、寛文三年（1663）で布陣図の中では合戦年に最も近い。「関ヶ原合戦を読む・翻刻版」によると、概ねA類に相当するとされているが、黒田甲斐守、細川越中守は、北国街道の西側に布陣しており、A類・B類にもない布陣である。

- ▲ 図④が合戦年に最も近く、この絵図の信憑性が高いと仮定すると、この布陣で細川忠興らと共に貞泰は中筋で島津勢と戦っていたことになる。（加藤家史「北藤録」の記述による）

### ▲ 防御柵

#### ○ 北国街道沿いの防御柵

- ・ 小池村の南側に位置し、北国街道をまたいで合川まで幅広い柵の表示は、図③、図④、図②及び本書に掲載していないが徳川宗家「関ヶ原御陣之図」などA類全般に描かれている。
- ・ 小池村と小関村間の辺りで北国街道から合川までの一部分に



○中山道沿い藤古川と山中村間の防御柵

・ 図④は二箇所に柵。

・ A類の一部、徳川宗家「関ヶ原御陣之図」など多くの布陣図は一本の柵・B類には柵なし。(B類は柵が簡略表<sup>二</sup>示)

▲表1の岡山大学付属図書館池田家文書は全10枚の関ヶ原布陣図を所蔵。各布陣図は、「絵図公開データベース・戦略絵図」から閲覧できる。この中で加藤左衛門尉の名があるものは3枚。表1の分類でその他「関ヶ原御陣場絵図面」は加藤左衛門直泰の名。

▲表1の蓬佐文庫には、全7枚所蔵。そのうち「図987」は、表2・図⑩と同一で、どちらも同じ絵師の写と思われる。

▲表1の岐阜県図書館蔵2枚の「慶長之役古戦場之図」は、略同一の木版多色刷であるが、整理番号80-89-2は、発行者印が「瀬川屋庄平」と80-89-3は「若松屋重兵衛」図⑧の違いがある。80-89-2と同じ原板の木版多色刷が図⑦であるが、朱色で西軍武将五名が追記している。

▲加藤貞泰の特異な布陣

・ 図②「関ヶ原合戦陣形図」は、東軍一番隊や二番隊など東軍の向きが西軍に対峙がなく不自然な表示であるが、この中で、二番隊の東側に一人だけ加藤左衛門尉の名がある。貞泰はこのように二番隊と離れていたの伝記記述も少ない？

・ この絵図の所蔵者は関ヶ原から近い柏原の成菩提院で、小早川秀秋が合戦前に泊まったと伝える。

▲筑前中納言(小早川秀秋)の布陣

殆どの布陣図では松尾山に筑前中納言と記されているが、図②は、藤古川の西に東軍に対して横並びに西軍の小川・脇坂・朽木・赤座。その前に筑前中納言。向きが曖昧であるが、戦闘

場所に近いようだ。

▲加藤左衛門尉の名がある布陣図の中で、描かれた年代が合戦に近いと思われるのは、図⑥「北藤録」、図⑤「武家事紀」の順と推定する。この2枚の絵図の特徴としては、同じB類の中でも以下の特徴がある。

・ 図⑤と図⑥は、紙の大きさ、山の形状や地名・武将名と配置がそれぞれ同じ。

・ 但し、図⑥は垂井町の南に池田三左衛門・池田備中守が記されているが図⑤にはない。写し忘れ？とすると「北藤録」収載布陣図の方が古い。

・ なぜかこの2枚だけが瑞龍寺山前の合川が描かれていない。A類、B類、その他ほとんどの布陣図に合川が描かれているが、当時、小川だったので省略？

▲加藤左衛門尉の誤記名

・ 図⑧は黒田甲斐守と竹中丹後守の間に加藤左馬介の名、直ぐ傍にも加藤左馬介の名があり、だぶって表示。黒田と竹中の間の左馬介には消し線が引かれているが、誤記と気付くも左衛門尉の名が判らなかつたようである。

・ B類の中に一部であるが、伝記と同様に加藤左衛門尉長泰や賀藤左衛門尉と誤記も見られる。

・ A類の布陣図全てに犬山城加勢の中に、加藤左衛門尉の名があるが、岐阜県歴史資料館蔵 天明七年(1787)「関ヶ原御陣場図」には加藤左馬助と明らかな誤記も見られた。

▲図②・2「高山公実録」収載「関原戦場畧圖」は、犬山城に加藤左衛門大夫。貞泰は慶長十六年以降に左近大夫に改名。

▲図②は奥書によれば寛政8年(1796)。合戦場はA類と同様の布陣になっている。これらの絵図は竹中元甫が、自ら調査し

たのではなく、他の絵図から写したものとと思われる。尚、黒田甲斐守・竹中丹後守はB類の布陣図と同様に加藤左馬助らと離れているが、この図には加藤左衛門尉の名がない。

▲本書に布陣図を掲載していないが、「個人蔵(徳川宗家文書)江戸時代前期の作成「関ヶ原御陣之図」について次の解説記事がある。

●「特別展 葵の時代 徳川将軍家と美濃」2016年 編集・発行 岐阜市歴史博物館・岐阜新聞・ぎふチャンより引用

『徳川宗家文書の「関ヶ原御陣之図」は、「美濃国絵図」の地理情報、「軍記物」などの軍学情報をもとにして、家康の事績顕彰と軍学研究のため、十七世紀には原本が成立したと思われる。徳川宗家に伝わったこの資料は他の類例と比べ、地理的情報や時代の新しい軍記物による注記がないため、現在知られている資料の中でも最も原本に近いと思われる。』と表現されている。

▲犬山城加勢衆について土山公仁氏は、大坂弓衆・同鉄炮衆は、リアリティに乏しいとコメント。確かに初期の布陣図と思われる徳川宗家「関ヶ原御陣之図」と「武家事紀」には記述がない。以降の布陣図や軍記物に追記されてきた可能性が高い。

#### (4) 丸山烽火場付近布陣の考察

B類布陣図の出典の元となるような記述として、細川家「綿考輯録」に注目します。書かれた年代や公開された年代は不明であるが、

「扱関ヶ原町二而高田屋九兵衛と申者、御合戦の次第を先祖以

来伝来せし由にて、絵図をも所持致候間、則古戦場二伴ひ所々見廻りて色々<sup>はなし</sup>断を承候に、実もと思ふこと多く、また誤り伝へたりと聞ゆるも有之候、則九兵衛絵図に添て持伝へ候覚書之内ニ左之通有之候、高田屋九兵衛か覚書之内ニ 関原町二而古戦之事精く書記いたし候を所持

一 家康公御本陣野上村之西、南山麓桃配に御陣を居られ、御籬関原の本町口迄、御旗本は右桃配より段々拾式町之内陣とり、関原西海道より南方方大関村之関屋明神之辺迄、福島左衛門大夫・京極修理大夫・蜂須賀阿波守・藤堂佐渡守乾之方ニ向て陣を取、関原海道より北合川山口より八幡宮森迄、金森法印・細川越中守・加藤左馬助・田中兵部少輔、右合川山口より三丁程東の山手丸山といふ所ニ、黒田甲斐守・加藤左衛門尉・竹中丹後守、此所より松尾山西方筑前中納言之備迄道法三十式丁有、右丸山烽火場也、・・・」

以上の記述は、B類の「武家事紀」所収の布陣図 図⑤、1と比較すると地名の誤字や道名表示に違いが見られますが、この覚書がほとんど一致している。また宝暦九年(1759)加藤氏の家史「北籐録」所収の図⑥などと同じ表示である。

私見ですが、もしかしたら「武家事紀」などの記述よりも前から布陣図が存在していたが、九兵衛が「世に伝わる伝記に誤りある」と指摘。世に出ていかなかったため伝記物にも書かれなかったのではないかという推察です。九兵衛所有の布陣図(B類)が後に広まった可能性を考えます。よって武家事紀の記述と布陣図に

整合性がないことを補完できる記述ではないかと推測する。

三名の武将布陣の伝記は、他に「関東御合戦当日記」に記述。また、「関ヶ原御合戦物語」や竹中氏の拠点である垂井町岩手「明泉寺旧記」には、「竹中丹後守重門ト加藤左衛門尉貞泰ト陣処一壘ニ雖有之重門ハ領地故勝負ニ不構地形案内可仕ノ旨従 家康公被仰付依之請備ヲ回り地利ノ案内スルト之」の記述は、竹中・加藤が開戦前、同じ陣所である丸山烽火場附近のことであろうか、又は戦場で一緒に布陣していたことを云うのであろう。

この「関ヶ原御合戦物語」の出典は、宝永三年（1706）、竹中家第七代の竹中重榮しげよしが竹中家に伝える諸書を合戦物語に編纂したものである。ちなみに重榮は、加藤信濃光吉の子孫で大洲藩から、岩手の竹中家へ養子となり濃州岩手に於いて六千石を領した藩主である。竹中半兵衛重治は二代目、重門は三代目になる。一族が残した史料でもあり信憑性は高いものと判断します。

### (5) なぜ貞泰名が伝記物にないのか

多くの伝記物と布陣図、どちらが先に書かれたか定かでないが、A類の布陣図と伝記物には貞泰名がなく、B類の布陣図に貞泰名がある矛盾について、また竹中重門の記述があるのに対して、貞泰の名が少ない点を次に推測する。

- ① 加藤家家史の伝記や竹中家伝記に犬山城加勢の一次文書状

の記録があるが、関ヶ原合戦の記述が乏しい。

- ② 伝記物の記述と、布陣図の貞泰名に整合性がない。

- ③ 「綿考輯録」の高田屋九兵衛の所持する覚書記述のごとく、貞泰名のない伝記が先に広まった。(推測)

- ④ 同姓の加藤左馬之助・左馬助と加藤左衛門尉は、布陣場所が近く、混同された可能性を指摘する。

- ⑤ 伝記などに貞泰名の誤記(黒野左衛門・加藤直泰・加藤左衛門佐直泰・加藤左衛門左・賀藤左衛門尉・加藤左衛門大夫)が一人歩きした。

- ⑥ 加藤左馬介と加藤左エ門の書体が似ており、写しの誤記が犬山城加勢名などで見られる。

- ⑦ 加藤嘉明(十萬石)や竹中重門(六千石)に比べ、貞泰(四萬石)の知名度が低かった。

その他 Ⅱ犬山城で共に加勢し、関ヶ原に参戦した関一政(三萬石)は、A類、B類の布陣図にも記されていない。

### (7) 関ヶ原合戦の考察

貞泰の本戦について伝記物や加藤家家史を表示。

△「徳川十五代史」に「貞泰東軍ノ至ルヲ聞テ、関一政・竹中重門等ト共ニ赤坂ノ營ニ至ル。関ヶ原ニ戦フ。功ニヨリテ二萬石

ヲ増ス、(合六万石)の記述あり。

△「北籐録」には、二番隊諸将の中に加藤貞泰の名があり、「左  
右并御旗本ノ備ハ是ヨリ略ス。戦図別巻ニ記ス。」と記されて  
いる。この表現について、大洲市立博物館の山田広志学芸員  
は、『編纂の段階で、関ヶ原時代の何かの資料を典拠とした  
史料(記事)があつたはずで、編纂にあたって、「その詳細は  
ここでは略す」とした解釈でよいかと思います。編纂物で典  
拠史料を省略する場合は、

①長くなる上に特にこの編纂物に関係しないため省略する。

②典拠史料は、当時一般に知られているもので、見ようと思  
つたらその史料を見られるので省略するなどのパターンが  
考えられるかと思ひます。

「戦図別巻に記す」の戦図とは、「北籐録」に綴じてある布  
陣図のようです。』とコメントを頂いた。

以上の如く、備えの詳しい記録があつたようであるが、残つ  
ていなくて真に惜しいものである。存在すれば関ヶ原合戦の  
布陣の詳細が判る史料であつたかもしれない。

△「北籐録」では、二番隊で黒田や細川と共に加藤貞泰の名。  
その後、細川らと中筋で島津義弘との戦が詳しく記されてい  
る。

△「関ヶ原軍記大成」、「関ヶ原町史」には、三番隊で加藤左衛門  
佐直泰の名がある。直泰は貞泰の次男で、まだ出生していない。  
貞を直とした誤記である。

△「改正三河後風土記」は、井伊の備え諸将の中に加藤左衛門佐

の名がある。「関ヶ原合戦圖志」では、二番隊で加藤貞泰の名。

△「慶長軍記」など多数の伝記物に加藤左衛門尉の名が少ない。  
△貞泰の本戦を布陣図や伝記などからまとめると、最初に烽火場  
附近に布陣後、二番隊又は三番隊で戦い、島津義弘との退き口  
の戦に絡んだと思われる。

△加藤貞泰の弟平内は、徳川への人質の後、江戸から徳川家康ら  
と共に参陣し桃配山に本陣を置く家康の本体の前に布陣した。  
「関原軍記大成」に石田方の首を取ると記述。

△貞泰の家臣系譜に、二名が関ヶ原の記述あり、一人は犬山城加  
勢後に関ヶ原で討死と記述。間違いなく貞泰は関ヶ原で参戦し  
ていたと考えます。

2012年以来、白峰旬氏は、今まで通説であつた関ヶ原合戦  
について、参戦武将ら実戦状況の一次史料を基に、時系列や戦場  
や武将について、通説を覆す新たな研究報告があり。高橋陽介氏  
などからも発表されるようになってきた。

江戸時代の布陣図は、幕府、武将の家史、伝記物を元に描かれ  
てきた。また開戦前の布陣と合戦時には移動の時差もある。それ  
ぞれの真の布陣(原本)はいずれなのか、本書に紹介の布陣図の  
中に、何かヒントがあるかも知れない。

布陣場所や戦闘地については、今後、更なる研究・検証の余地  
が残されていると思ひます。

表1 江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図

2013年発行『別府大学大学院紀要』第15号抜刷  
「関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察」75頁から転載

本書に紹介の  
図No↓

絵 図 名	成立年	整理番号等	絵図の大きさ(cm)	分類	
<b>【刊行本（史料）に収載された布陣図】</b>					
『高山公実録』	嘉永3年 ～安政元年頃			A類	②-1
『武家事紀』	延宝元年			B類	⑤-1
『武家事紀(津軽本)』				その他	⑩
<b>【岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵の布陣図】</b>					
〔関ヶ原合戦之図〕	寛延2年	T12-4	107.8×129.1	A類	
関ヶ原合戦ノ図		T12-19-1	82.4×61.7	B類	
関ヶ原合戦ノ図		T12-19-3	121.5×188.1	A類	
関ヶ原御陣所絵図		T12-23	89.0×65.0	B類	
関ヶ原御陣所之図		T12-26	134.5×109.5	B類	
〔関ヶ原合戦図〕		T12-27	140.8×159.6	A類	
〔関ヶ原合戦図〕		T12-31	81.0×55.0	その他	
関ヶ原戦図		T12-33	110.7×188.5	A類	
関ヶ原御陣場絵図面		T12-36	134.9×112.6	その他	
濃州関ヶ原御合戦図	享保14年	T12-120	112.6×204.2	A類	
<b>【岐阜県図書館所蔵の布陣図】</b>					
濃州御勝山安楽寺御陣廊大概絵図		80-89-1	32.8×41.8	その他	
慶長之役古戦場之図 <sup>(注1)</sup>		80-89-2	25.8×37.3	B類	
慶長之役古戦場之図 <sup>(注2)</sup>		80-89-3	25.9×39.1	B類	⑧
濃州関ヶ原合戦図		G/204.9/セ	113.0×188.0	A類	③
<b>【大垣市立図書館所蔵の布陣図】</b>					
関ヶ原合戦之図 <sup>(注3)</sup>		O-39-2-3	133.0×183.0	A類	
関ヶ原合戦図 東西両軍配陣図並両軍侍大将氏名貼付 <sup>(注4)</sup>		T39-2-28	84.5×82.3	A類	
濃州関ヶ原御陣場東照大神君赤坂御陣営諸將陣取之図 <sup>(注5)</sup>	享保5年	O-39-2-1	163.5×99.0	A類	
『関ヶ原御合戦物語』のさし図 <sup>(注6)</sup>	宝永3年		27.4×20.5	B類	⑦
<b>【名古屋市蓬左文庫所蔵の布陣図】</b>					
関ヶ原戦場図		8-119	182×107	A類	
関ヶ原役布陣之図		36-163	79.5×75.4	B類	⑩
関ヶ原御陣場之図		図-354	198×124.6	A類	
関ヶ原之図		図-355	160.5×136.7	その他	
関ヶ原古戦場図		図-356	207.5×140	A類	
関ヶ原御陣所之絵図		図-987	82×61.5	B類	
関ヶ原戦図		中-618	80.9×56.3	その他	
<b>【西尾市岩瀬文庫所蔵の布陣図】</b>					
関ヶ原戦陣之図		函番号139 番号15	137.1×81.6	その他	
<b>【愛媛県立図書館伊予史談会文庫所蔵の布陣図】</b>					
濃州関ヶ原合戦之図 <sup>(注7)</sup>	宝暦9年	ホ~15~4	39.8×27.1	B類	※⑥

※⑥は、大洲市立博物館所蔵「北藤録」所収の原図

表2 本書に掲載の布陣図紹介

図No.	絵図名	成立年(刊行本) 絵図は不明	記号・番号	絵図大きさ (cm)	分類	加藤貞泰表示 (合戦場)
<b>【刊行本(史料)に記載された布陣図】</b>						
①	参謀本部編纂『日本戦史 関原役』	明治26年(1893)			-	×
②	『高山公実録』関原戦場圖	嘉永3年(1850)～ 安政元年(1856)頃			A類	×
<b>【岐阜県図書館 所蔵の布陣図】</b>						
③	濃州関ヶ原合戦図		204.9/セ-3	188×103	A類	×
<b>【国立公文書館 所蔵の布陣図】</b>						
④	『慶長軍記』所収 関ヶ原戦場之図	寛文3年(1663)		約60×約20	※1	×
⑤	『武家事紀』所収 関ヶ原役圖	延宝元年(1673)		約38×約27	B類	加藤左エ門尉
<b>【愛媛県大洲市立博物館 所蔵の布陣図】</b>						
⑥	『北藤録』所収 濃州関ヶ原合戦之図	宝暦9年(1759)		39.8×27.1	B類	加藤左衛門尉
<b>【大垣市立図書館 所蔵の布陣図】</b>						
⑦	『関ヶ原御合戦物語』所収図	宝永3年(1706)		27.4×20.5	B類	加藤左エ門
<b>【岐阜県図書館 所蔵の布陣図】</b>						
⑧	慶長之役古戦場之図	木版多色刷	80-89-3	39.1×25.9	B類	加藤左衛門尉
⑨	関ヶ原合戦図		204.9/セ-7	71×53	B類	加藤左衛門尉
⑩	関ヶ原御陣図		204.9/セ-6	79×53	B類	加藤左衛門尉
⑪	関ヶ原軍陣立ノ図		204.9/セ-3	91×66	B類	加藤左衛門尉
<b>【垂井町教育委員会 タルイピアセンター 所蔵の布陣図】</b>						
⑫	垂井陣取図			44.8×33.5	B類	加藤左衛門尉
<b>【長野市松代 真田宝物館 所蔵の布陣図】</b>						
⑬	関ヶ原御陣所図		図書47-4	57×40	B類	賀藤左衛門尉
<b>【垂井町岩手 菁峯記念館 所蔵の布陣図】</b>						
⑭	関ヶ原合戦陣の図			77.0×53.5	B類	加藤左衛門尉長素
<b>【関ヶ原町 歴史民俗資料館 所蔵の布陣図】</b>						
⑮	御合戦場			38.5×26.8	B類	加藤左衛門
<b>【岐阜市 座馬秀明 所蔵の布陣図】</b>						
⑯	関ヶ原合戦図			80.7×59	B類	加藤左衛門尉
⑰	慶長之役古戦場之図	木版多色刷・明治15年に追記		37.2×25.7	B類	加藤左エ門尉
<b>【国立公文書館 所蔵の布陣図】</b>						
⑱	関ヶ原御陣図				その他	加藤左馬弁 取消線付
<b>【名古屋市蓬佐文庫 所蔵の布陣図】</b>						
⑲	関ヶ原役布陣之図		36-163	79.5×75.4	B類	加藤左衛門
<b>【刊行本(史料)に記載された布陣図】</b>						
⑳	『武家事紀(津軽本)』	延宝元年(1673)			その他	加藤
<b>【滋賀県米原市柏原 成菩提院 所蔵の布陣図】</b>						
㉑	関ヶ原合戦陣形図			148×70	その他	加藤左衛門尉
<b>【垂井町岩手 明泉寺所蔵『美濃古領侍伝』所収の布陣図】</b>						
㉒	関ヶ原御陣備之図	寛政8年(1796)		折綴じ	A類	×

※1 黒田甲斐守と細川越中守らは井伊直政と並びA類やB類とは違う位置に布陣



## 表3 A類相当のその他布陣図

表1、表2に紹介した江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図の他に、関ヶ原から犬山までの広域エリアを表示したA類相当の布陣図等が刊本などに紹介されている。筆者が確認した布陣図を紹介。

尚、これらには加藤左衛門尉の名は犬山城加勢を除いて記されていない。

所蔵者・絵図名	成立年	掲載書籍ほか	発行者	発行年
<b>【個人蔵(徳川宗家文書)】</b>				
関ヶ原御陣之図	江戸時代前記	特別展 葵の時代	岐阜市歴史博物館	2016
<b>【瑞穂市 故玩館】</b>				
関ヶ原合戦図	江戸時代	関ヶ原 平成29年度春季企画展	岐阜県博物館	2017
<b>【岐阜県図書館】</b>				
美濃国関ヶ原合戦地形図	江戸末期	デジタル画像	岐阜県図書館	
濃州関ヶ原合戦之図	江戸末期	デジタル画像	岐阜県図書館	
関ヶ原戦図	江戸時代	デジタル画像	岐阜県図書館	
<b>【岐阜県歴史資料館】</b>				
関ヶ原御陣場図	天明7年(1787)	美濃飛驒の古地図		1979
<b>【タリイピアセンター・歴史民俗資料館】</b>				
関ヶ原御陣場図	江戸時代	第18回企画展 関ヶ原合戦展	タリイピアセンター	1999
関ヶ原役陣備之図	江戸時代	第18回企画展 関ヶ原合戦展	タリイピアセンター	1999
関ヶ原合戦陣取図	江戸時代	第18回企画展 関ヶ原合戦展	タリイピアセンター	1999
関ヶ原合戦全図	江戸時代	第49回企画展 戦国時代のたるい	タリイピアセンター	2014
関ヶ原合戦陣取図	江戸時代	第50回企画展 戦国時代のたるい	タリイピアセンター	2014
濃州関ヶ原合戦図	江戸時代	第54回企画展 南宮山攻防戦	タリイピアセンター	2116
<b>【ミュージアム中山道】</b>				
関ヶ原合戦陣取図	江戸時代	第18回企画展 関ヶ原合戦展	タリイピアセンター	1999
<b>【大垣市立図書館蔵】</b>				
関ヶ原軍記全抄本(さし図)	延享2年(1745)			

表4 『高山公実録』、『武家事紀』、『日本戦史 關原役』収載の  
布陣図に記載された家康方武将名の比較

2013年発行『別府大学大学院紀要』第15号抜刷  
「関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察」73頁から転載

布陣図に記載された部 将名	『高山公実録』収載の布陣 図(A類)	『武家事紀』収載の布陣図 (B類)	『日本戦史 關原役』収載 の布陣図(参謀本部図)
福島正則	○①最▲	○最	○最
田中吉政	○①最	○	○最
藤堂高虎	○①最▲	○最	○最
京極高知	○①最▲	○最	○最
蜂須賀至鎮	×	○最 <sup>(注1)</sup>	×
有馬豊氏	○①最▲	○野	×
山内一豊	○①最▲	○野	○南
黒田長政	○②最▲	○最	○最
竹中重門	○②最	○最	×
加藤貞泰	×	○最	×
加藤嘉明	○②最▲	○	○最
金森長近	○②最▲	○	○
細川忠興	○②最▲	○	○最
織田長益 (織田有楽)	○②最	○野	○
古田重勝	×	×	○
松倉重政	○②最	×	×
寺沢広高	×	○野	○
生駒一正	×	○野	○
松平忠吉	○③	○最	○最
井伊直政	○③	○最	○最
本多忠勝	○③	○最	○
徳川家康	○	○	○
池田輝政	×	○南	○南
池田長吉	×	○南	×
浅野幸長	×	○南	○南
有馬則頼	×	×	○南
徳永寿昌	×	○金	×
市橋長勝	×	○金	×
横井時泰	×	○金	×
西尾光教	×	○大	×
津軽為信	×	○大 <sup>(注2)</sup>	×
水野勝成	○大	○大	×
水野宗十郎	○大	×	×
松平康長 (戸田康長)	○大	○大	×
一柳直盛	×	○ <sup>(注3)</sup>	×
中村一栄	×	×	×
堀尾忠氏	×	○留	×
筒井定次	×	○留	○最

## 表5 家康方軍勢の布陣の構成

2013年発行『別府大学大学院紀要』第15号抜刷  
「関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察」78、79頁から部分転載

## ▼『庵主物語』（延宝2年）

一番備	福島正則・福島正之・藤堂高虎・田中吉政・有馬豊氏・京極高政（高知カ）・山内一豊・伊丹兵庫助・村越兵庫助・河村助左衛門・奥平貞治
二番備	黒田長政・竹中重門・金森長近・加藤嘉明・細川忠興・織田有楽（長益）・板倉（松倉カ）重政・小坂雄善・尾子（安孫子カ）善十郎・稲富（稲熊カ）市左衛門・兼松正吉
三番備	松平忠吉・井伊直政・本多忠勝・織田長孝・佐久間安政・佐久間勝之・船越景直

## ▼『黒田家譜』（元禄元年）

右軍	黒田長政・竹中重門・田中吉政・細川忠興・加藤嘉明・生駒一正等 <sup>(注1)</sup> が北の山手に備えた
左軍	福島正則・藤堂高虎・織田有楽父子 <sup>(注2)</sup>
中軍	松平忠吉・井伊直政・本多康俊（忠勝カ） <sup>(注3)</sup>
南宮山の押え	池田輝政・浅野幸長・駿河（中村一栄カ）・遠江衆（山内一豊・有馬豊氏・松下重綱カ）
大垣城の押え	水野勝成・津軽為信・西尾光教・松平康長等
赤坂陣所の留守	堀尾忠氏

（注1）先手である福島正則・藤堂高虎等は街道の左右を西向きに進撃。

（注2）田中吉政・細川忠興等は街道の右を西向きに進撃。

（注3）松平忠吉・井伊直政・本多忠勝は、その中筋を進撃。

## ▼『石田軍記』（元禄11年）

一番の備え	福島正則・京極高知・藤堂高虎・有馬豊氏・山内一豊・田中吉政
二番（の備え）	黒田長政・竹中重門・加藤嘉明・金森長近・細川忠興・織田有楽（長益）・松倉重政
三番（の備え）	松平忠吉・井伊直政・本多忠勝
御後備え	大須賀忠政・本多成重
南宮山の押え	池田輝政・浅野幸長
大垣城の押え	西尾光教・松平康長・津軽為信・水野勝成・榊原康政 <sup>(注1)</sup>
赤坂陣所の留守	堀尾忠氏
多芸口	徳永寿昌・市橋長勝・横井時泰・横井孫右衛門・横井作左衛門が金屋河原に在陣

（注1）榊原康政は実際には徳川秀忠軍に従軍して中山道を進撃。

## ▼『関原軍記大成』（正徳3年）

一番	福島正則父子・藤堂高虎父子・田中吉政父子・生駒正俊（一正カ）・戸川政利（達安カ）・坂崎貞盛（宇喜多詮家）・桑山貞晴（元晴カ）・舎弟桑山一貞（貞晴カ）・大野治長
二番	細川忠興父子・黒田長政・加藤嘉明・織田有楽父子・竹中重門・筒井定次・松倉重正（重政カ）
三番	松平忠吉・井伊直政・本多忠勝・関一政・加藤直泰（貞泰カ）
遊軍	蜂須賀至鎮・稲葉貞道（貞通カ）父子・遠藤慶隆・小出吉辰（秀家カ）・亀井政直（茲矩カ）・寺沢広高等
南宮山・栗原山の押え	池田輝政父子・浅野幸長・山内一豊・有馬則頼父子・金森長近父子・中村一栄・一柳直盛・水野清忠（守信カ）・鈴木重慶（重時カ）（垂井山の東の方に在陣）
大垣城の押え	西尾忠政（光教カ）・水野勝成・津軽為信・松平康長等（曾根の近辺に在陣）
赤坂陣所の留守	堀尾忠氏
多芸の押え	徳永寿昌父子・市橋長勝・横井時泰・横井孫右衛門・横井佐（作カ）左衛門等（金谷河原に在陣）



表6 軍記物や編纂史料等における加藤貞泰の記述有無

史料名	史料の成立年		加藤貞泰			
			犬山城 加勢	大垣城 押さえ 本田	関ヶ原	
					丸山 布陣& 竹中と 陣一所	本戦
『内府公軍記』（徳川家本）	慶長5年～	1600	○	×	×	×
『三河物語』	元和8年	1622	×	×	×	×
『当代記』	元和9年頃	1623頃	×	×	×	×
『慶長記』	慶安元年	1648	×	×	×	×
『関原始末記』	明暦2年	1656	×	×	×	×
『慶長軍記』	寛文3年	1663	○	×	×	×
『過現二世帳』明泉寺蔵	寛文4年頃	1664頃	○	×	○	×
『武家事紀』	延宝元年	1673	○	×	×	×
『黒田家譜』	元禄元年	1688	×	×	×	×
『関原軍記大成』	元禄3年	1690	○	×	×	○
『石田軍記』	元禄11年	1698	○	×	×	×
『関ヶ原御合戦物語』	宝永3年	1706	×	×	○	○
『関ヶ原大條志』	享保20年	1735	○	×	×	×
『大洲秘録』加藤家家史	元文5年	1740	○	○	×	×
『武徳編年集成』	元文5年	1740	×	×	×	×
『北藤録』加藤家家史	宝暦9年	1759	○	○	×	○
『公室年譜略』	安永3年	1774	×	×	×	×
『綿考輯録』「細川実記」	安永7年	1778	×	×	○	○
『加藤光泰貞泰軍功記』	安永8年	1779	○	○	×	×
『三埜古領侍傳』明泉寺蔵	寛政8年	1796	○	×	○	×
『改正三河後風土記』	天保4年	1833	○	×	×	○
『徳川実記』「国史大系」	天保14年	1843	○	○	×	○
『高山公実録』	嘉永年間	1848～	×	×	×	×
『徳川十五代史』	明治25年	1892	○	×	×	○
『関ヶ原合戦図志』	明治25年	1892	○	×	○	○
『不破郡史』	大正15年	1926	○	×	×	×
『関ヶ原合戦資料集』藤井治左衛門	昭和54年	1979	○	×	○	○
『関ヶ原町史』	平成2年	1990	○	×	×	○
『関原御合戦当日記』	不明		×	×	○	×
『谷川七左衛門覚書』	不明		○	×	×	×

○：記載がある（記載内容が不十分な内容含む・「関ヶ原役」のみの記述含む）  
 ×：記載がない

- ・犬山城加勢は、加藤家文書に1次文書の写しが残し、殆どの軍記物に記述。
- ・大垣城押さへの布陣については、加藤家家史以外には殆ど記載ない。
- ・犬山～関ヶ原への行程に黒野左衛門と誤記名あり。
- ・丸山烽火場の記述は少ない。
- ・本戦では加藤左衛門佐、加藤左衛門佐直泰と誤記がある。

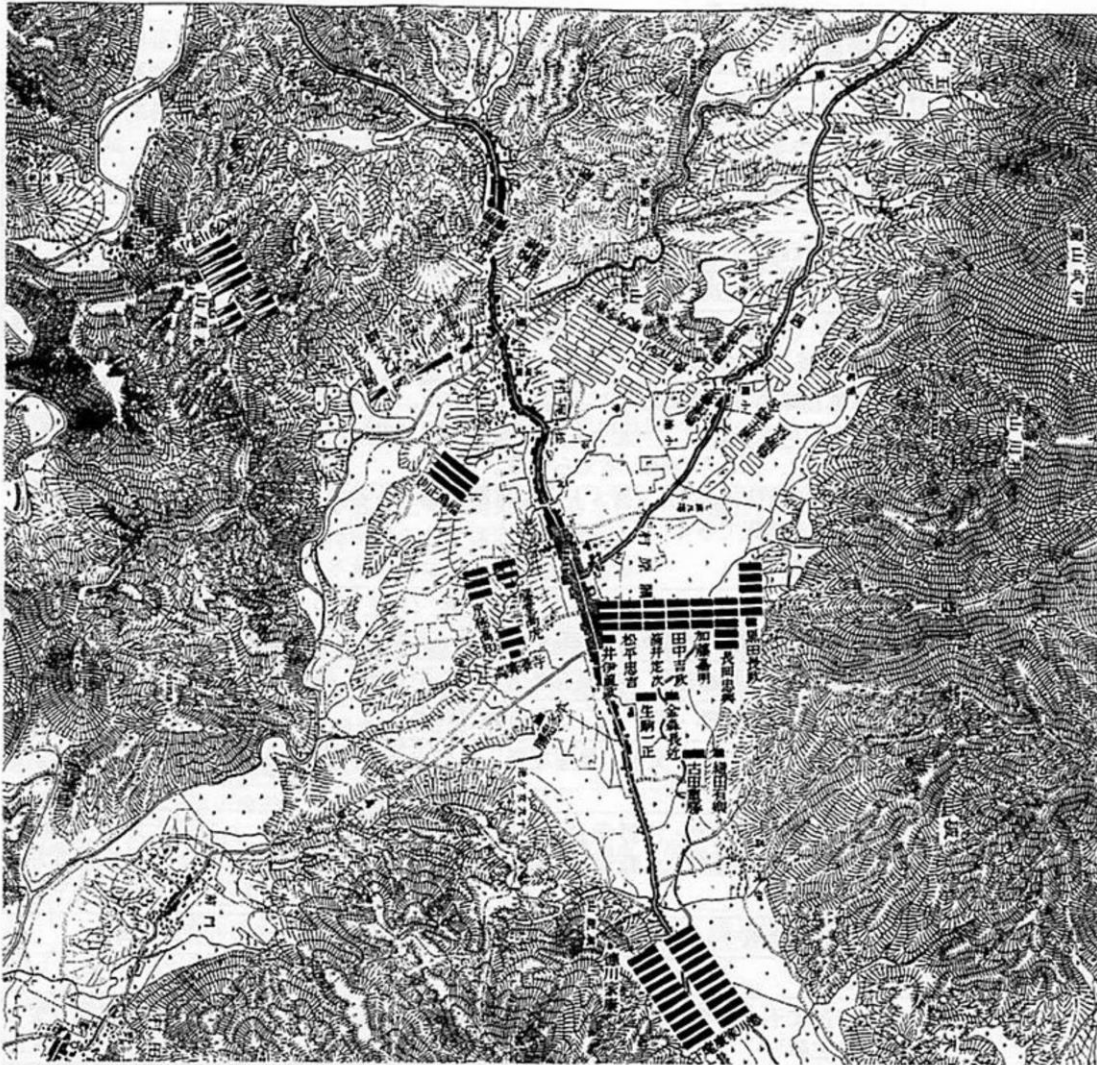
布陣図紹介 以下は「表2 本書に掲載の布陣図紹介」の順に表示

## 現在関ヶ原布陣図の主流は 明治時代・参謀本部編纂「日本戦史」布陣図

書籍などに示されて現在非常に著名になっている図の元は「日本戦史関原役」に  
収載されている「関原本戦之圖」をほぼ踏襲したものという。

この図には加藤貞泰や竹中重門の名はない。

2013年発行『別府大学大学院紀要』第15号 抜刷  
関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察 80頁より引用



図① 参謀本部編纂『日本戦史 関原役（附表・附図）』に収載されている「関原本戦之圖」

「関原本戦之圖」部分（両軍が布陣した前線付近）

※参謀本部編纂『日本戦史 関原役（附表・附図）』（初版は明治26年〔1893〕刊行）に収載されている「関原本戦之圖」が、『歴史群像』2011年2月号（学研パブリッシング発行、2011年）の付録として復刻されているので、そこから引用した。なお、「関原本戦之圖」は大きいので、両軍が布陣した前線付近と南宮山付近を、それぞれ部分的に示すこととする。

## 江戸時代に流布したA類の布陣図

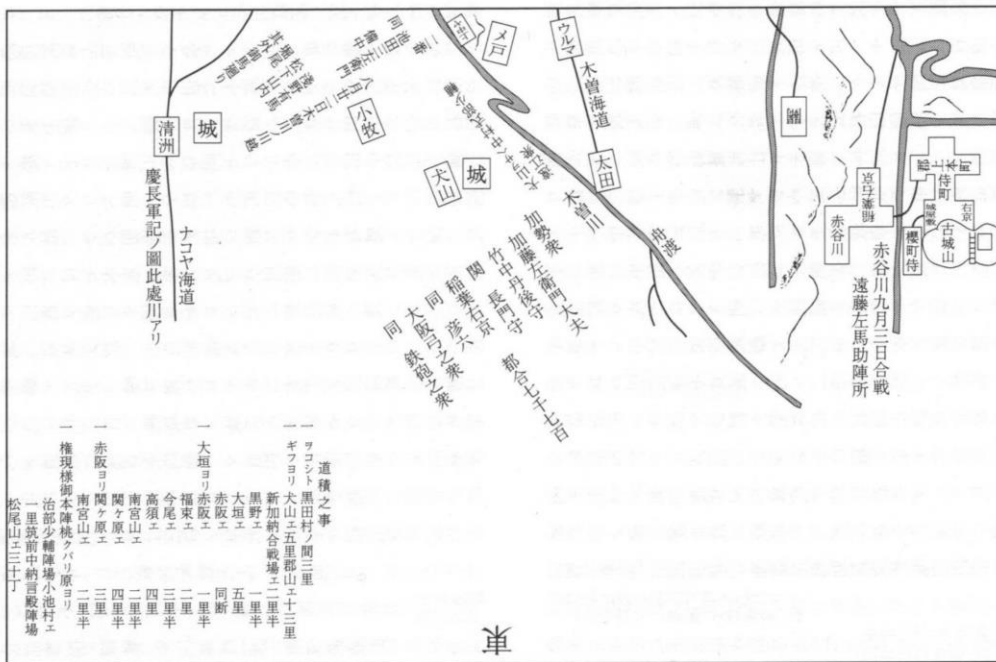
(A類の布陣図では相川[会川]付近に加藤貞泰の名はない)

2013年発行『別府大学大学院要項』第15号抜刷  
関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察82頁の右側図より引用



図②-1 「関原戦場圖」部分 (両軍が布陣した前線付近) 『高山公実録』収載

上野市古文献刊行会編『高山公実録』(藤堂高虎公伝)上巻(清文堂出版, 1998年、220頁)より引用



図②-2 「関原戦場畧圖」部分 (犬山城付近) 『高山公実録』収載

上野市古文献刊行会編『高山公実録』(藤堂高虎公伝)上巻(清文堂出版, 1998年、169頁)より引用



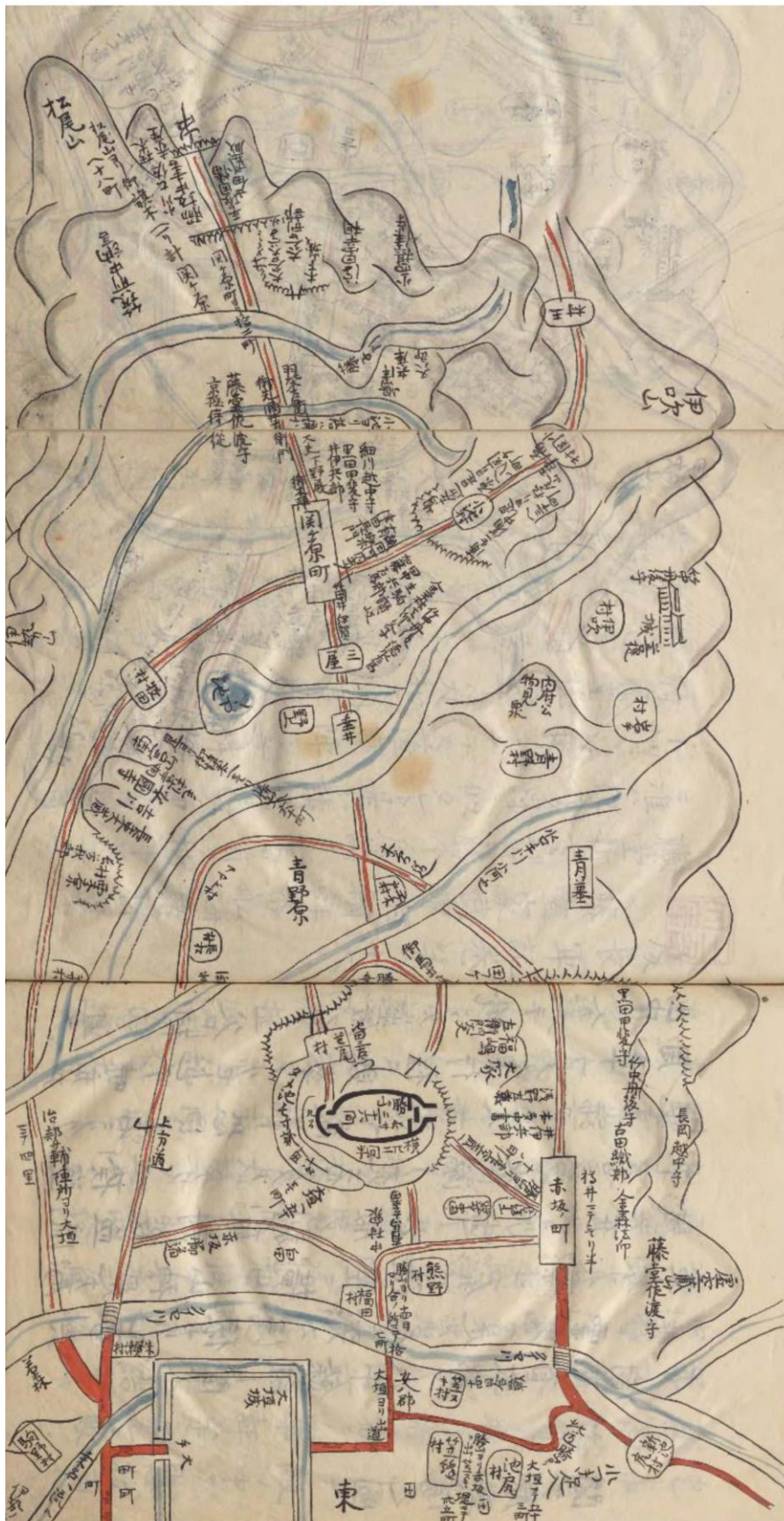


図③

「濃州関ヶ原合戦図」  
岐阜県図書館所蔵

大きさ188×103(cm)  
請求記号 204.9/セ-3





図④ 「関ヶ原戦場之図」 大きさ約52.5×約26.5 (cm)  
「慶長軍記」所収を繋ぐ 寛文3年 (1663)  
国立公文書館 所蔵  
デジタルアーカイブ「慶長軍記」 No.12-4より



## 江戸時代に流布したB類などの布陣図



図⑤-1

「関ヶ原役圖」 大きさ約38×約27 (cm)  
「武家事紀」 卷第二八続集 戦畧地圖 所収  
延宝元年 (1673)  
国立公文書館 所蔵 デジタルアーカイブNo.15より

素行会蔵版 1982年 原書房発行 (復刻原本大正4年刊) の「武家事紀 中巻」第28続集417頁に「関ヶ原役圖」名でモノクロ掲載あり (写し)





図⑤-3



図⑤-4

- ・本図の形態は前頁の図⑤-1に続き、西は琵琶湖～東は犬山までの広域表示で、地域毎に描かれて綴じられている。  
図の番号、配置は地形順に分類した。
- ・犬山城加勢衆に大坂弓鉄砲衆の記載がない。

「関ヶ原役圖」 大きさ約27×約19 (cm)  
 「武家事紀」 卷第28続集 戦畧 地圖所収  
 延宝元年 (1673)  
 国立公文書館 所蔵  
 デジタルアーカイブ「武家事紀」 No.15より



図⑤-2

加藤左エ門尉居城  
 黒野城



図⑤-5

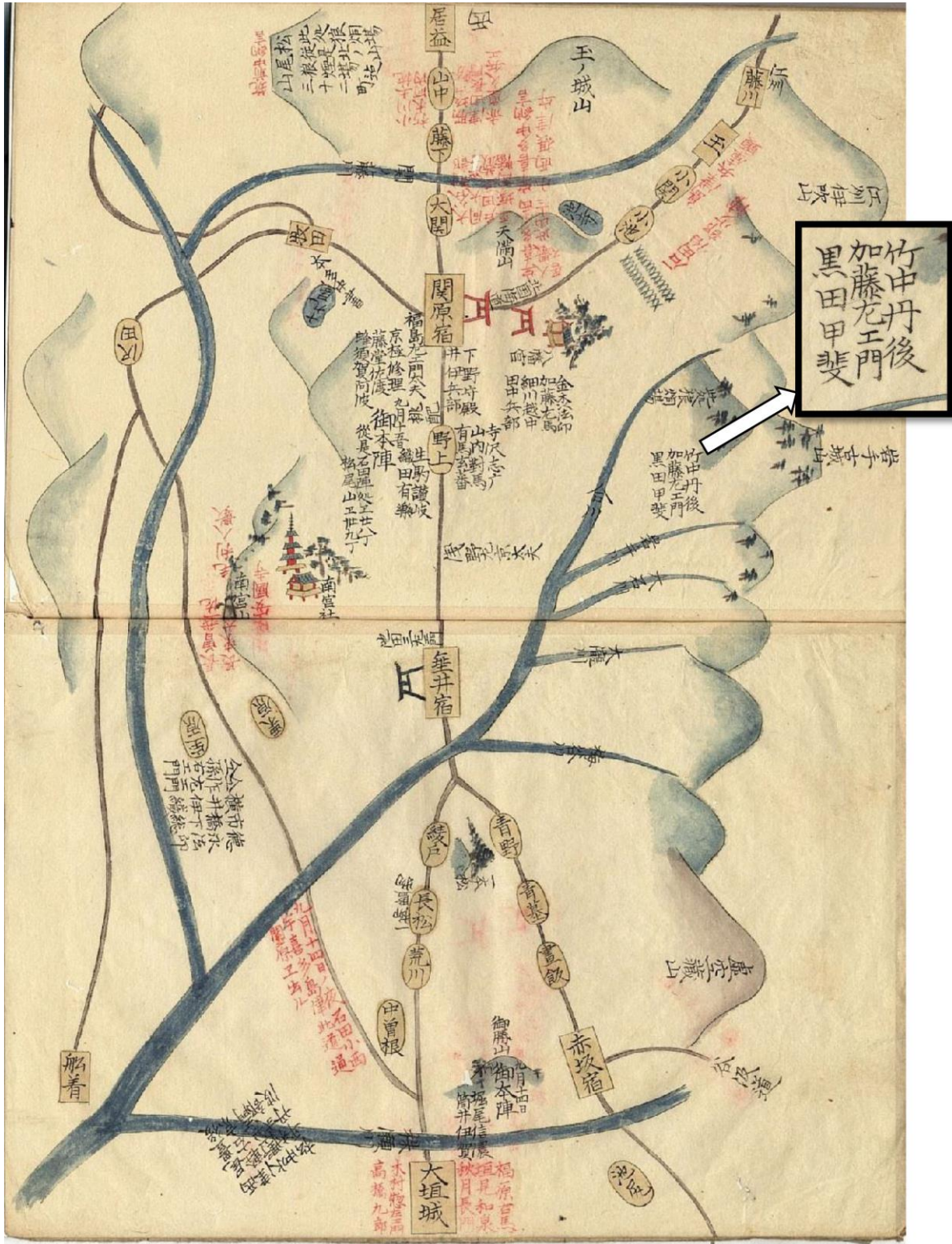




図⑥

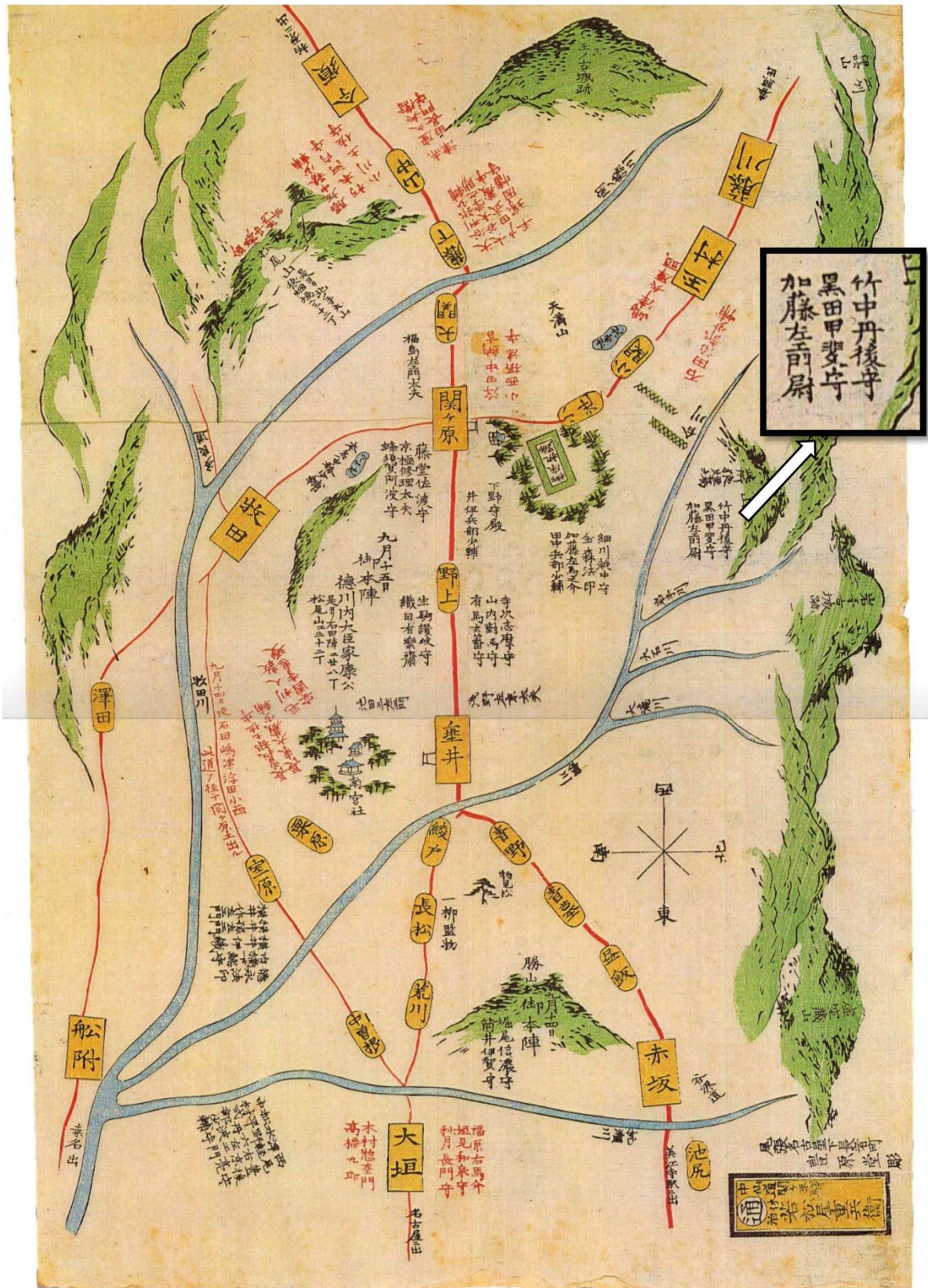
「濃州関ヶ原合戦之図」 大きさ39.8×27.1 (cm)  
 愛媛県 大洲市立博物館 所蔵 加藤氏文書「北藤録」卷十三所収  
 宝暦9年 (1759)





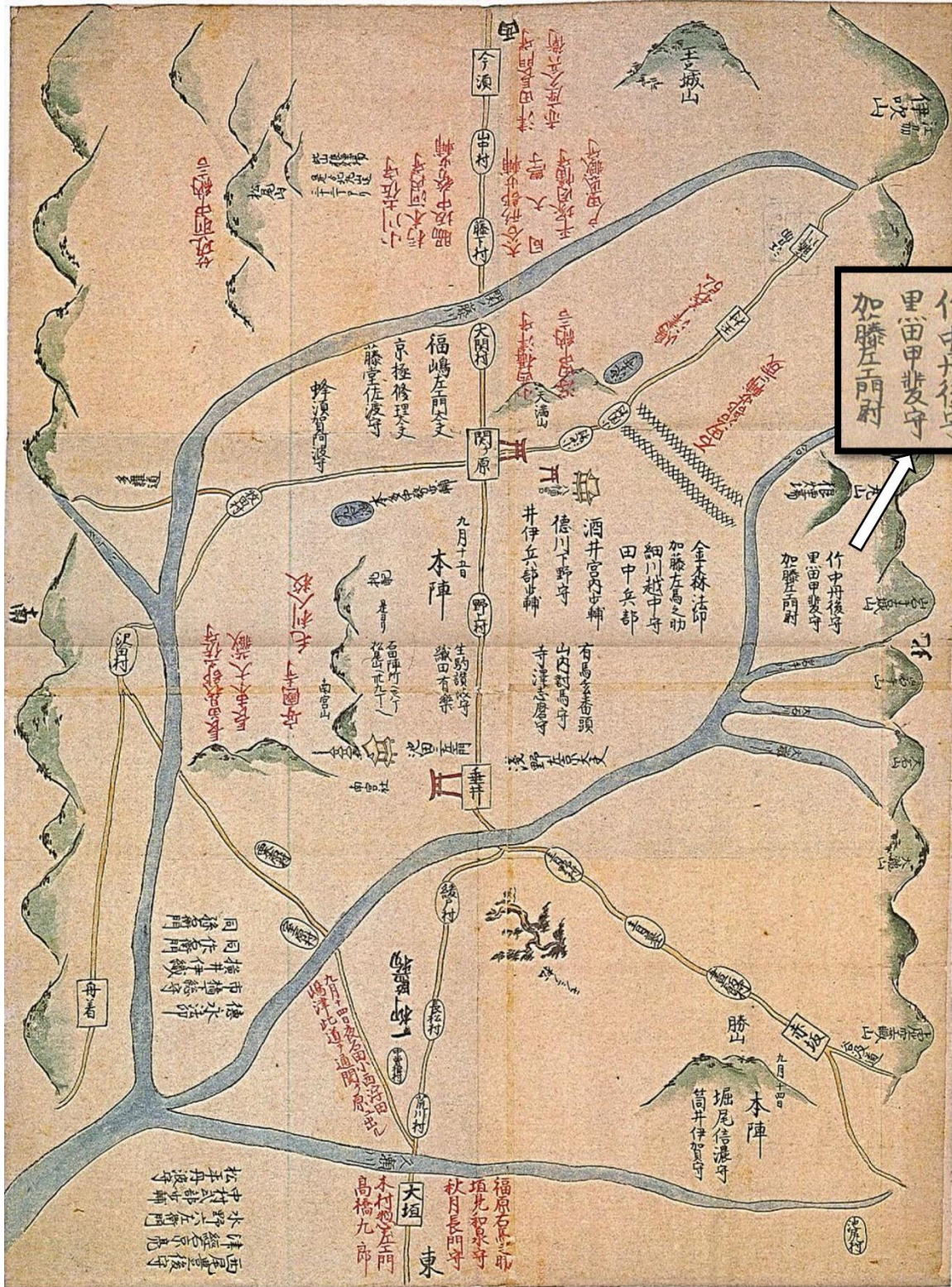
図⑦ 「関原御合戦物語 (部分・さし図)」 大きさ27.4×20.5 (cm)  
 嘉永3年 (1850) 写 大垣市立図書館 所蔵  
 原書は宝永3年 (1706) 竹中重榮編纂





⑧ 「慶長之役古戦場之図」 木版多色刷 年代不明 大きさ39.1×25.9(cm)  
 岐阜県図書館 所蔵 請求記号 80-89-3





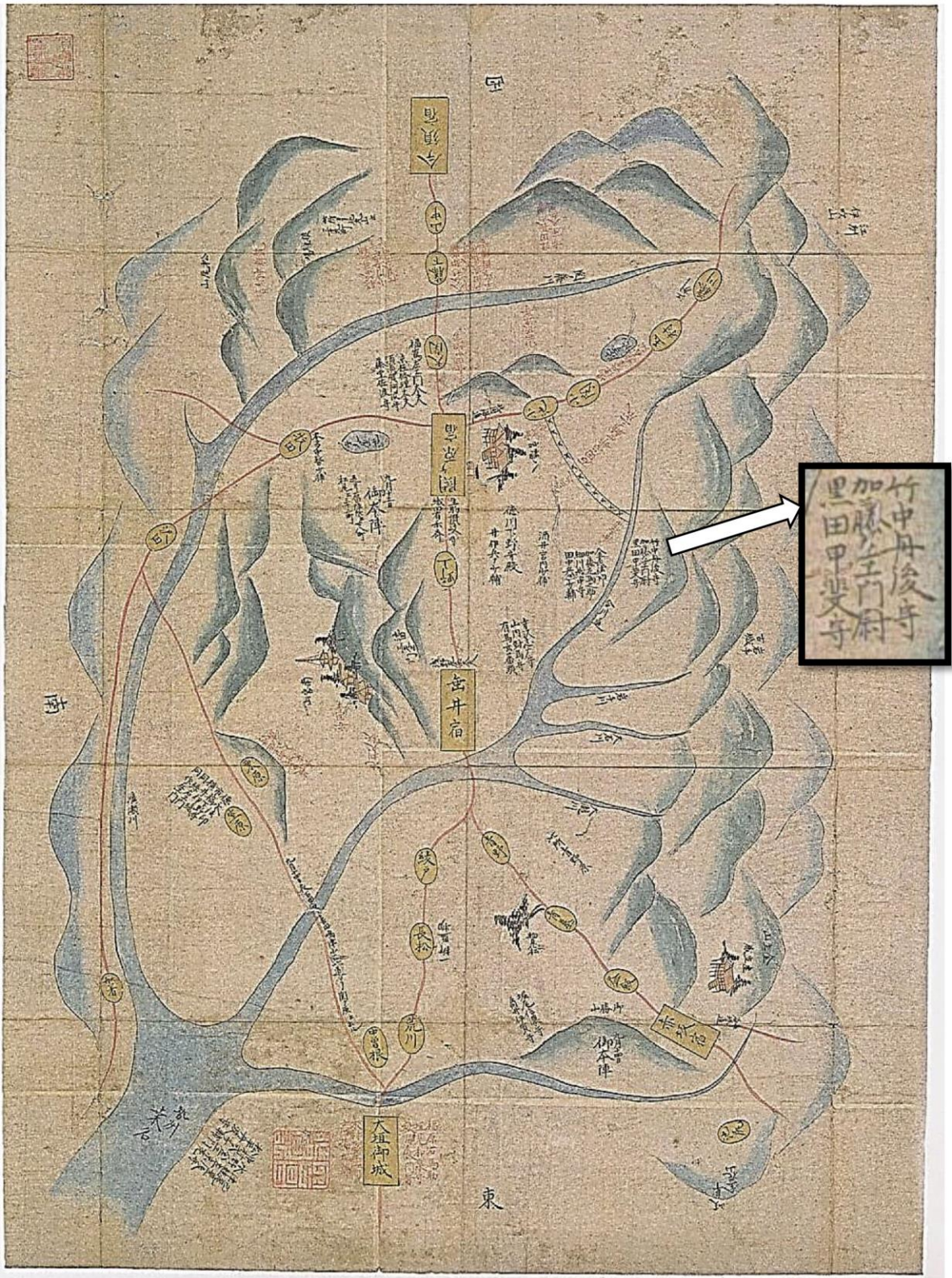
図⑨

「関ヶ原合戦図」 年代不明 大きさ71×53(cm)  
岐阜県図書館 所蔵 請求記号 204.9/セ-7









図⑪

「関ヶ原軍陣立ノ図」  
岐阜県図書館 所蔵

年代不明 大きさ 91×66(cm)  
請求記号 204.9/セ-3

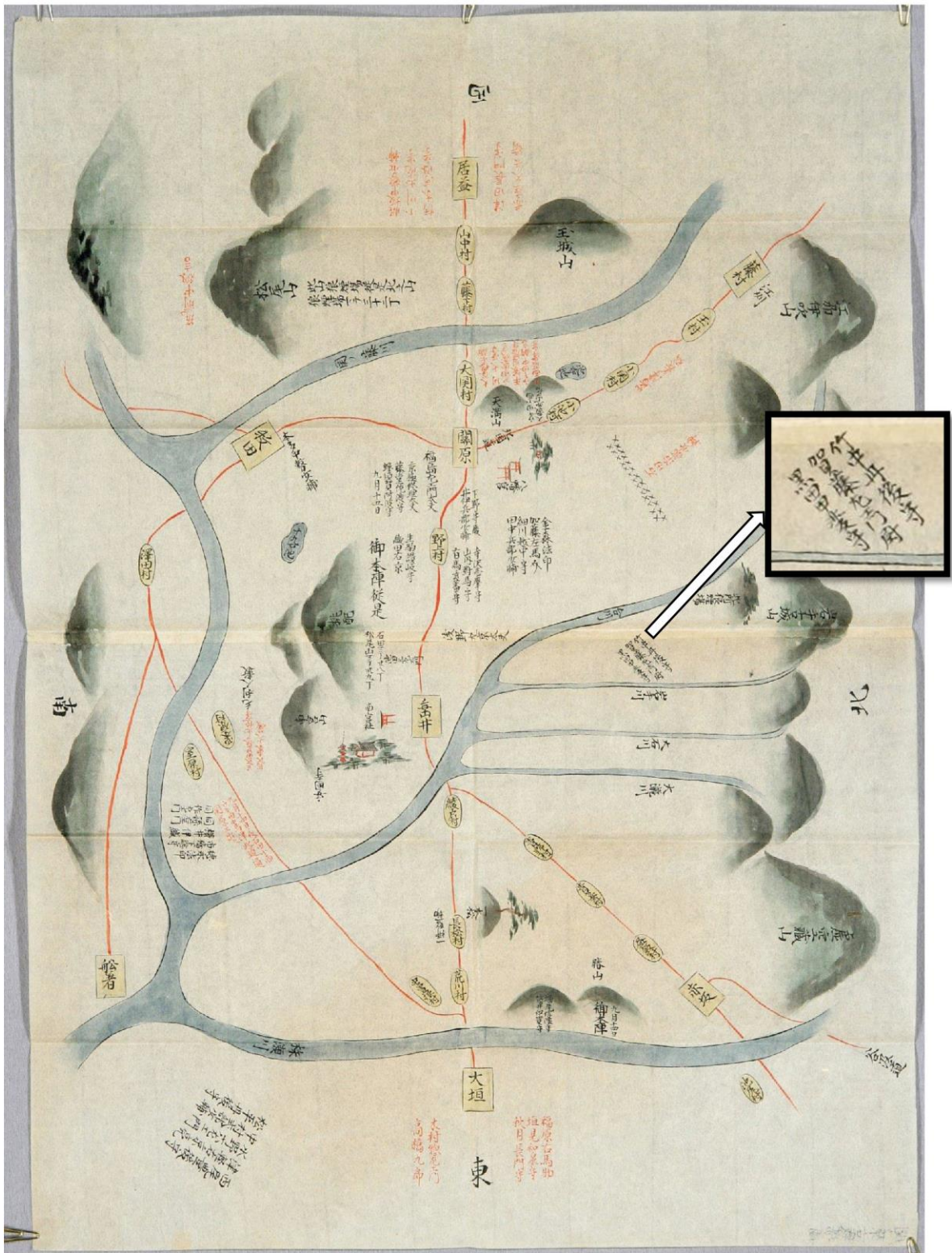




図⑫

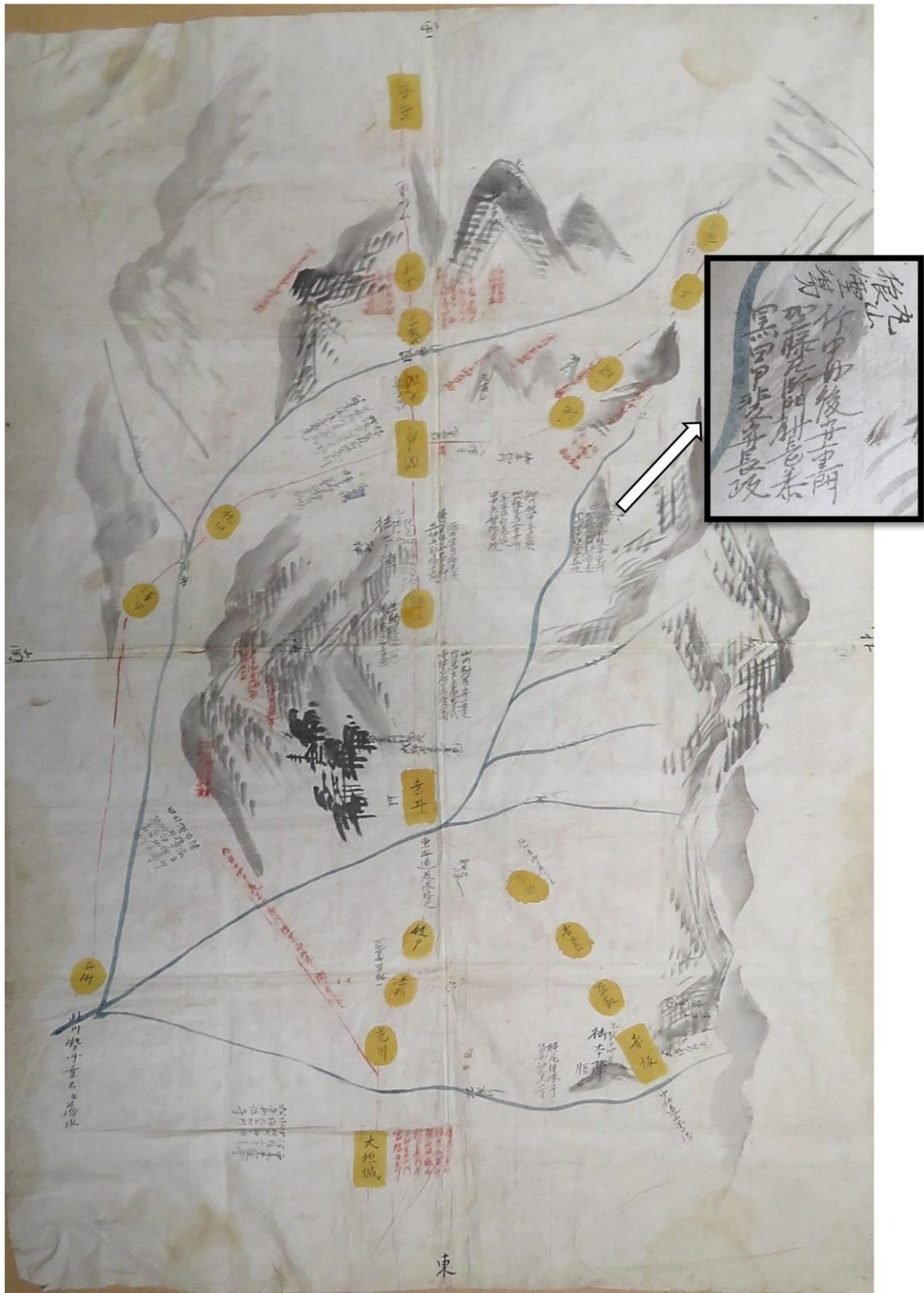
「垂井陣取図」 年代不明 大きさ 44.8×33.5(cm)  
垂井町教育委員会 タルイピアセンター所蔵





図⑬ 「関ヶ原御陣所図」(図書47-4) 年代不明 大きさ 57×40(cm)  
長野市松代 真田宝物館 所蔵





図⑭

「関ヶ原合戦陣の図」 年代不明 大きさ 77.0×53.5(cm)  
垂井町岩手 菁菫記念館 所蔵



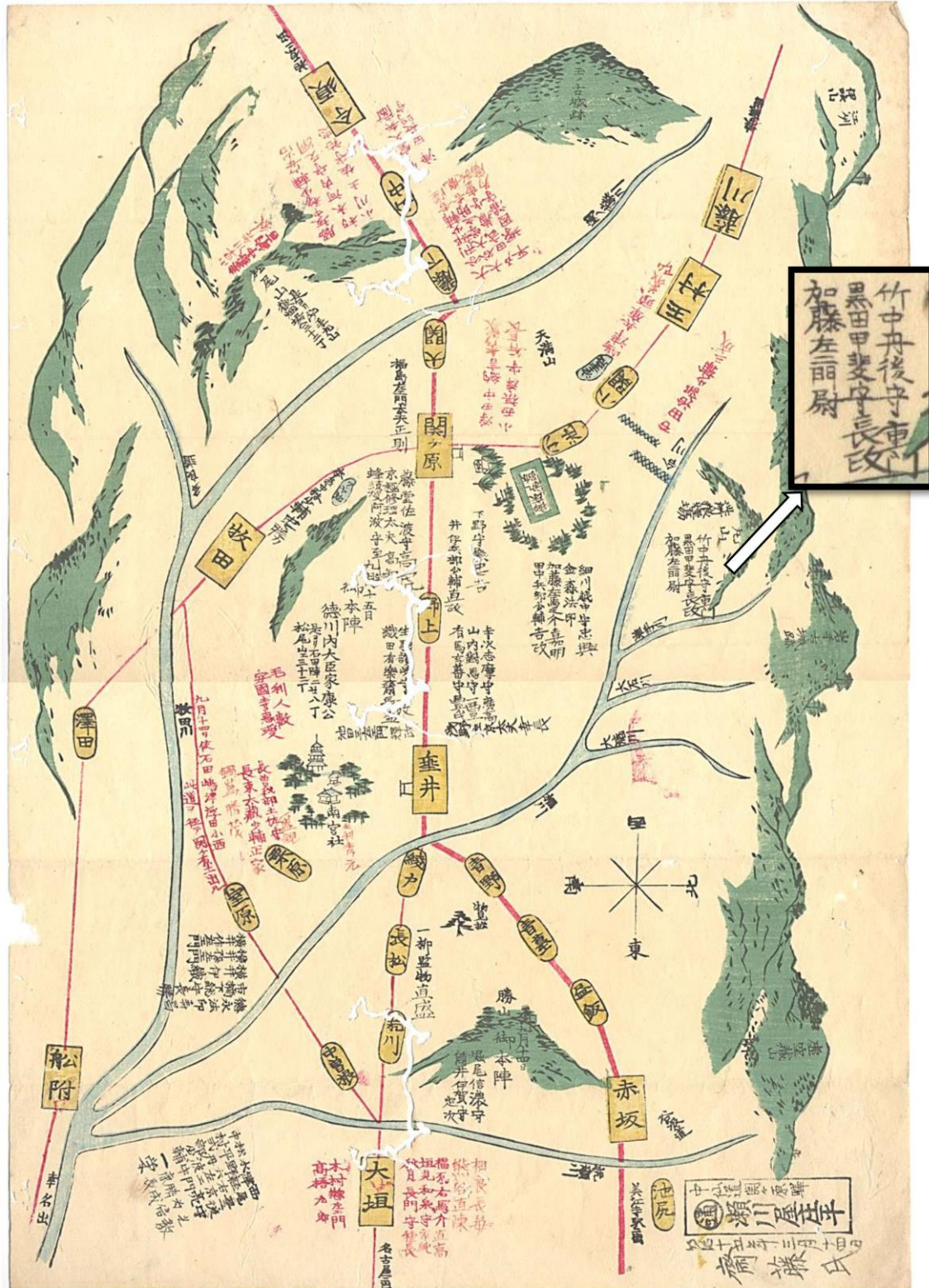
図⑮

「御合戦場」 年代不明 大きさ 38.5×26.8(cm)  
関ヶ原町 歴史民俗資料館 所蔵



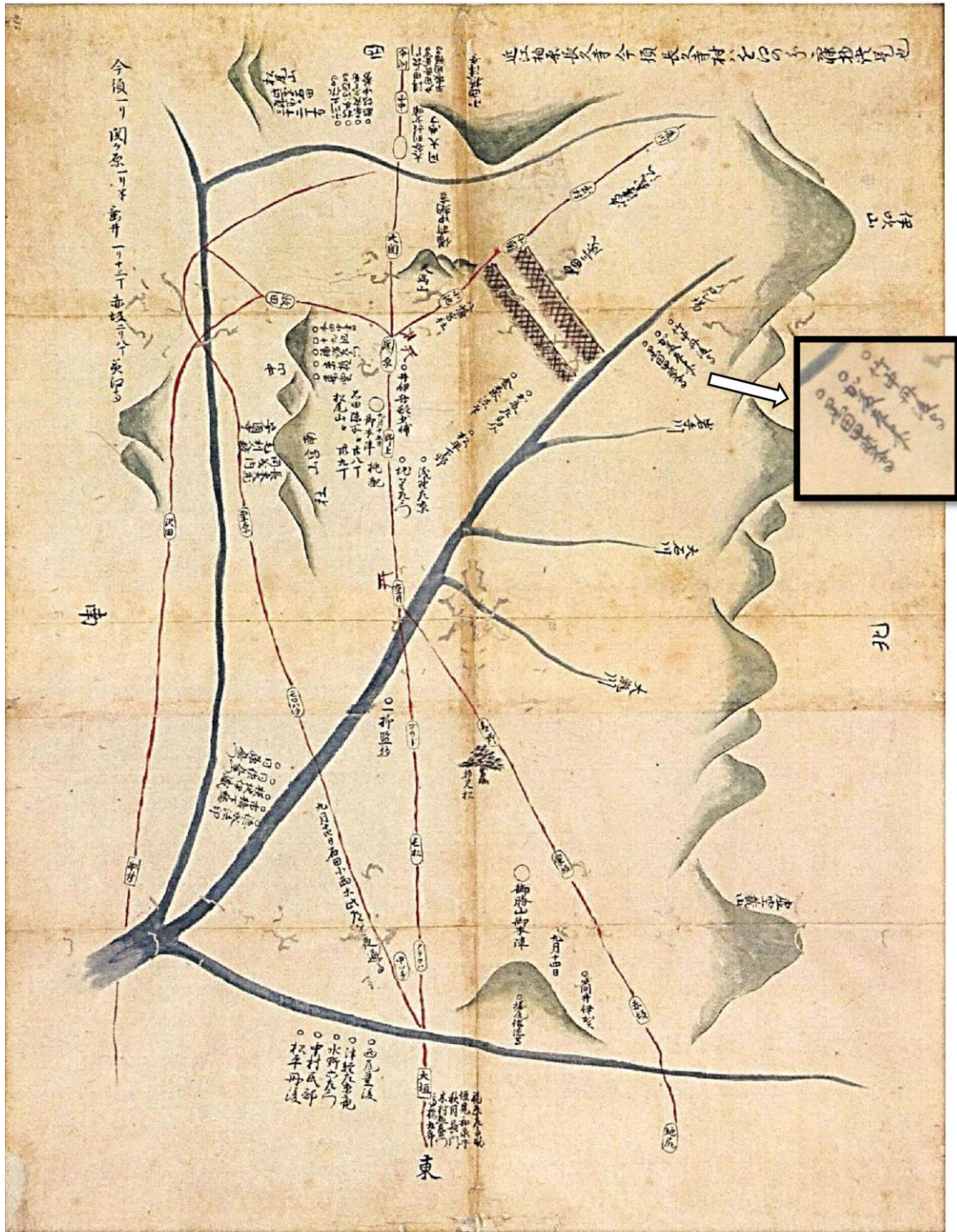






図①⑦ 「慶長之役古戰場之図」 木版多色刷 年代不明 大きき37.2×25.7 (cm)  
 発行 中山道関ヶ原驛 瀬川屋庄平  
 (明治15年3月14日に斉藤氏が武将名の追記あり)  
 岐阜市 座馬秀明 所蔵





図⑱

「関ヶ原御陣図」 年代不明

国立公文書館 所蔵

「史跡関ヶ原古戦場保存管理計画策定報告書」図32より転載

発行 平成22年(2010)3月 関ヶ原町教育委員会



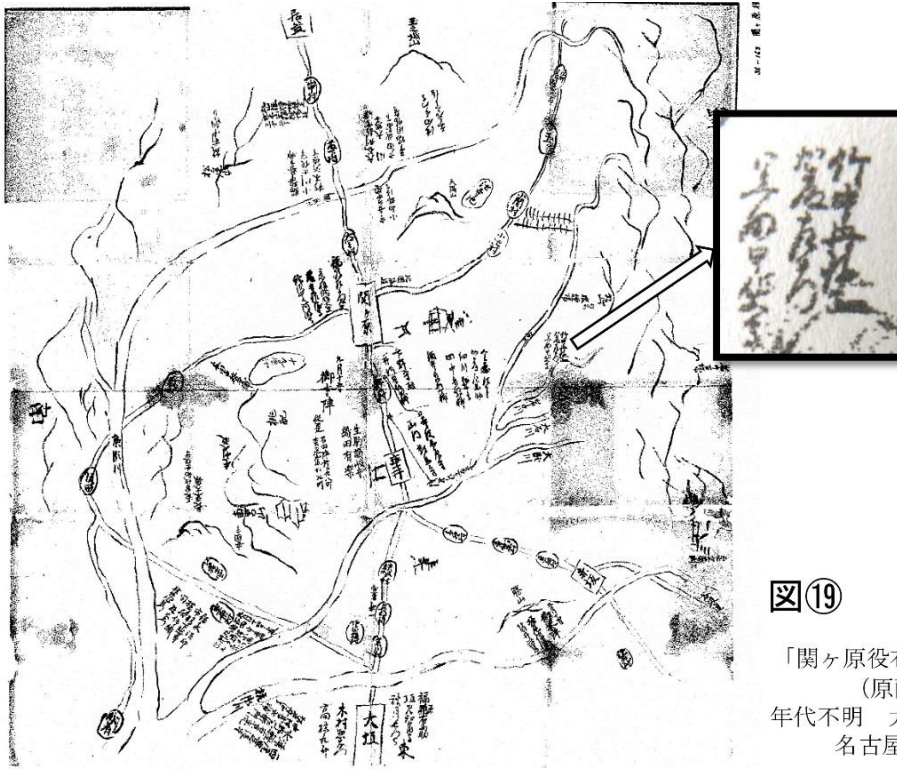


図19

「関ヶ原役布陣之図」番号36-163  
 (原画は色彩付)  
 年代不明 大きさ79.5×75.4(cm)  
 名古屋市 蓬佐文庫 所蔵

(本軽津) 圖 役 原 箇 関

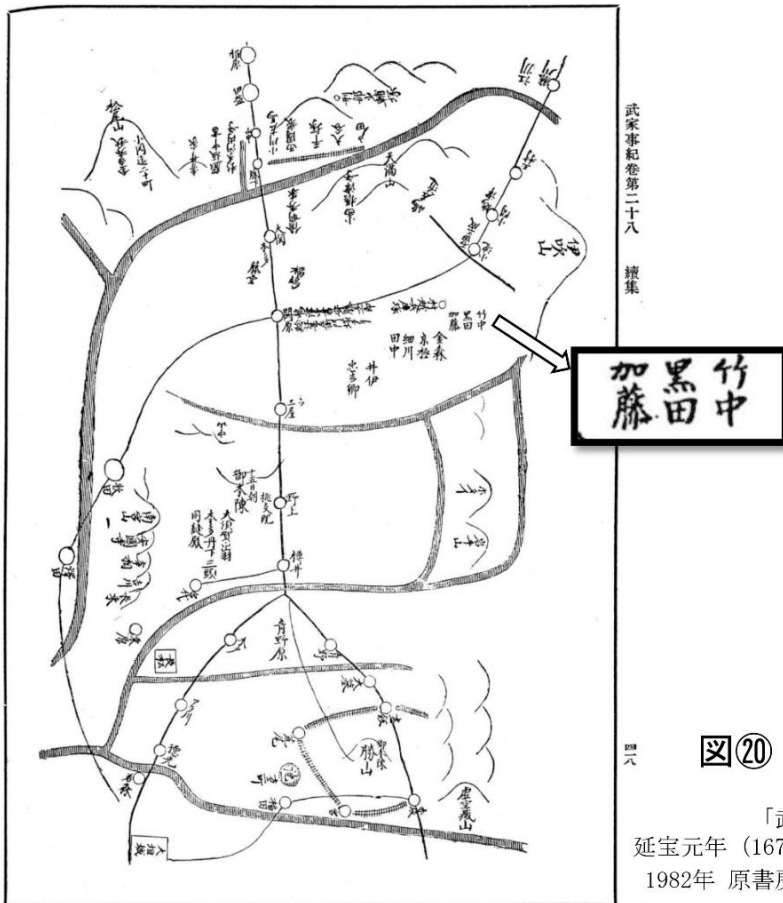
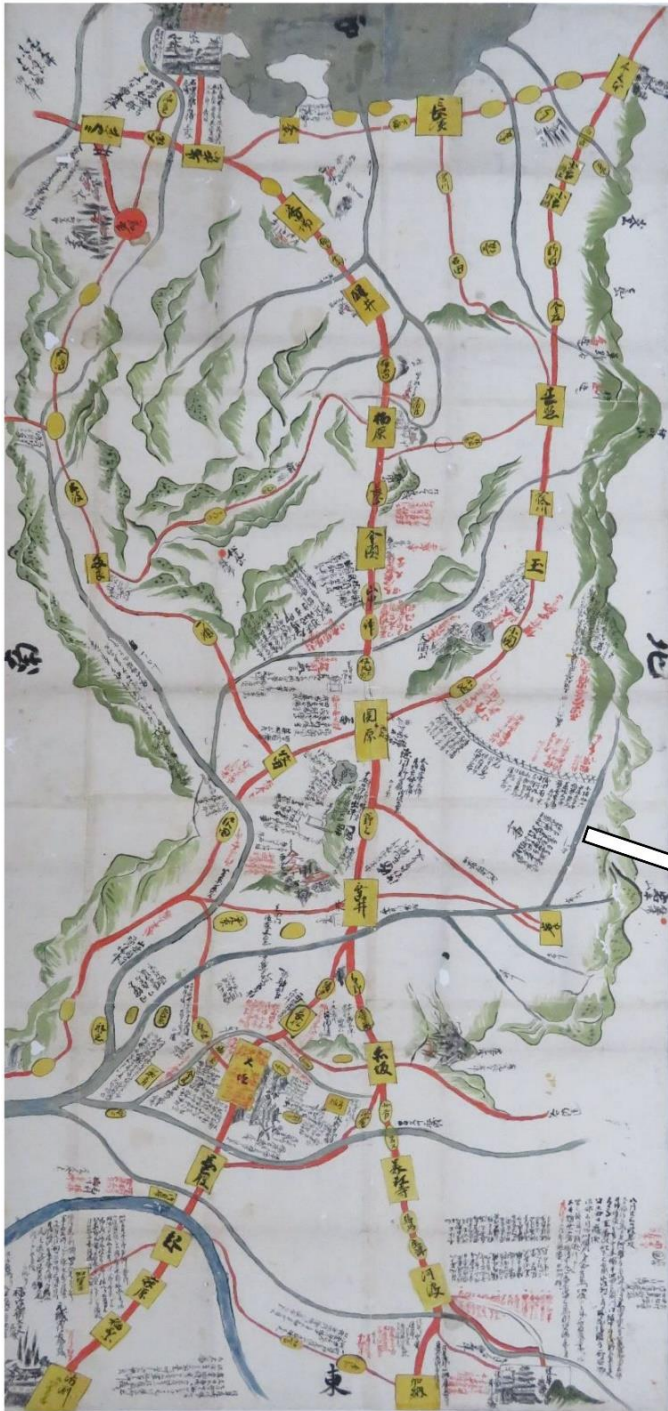


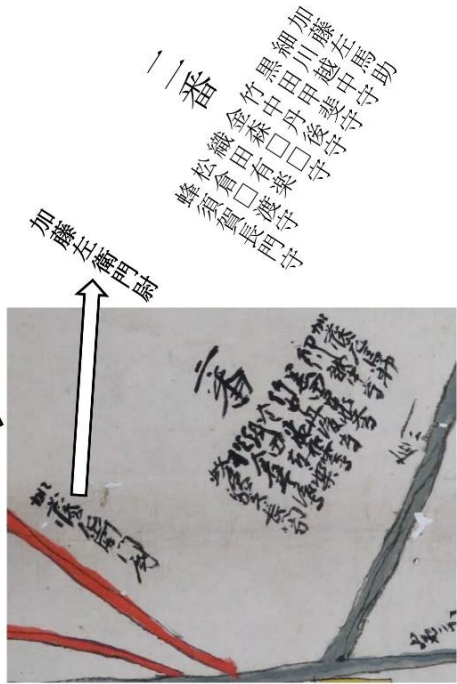
図20

「関箇原役圖(津軽本)」  
 「武家事紀 中巻」第28続集 418頁  
 延宝元年 (1673) 素行子山鹿高興著 素行会蔵版  
 1982年 原書房発行 (復刻原本大正4年刊) より



**成菩提院(じょうぼだいん)**

寺歴は古く天台宗の古刹。  
 東山道・中山道沿いの寺で、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康が街道を往来する折に宿所にしていた。  
 関ヶ原合戦前、小早川秀秋も宿泊したとされる。  
 徳川家康の参謀といわれた天海大僧正が住職を務めた時期もある。



図⑳ 「関ヶ原合戦陣形図」江戸時代中頃 148×70 (cm)  
 滋賀県米原市柏原 成菩提院 所蔵



加藤貞泰  
 関長門守  
 其他兩人

石川備前  
 犬山城

加藤左衛門  
 竹中丹後守  
 其他遠州

中村一学  
 加藤左衛門  
 野口頼母

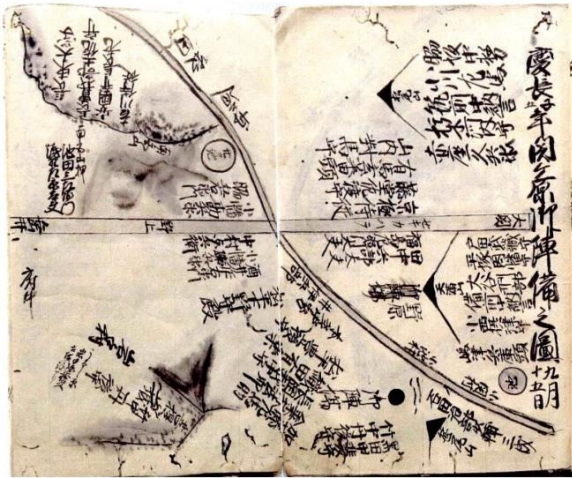
犬山押 式部子

八月廿三日岐阜攻



図②「関ヶ原御陣備之図」

みの こりようじてん  
垂井町岩手 明泉寺所蔵 『三柱古領侍傳』収載  
(原画:白黒)



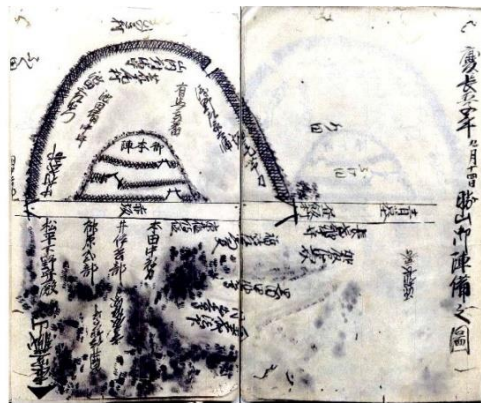
関ヶ原御陣備之図 9月15日

タリビピアセンター歴史民俗資料館発行『「戦国時代のたらい」』によると『三柱古領侍傳』は、垂井町岩手の明泉寺第十世竹中元甫著で、美濃国の地名、領主、長屋氏、岩手氏、竹中氏、関ヶ原合戦の陣図など諸書を引用しつつ、記した古文書。奥書によれば寛政8年(1796)に書かれたもの。

関ヶ原合戦までの絵図6枚(本図)の写しが10頁分収載。江戸時代に書かれた布陣図の分類では、ほぼA類に相当する武將の布陣になっている。B類の布陣では本図のように黒田甲斐守・竹中丹後守は加藤左馬助らと離れているが、本図には加藤左衛門尉の名がない。



慶長5年8月23日岐阜城落城



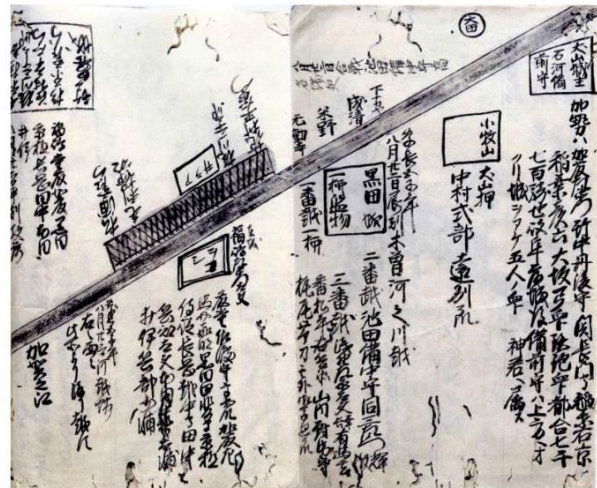
9月14日勝山御陣之備図



9月14日大垣城より関ヶ原へ退陣の陣形



9月14日大垣城之備図



8月22日木曾河之川越・犬山城加勢衆など





図④ 「関ヶ原戦場之図」部分「慶長軍記」所収  
 国立公文書館 所蔵 デジタルアーカイブ「慶長軍記」No.12-4より

## 布陣図関連1 山中村の村民が陣地造営を手伝う

合戦の前、石田方は山中村郷士（高木優榮氏先祖）に、浮田秀家・大谷刑部両将の陣取場所等の指図を給わりたく、地案内を含め陣造り作業の支援を頼むという趣旨の伝承が伝わる。

上図に、その陣所と見られる柵が描かれている。現在の大谷吉継跡である。「大谷刑部」（大谷刑部少輔吉継）の隣りに「木下山城」と記されており、何の城なのかと、高木優榮氏に、ご教示頂いたところの絵図には所々、「竹中丹後」もそうですが官位の「守」が抜けている。城名ではなく、「木下頼継・通称木下山城守（大谷吉継の甥）」であったことが判明。

また関ヶ原にお住まいで前記「石原峠を通

り布陣」の著者田邊信行氏からは、左記の資料を頂いた。

絵図の表記が簡略であるがゆえ、筆者の誤解であった。多くの布陣図には木下山城守の表示は少ない。（合戦屏風には木下頼継）

● 『関ヶ原合戦図志』 神谷道一著 明治二十五年四月刊（29頁）

大谷吉勝、木下頼継陣所 合戦誌ニ（大谷吉継ハ息大谷助吉勝ニ二千五百餘人 甥木下山城守頼継ニ千餘ヲ付テ垂井口ヘ差向左右ノ山ニ添テ備サセ若シ垂井ヨリ寄ル敵アラバ可レ防ト申付）

○ 垂井口山下 大松尾村 大谷吉勝木下頼継陣所 合戦誌ニ（大谷吉継ハ息大谷助吉勝ニ二千五百餘人 甥木下山城守頼継ニ千餘ヲ付テ垂井口ヘ差向左右ノ山ニ添テ備サセ若シ垂井ヨリ寄ル敵アラバ可レ防ト申付）トアリ又永田敬之 大垣所有ノ戦圖ニ（大谷大助ハ山ノ右木下山城守ハ山ノ左ニ在リ）ト記セリ中山道大松尾村 不破ノ關趾ノ西 藤川橋ノ東ニ坂アリ大木戸坂ト云フ 昔時不破ノ關ヲ以テ大木

● 『フリー百科事典ウィキペディア』他より

木下頼継 よつぐ（越前国若狭高浜城主2万5千石）

関ヶ原本戦では、松尾山に陣取った小早川秀秋の寝返り攻撃を、戸田重政と平塚為広とで食い止めたが、脇坂・赤座・朽木・小川ら北陸勢の寝返りと挟撃をうけて崩壊。吉継は最後まで奮闘したが戦場を離脱して越前国で潜伏したが、同年のうちに病死したという。戦後、所領没収。



成菩提院住職と「関ヶ原合戦陣形図」  
関ヶ原を中心に近江琵琶湖～尾張犬山まで広範囲に描写  
江戸時代中頃の作と云う 令和2年2月28日筆者撮影

布陣図関連2

小早川秀秋の戦場

殆どの関ヶ原布陣図において、松尾山付近に筑前中納言（小早川秀秋）の名が記されている。今回の布陣図調査で、この一点の布陣図のみに、松尾山から少し離れた藤古川の東に筑前中納言の名。背後に西軍から東軍に小早川に呼応し寝返りした小川・脇坂・朽木・赤座の名。このあたりで小早川は西軍と戦った？。寝返ったためか「筑前中納言」の名が赤と黒に色分け。なお対峙する東軍一番隊や武將の向きが不自然、さまざまに描かれている。

この陣形図は、関ヶ原から近江へ約7km、柏原宿集落のはずれ

に天台宗の寺院成菩提院じょうぼだいいんの所蔵。高木優榮氏から加藤貞泰の名がある布陣図が当院に所蔵されているとお聞きし、ご住職の協力で撮影する。

寺歴は9世紀はじめ最澄が開いた古刹。東山道・中山道沿いの寺ということで、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、また関ヶ原合戦前に小早川秀秋も宿泊したとされる。徳川家康の参謀といわれた天海大僧正が住職を務めた時期もある。又、数多くの文化財を有し「石田三成十三ヶ条成菩提院村掟書」も所蔵する由緒ある寺院。

↓成菩提院

北

↓藤古川



図②「関ヶ原合戦陣形図」(部分) ↑松尾山

↑筑前中納言

滋賀県米原市柏原 成菩提院 所蔵

左側に赤色で小川ほか4名の武將



岐阜市歴史博物館「博物館だよりNo.90」2015.8発行より転載

研究ノート

『関ヶ原合戦絵図  
—関ヶ原御陣之図』  
をめぐって

土山 公仁

(1)

戦国合戦をテーマにした絵図の中でもっとも多く制作されたのは関ヶ原合戦図だろう。ひとくちに関ヶ原合戦図といっても、関ヶ原本戦の配陣を記したもの、南は清須城、東は犬山城、北は郡上八幡城、西は関ヶ原まで広範囲を対象にしたものがあり、さらに、岐阜城や郡上八幡城をめぐる攻防に特化したものも知られている。

そのうち、岐阜城攻めから関ヶ原での決戦まで広範囲に描いたものももっとも多く制作されたようで、岐阜市歴史博物館でも、寄託を含めると8件ほど収蔵している。それらの絵図については展覧会等で展示活用してきたが、合戦直後に制作されたものではなく、対象とする合戦の歴史的リアリティにたどりつくことはできないため、漠然と江戸時代後期という制作年代を示しただけで、その価値について十分に検討してこなかった。小稿では、長年、放置してきた罪滅ぼしの意味もあり、複数の絵図を比較検討し、それらが制作された背景や時代的変遷についての見通しを述べてみたいと思う。

(2)

歴史博物館に収蔵している資料で制作年代が明らかかなものとしては、享保20年(1735)・天保2年(1831)に写したものがあ。その他岡山大学附属図書館には、寛延2年(1749)、岐阜県歴史資料館には天明7年(1787)の紀年銘資料がある。少なくとも、18世紀には数多くの絵図が制作されるようになっていたことがうかがえるだろう。

そのうち最も新しい天保2年の絵図(図1)は豊田利忠(未詳)によって写されたものである。その他の資料と比べると、関ヶ原合戦に直接関係しない地誌的情報が豊富なことが特徴である。伝説の盗賊熊坂長範が物見に使った松や謡曲に熊坂長範とともに霊として登場する源朝長、源義朝、源義平の供養塔が残る円興寺などは、その他の絵図にも描かれることが多いが、天保2年の絵図は

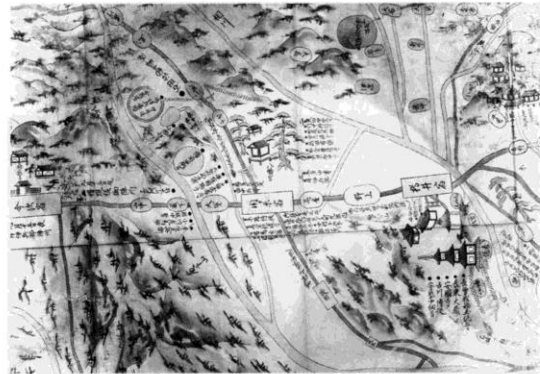


図1 (天保2年の絵図 部分)

大垣八幡宮・虚空蔵山(大垣市)・南宮大社(垂井町)・関ヶ原八幡宮、今須明応寺(関ヶ原町)なども絵画的表現で描かれている。

それではなぜ、西美濃地域の地誌的情報だけがこの手の絵図に豊富なのだろうか。

享保20年の絵図は、金生山昌春(未詳)が写したもので、金生山は大垣市赤坂にある山名にちなんだものである。寛延2年の岡山大学附属図書館本はもともと関ヶ原宿本陣にあった絵図を池田家が写したものであった。どうやら、西美濃地区が絵図の流布に関係があり、そのためこの地域の地誌的情報だけが絵図に記載されるようになったのではないだろうか。しかし、もともとこの絵図の原本がこの地域で開発されたとも思えない。同系統の絵図は、徳川宗家、尾張徳川家、田安家、池田家など将軍家や大名家にも多数伝来していること、さらにこの絵図を『関ヶ原御陣之図』と呼んでいる例が複数あり、御陣は当然、家康陣をさすだろうから、江戸幕府が成立する直接の契機になった関ヶ原の戦いを検証するために制作された可能性が高いと思われるのである。

(3)

それではその原図はいつごろ制作されたのだろうか。これらの絵図の大半が、寛文2年(1662)以降に一般化する「笠松」(町名)を使っているが、歴史博物館に収蔵しているものの中に「笠松」以前に使われていた「笠町」や「笠町」を誤写したことに起因する「竹ヶ町」と記したものがあ。「笠町」という表記は、後述する『関ヶ原軍記大成』でも使われているが、基本的には「笠町」という町名が風化していない時期に原図が制作されたのではないだろうか。

原図の制作者が現地を踏査した可能性もあるだろうが、絵画的に表現された金華山の山並みです



ら、リアリティを感じることはできない。原図の制作者は「美濃国絵図」などを参考にして絵図という体裁を整えたように思われる。絵図に記された川筋は、17世紀に成立した『正保の美濃国絵図』（岐阜県歴史資料館蔵）に近い。また、正保の国絵図にさりげなく描かれている熊坂長範物見の松が、関ヶ原合戦絵図に地誌的情報が付加される糸口になったようにも思われるのである。

(4)

次に、絵図に記載された文字情報を検討してみよう。17世紀にさかのぼる関ヶ原合戦を対象とした軍記物の代表格は宮川忍斎の『関ヶ原軍記大成』〈元禄3年（1690）序文〉であるが、この絵図は、『関ヶ原軍記大成』ほど流布しなかった峯賀高亮の『関ヶ原合戦誌記』〈貞享4年（1687）序文〉の記述と合致するところが多い。

図2は8月23日、福島正則・池田輝政らが織田秀信の守る岐阜城を攻略した場面の一部である。『関ヶ原合戦誌記』は岐阜山と谷を一つ隔て瑞龍寺と云う山あり、ここに2ヶ所に砦を構えて、柏原彦右衛門・平介父子、松田十太夫が立て籠もり、討死したことを記している。絵図でも、この砦のある山並みは金華山の主要部から少し離れている。ふたつの砦には、右側に榎原彦右衛門、左側に彦右衛門子内膳、さらに松田十太夫が討死したことを注記している。まさに、『関ヶ原合戦誌記』の絵画化なのである。一方、『関ヶ原軍記大成』は、瑞龍寺山に陣を構えたのは榎原彦右衛門と弟弥介で、彦右衛門の子や松田十太夫が陣したという説については疑わしいとすら判断している。

絵図製作者が『関ヶ原軍記大成』をネタ本にしたならば、瑞龍寺山に砦をひとつ描いただけで、榎原彦右衛門父子でなく兄弟の名前が記されてい



図2 (瑞龍寺山の砦部分)

たはずだ。

『絵図』に記された犬山城の加勢衆については少し複雑である。

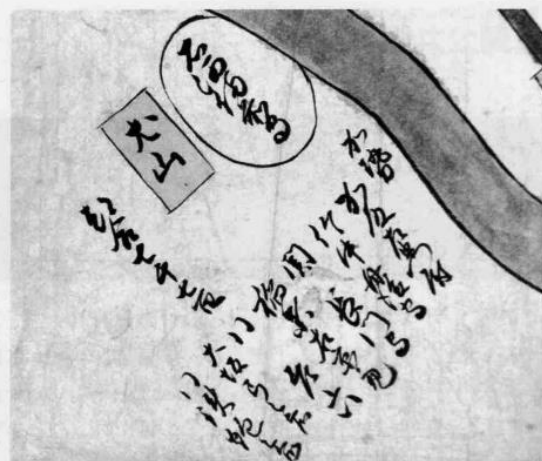


図3 (犬山城部分)

絵図の注記は、「加藤左衛門尉・竹中丹後守・関長門守・稲葉右京亮・同彦六・大坂弓衆・同鉄砲衆・都合七千七百」である。加勢に加わった五人の順番こそ違うが、惣人数まで『関ヶ原合戦誌記』の記述と一致する。但し、大坂弓衆・同鉄砲衆というリアリティの乏しい情報は同書に記載されておらず、この部分は「其他大坂より下りし弓・鉄砲の者頭兩人差加へらる」と記した『関ヶ原軍記大成』によって補われているように思われる。大坂弓衆・同鉄砲衆の部分については、字の大きさを他より小さく表現している資料もあり、この部分はある段階で2次的に書き加えられた情報であった可能性が高いようにも思われる。

(5)

「関ヶ原御陣図」に記された文字情報は『関ヶ原合戦誌記』との関連が深い。その原図は17世紀に『美濃国絵図』と『関ヶ原合戦誌記』をもとにして制作、もしくは、江戸の軍学者峯賀高亮による『関ヶ原合戦誌記』の編纂と同時並行で附図として制作された可能性があるのではないだろうか。筆者は18世紀にその写が西美濃地方にもたらされ、そこで地誌的情報が豊富に書き加えられ、観光マップでもある「関ヶ原合戦絵図」が大量に制作されるようになったと考えた。だとすると、美濃地域以外でも原図から直接写した資料が存在するはずである。今後、美濃地域以外に伝存した資料群と比較してその展開について検討していきたいと思っている。

第六部  
合戦図屏風

## 第六部 合戦図屏風

### (1) 関ヶ原合戦図屏風

岐阜市歴史博物館

土曜講座 平成30年5月26日

土山公人 (つちやまきみひと)

関ヶ原合戦図屏風はどのくらい存在しているか

1	大阪歴史博物館本 (津軽家本)	八曲一双	江戸初期
2	関ヶ原町歴史民俗資料館本	六曲一隻	江戸後期
3	彦根城博物館本A (井伊家本)	六曲一隻	江戸後期
4	彦根城博物館本B (井伊家本)	六曲一隻	江戸後期
5	行田市郷土博物館本	六曲一双	明治
6	垂井町個人本 (現在不明)	六曲一双	明治
7	長源寺本	六曲一双	明治
8	大垣市個人本 (現在不明)	六曲一双	明治
9	関ヶ原ウオーランド本	六曲一双	明治
10	関ヶ原町個人本	六曲一双	明治
11	関ヶ原町個人本	六曲一双	明治
12	京都古美術商所蔵本 (現在不明)	六曲一双	明治
13	岐阜市歴史博物館本	六曲一双	江戸後期
14	渡辺美術館本	六曲一双	江戸後期
15	大阪城天守閣本	六曲一双	江戸後期
16	敦賀市立博物館本	六曲一双	1854年
17	ミュージアム中山道本	六曲一双	江戸後期
18	徳川美術館本	六曲二双	江戸後期
19	福岡市博物館本	六曲二双	

19件の関ヶ原合戦図屏風のうち、行方不明分を含め9件が岐阜県にある。

但し、江戸時代にまでさかのぼるものは、1件 (関ヶ原町歴史民俗資料館本) のみ、行田市郷土博物館本などは従来幕末に大垣藩戸田家周辺で描かれたと考えられてきたが、明治以降に制作されたというのが、今回の結論です。





「関ヶ原合戦図屏風」 六曲一隻  
嘉永7年（1854）、狩野梅春図応需写之翫月邸峩山（かんげつていがせん）  
関ヶ原町歴史民俗資料館 所蔵  
（99頁 No.2の屏風）

## （2）関ヶ原合戦図屏風の名場面（抜粋）

● 『関ヶ原の歴史』 No.327 2018年10月号 関ヶ原歴史を語る会 発行

今井剛記

関ヶ原町文化財に指定されている翫月邸峩山筆の関ヶ原合戦屏風には、合戦時の関ヶ原一帯を背景に800名程の人物の中、113名もの武将名が記されている。他に絵も名もない家康や、名のみ三成、また描画のみの大場土佐・浮田太郎左衛門の武将を含めると120名近くの武将が判明する。

登場人物達は、日本全国から集まった武将達であり、且つ皆がそれぞれに合戦時の逸話をもっている武将達ばかりである。

どの武将を特集した歴史書や歴史番組でも、使用される屏風絵は、圧倒的な頻度で関ヶ原本が使われる一因かも知れない。...

③四扇目下部 稲葉貞通 犬山城から離脱し東軍に就いた美濃武将の一人。郡上八幡城主。稲葉一鉄の次男だが正室の子ゆえ嫡男として育つ。妹（安）は、斉藤利三（明智光秀第一の家臣）に嫁ぎ産まれた娘がお福（春日局）。又、井伊が凋落したと言われる西軍犬山城に参陣した美濃武将達では、竹中重門と稲葉貞通のみ描かれ、加藤貞泰、関一政らは記載がない。

(3) 「蛇の目紋」が描かれている合戦図屏風

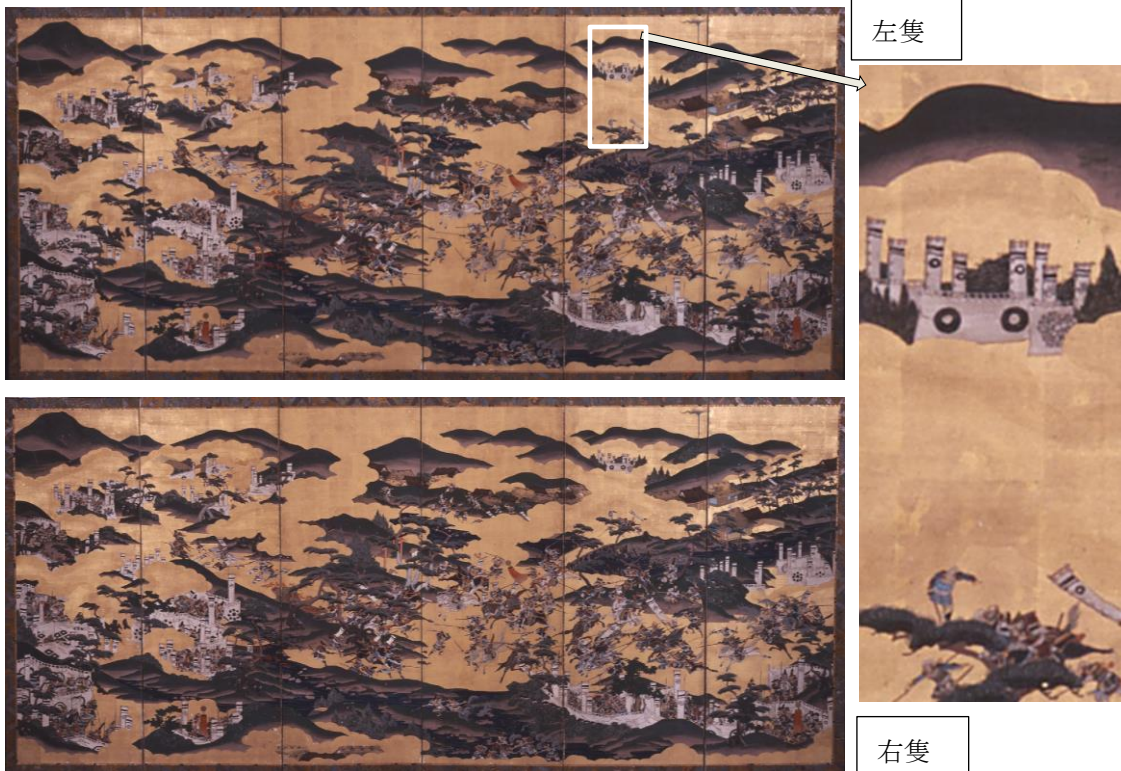
左隻二扇上段(部分拡大)は、「合戦時の布陣図や黒田家の家紋・藤巴があることから黒田の陣であると思われる。ただし、その陣幕に蛇の目紋が使用されていることにつきましては、当方(渡辺美術館)でも分かりかねます」と回答。黒田長政・加藤貞泰・竹中重門が丸山狼煙場付近に布陣の様子としたいものです。

Ⅱ 渡辺美術館HP「関ヶ原合戦図屏風」解説文から転載Ⅱ

関ヶ原合戦当日の様子を戦場の南方面から描いています。

右隻一扇中段には徳川家康の本陣が、左隻五、六扇上段には石田三成の陣所があり、また、右隻五、六扇には開戦まもないころの東西両軍の激突の様子が、左隻一〜三扇には東軍が押し気味に戦闘を展開している様子が描かれています。旗指物や幕の描き方は単調ですが、人物・甲冑などは非常に丁寧に描かれており、陣形には一部脚色があるもののおおむね実際の位置に配置されています。また、戦闘場面に本多隊が島津隊を追い散らしている場面があります。これは合戦最後の敵中突破による島津隊の退却及び本多隊の追撃の様子を屏風絵の構成上脚色して描いたものと考えられます。

なお、関ヶ原合戦屏風絵は他に津軽本・井伊家本などが知られていますが、本屏風はそのどれとも異なる独自の様式を持っています。



「関ヶ原合戦図屏風」 六曲一双 172.0×756.0(cm) 江戸時代

鳥取県 渡辺美術館 所蔵

(99頁 No.14の屏風)

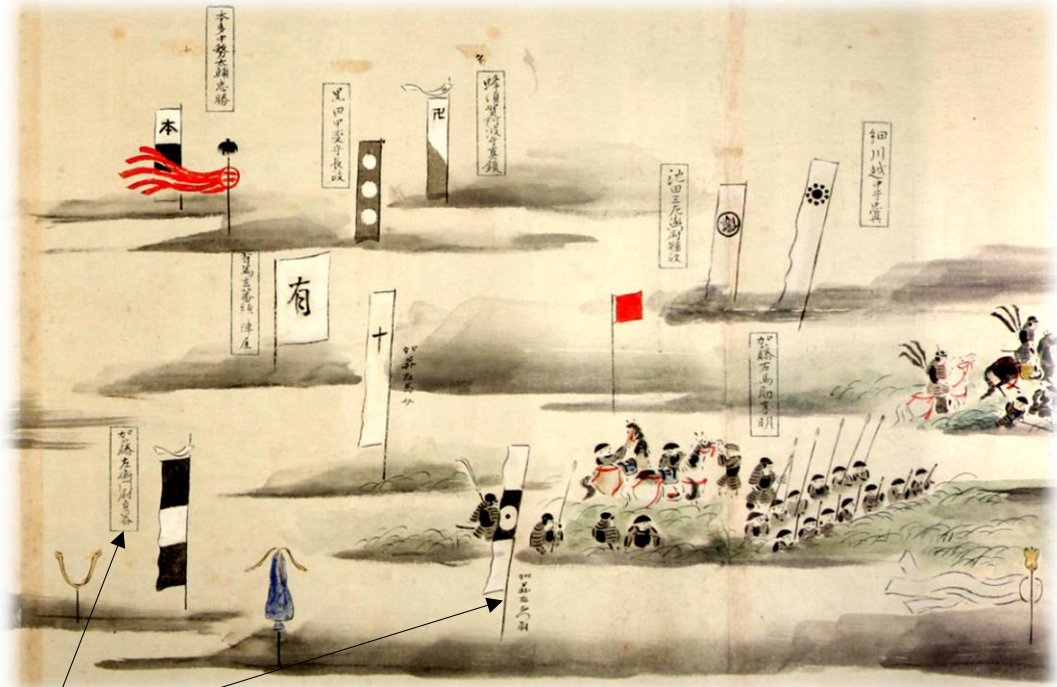


#### (4) 関ヶ原合戦図屏風・絵巻・配陣図にみる加藤貞泰

土山公仁 記

現存する関ヶ原合戦図屏風・絵巻・配陣図で合戦のリアリティを伝えるものはほとんどない。(例外は津軽家本関ヶ原合戦図屏風)

屏風・絵巻・配陣図は、文学作品(軍記物・軍学書・家譜)をもとに2次的に創作されたものが多く、それらを研究しても合戦のリアリティにはつきあたらない。しかし、江戸時代の人々がどのようにこの戦いを考えていたかを考える糸口にはなる。



「関ヶ原合戦図絵巻」(二巻の部分) 岐阜市歴史博物館 所蔵

加藤左衛門尉の名

同系統の作品は多数知られている。原本は江戸中期。

据黒の白旗、十字の旗、九曜星の旗を関ヶ原合戦シーンの加藤貞泰、加藤嘉明、細川忠興をさすものであれば、敗走する西軍の追撃シーンとも解せそうである。

岐阜市歴史博物館本では2ヶ所に加藤左衛門尉の名、但し、左の1ヶ所は誤り。他に、三つ餅=藤堂高虎、有=細川忠興、中白=黒田長政であるが名に誤り。



「関ヶ原合戦図屏風」六曲一隻 155.7×358.7 (cm) (部分)

岐阜市歴史博物館 所蔵 江戸後期

大名家がからんだものとは異なり、歴史考証はしていない。錦絵に共通する歴史を楽しむために描かれた作品。

謎の名：加藤竜之助(「蛇の目旗」と白馬騎乗の武士は加藤嘉明の家臣?)



第七部  
関連資料  
1

(1) 系図に見る関ヶ原合戦記録

加藤貞泰や織田秀信に仕えたとする系図などから、関ヶ原合戦(前哨戦含む)記録がある人物を紹介する。

● 『北藤録』 加藤世系 (259頁)

加藤伝左衛門

(幼名伝三郎・加藤光泰の弟平左衛門の二男世継)

「十五歳ト称シテ朝鮮ニ赴ク。其後慶長五年庚子関原ノ役、元和元年乙卯夏大坂御征伐ノ時モ貞泰ニ従ヒ軍事ヲ勉ム。」

● 『吉田家の系譜』 羽島郡岐南町徳田 正村英司所蔵

美濃の親族が西軍(織田秀信)と東軍(加藤貞泰)に分かれる。

吉田平内成直

(三世吉田覚次の弟・秀信に仕え岐阜城落城の日死去)

「仕岐阜中納言秀信卿 慶長五庚子八月二三日卒岐阜 年五五」

吉田十左衛門覚龍

(四世の兄・貞泰に仕え要職の目代・関ヶ原合戦の時、三九歳)

「仕加藤左衛門尉貞泰、濃州方懸郡黒野城主為目代 寛永十一年(一六三四)五月二十日没 享年七三」

● 『伊藤氏系譜』 岐阜市黒野 伊藤定一所蔵

伊藤長八郎久次

(天正年中、伊藤孫左衛門家次は落行していた越前の国から故国濃州黒埜(野)郷に來住。家次の四男長八郎久次は織田秀信に仕官していたが、慶長五年八月二十三日の岐阜城落城の折、格子門で討死。)

「岐阜中納言秀信卿仕

慶長五年八月岐阜城於格子門ニ而討死」

○ 関係史料『慶長軍記』岐阜落城事(249頁)

大手七曲口……七間矢藏……大手ヘカカリテ、城中ニハ津田藤三郎・飯沼十左衛門……伊藤長八……(十名の名)等ハ、四角八方ニ切テ廻リ、突テ出テ追退クル有様、頂羽ノ散卒ヲアツメテ三所ノ陣ヲ張シ勢ヲ学ヒケルカト人々驚目ヲ、諸大将山下ヨリ見之感アヘリ。アケコウシ門ノ前ニテ……上コウシ門ニハ……

○ 関係史料『慶長五年岐阜軍記』愛知県図書館デジタルライブラリー

城西出丸持口

伊藤長八 千人 貳千石

城北下之水之手持口

伊藤平左エ門 貳千人 貳千石

(伊藤氏系譜には長八の兄に、正次平左エ門 仕官行衛不知)

●『大野家文書・六字之御名号由緒書』岐阜市下鶴飼

大野孫市（大野家第二代）

「上人（頭如） 危急之御難を救ひ候ゆへ為、御褒美蓮如上人御染筆之六字の名号御手づから頂戴、帰国いたし慶長五年八月、倅太兵衛下鶴飼に差置加藤左衛門尉御共いたし尾州犬山へ出陣、同年九月関ヶ原にて討死いたし候。以之同姓之者今以予州大洲に勤め致し候。法名光正印一円居士。」

『尚、大野家文書に孫市が頭如上人から賜った『六字の名号「南無阿弥陀仏」の軸』は、江戸時代以来、存在不明であったが平成二十四年（二〇一三）、研究会調査にて各務原市の安禅寺で発見』。

（2）岐阜城落城の日 秀信家臣百々氏娘・黒野へ

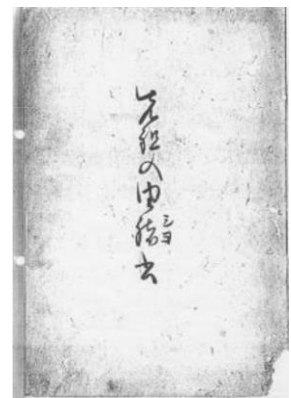
大野家の先祖由緒書には、慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦の前哨戦で八月二十三日に岐阜城が徳川軍との攻防で落城。

岐阜城主中納言秀信の家臣、百々氏の娘さとは、身ごもったまま江州へ遁れる途中、岐阜の方で鉄砲の音が聞こえるなか、黒野下鶴飼村に入った様子を記している。この地で生まれた子秀太郎の子孫が大野家の由緒として記されている。

尚、このときの黒野城主加藤貞泰は、犬山城に加勢中であつた。

●岐阜市下鶴飼 大野家文書

「先祖の由緒書」



「先祖の由緒書」  
岐阜市 大野家文書

一、慶長五年秋八月、関東之家康岐阜を責め候とき、岐阜まけにおよび、味方の并家頼共討死又ハ遁去り候節、我等が母さとハ三人めの娘にて、父中納言秀信につかわれありし処、我等（懐胎）かいたいたし、八月になりし処、右之大いくさにて、父は行方しれずなられ、母さと手廻りの女、ミチ・雪式人ト和田孫十郎介抱二て江州へ遁け行くとて、九ツ過二岐阜を遁け出、鷺山の方へ向け、よふくと黒の村西まで来り、日暮前ニも近かけれども、岐阜の方鉄砲の声きこゆれハ、最ふ二三里も落ちのび宿をもとり可申と孫十郎申せども、朝飯之まゝゆへ、空腹になり候間、母式人之女とあき家の戸を明ヶ入置、人をたづねし処、明神の拝殿に戸をたてうちらにたゝミ菴をはり、中に男十五、六人もこもり候間、これをたのミ候処、養父大野太兵衛ト山田作右衛門とやいへる者申様は、此度之軍の事をうけたまわり、女房子共ハ流玉をあんじ、伊治良又奥村則松辺へ知るべをたよりに、衣類・食物為持預ヶ、又家主も多く付参り家を捨置候間、拙者共兩人



村内気強の者を引つれ、氏神ニこもり、もし此辺家ニ火を付候  
 人有之ハ、御断を申、其代り人足ニても勤メ可申と村内の人に  
 かわり、こもり居申候。身うけ申せば、岐阜之人とそんじ候  
 間、難儀ニ御座候ハ、今晚は手前宅ニ御宿かし可申候間、  
 おとまりならるべく御泊り可被成候。しかし、めしの外何んにも無御座候と信節ニ  
 被其夜太兵衛方ニ止宿いたし、翌日は鉄砲の声もなく静にな  
 り、又兵衛真実ニ世話いたし呉候処、昨日のつかれいで、病氣  
 ニ相成、逗留いたす処、岐阜落城いたし、秀信様ニも行方  
 不知御成被成、父百々も行方不知相成、其外うち死のうわさ  
 追々聞度事ニ肝を消すよふにおもわれ、其上大垣・江州の方へ  
 趣候よし、生きている心地なくくらし候へ共、落人のせんぎ  
 なく候ゆへ、少しハあんしんいたし、秀信様御行衛親共ニも訪  
 ねあい、親類之口もあいたしと心をたたく処、廿日斗り過  
 て、あやしき侍老人来り、孫十郎と申合せ、ミち・ゆきの兩人  
 引つれ、少々の貯へ・衣類まで取揃へ、何国ともす落行れば、  
 世にちからなきうへにいよく力なく太兵衛夫婦の介抱ニ預り、  
 十月廿弐日我等を平産し、太兵衛子にいたし、秀太郎ト母の名  
 を付られ、ゆく末ハどふそいかよふの侍にもなり候様ニ死るま  
 で被申候へ共、かすかなる百姓の子ニなり、武芸の執行も田舎

なればまゝならず。むかしの家頼親類ハはなくなり、たまく  
 ある人はおとずれもいたさず、いやしめ候ゆへ、土百姓ニなり  
 はて、太兵衛娘我等等ニ弐歳としかさなると夫婦になり候処、  
 十八歳之春、寛永四二月五日、死去被致、はかなき事ニ候。く  
 わしく書置候様ニ、母存生之節くれくも申付ニ候へ共、無学之  
 手前ゆへふつゝかなから書置候。以上。

(一六三五)  
 寛永十弐年

大野太兵衛政吉

幼名秀太郎

書之

法名潤間事也解説

平成30年(2012)岐阜市歴史博物館 学芸員 寛真理子  
 (現在、犬山城白帝文庫主任学芸員・研究会相談役)

### (3) 戦後の論功行賞

加藤貞泰は慶長六年、徳川家康に味方して貢献した功績で黒野城と四万石の禄高は安堵となる。石田方の織田秀信領地の多くは、加納城主奥平信昌領になり、一部の領地(村)は貞泰領と入替も見られる。

貞泰は慶長十五年、西国の伯耆国米子に二万石加増の六万石で国替え。関ヶ原の功績と「徳川十五代史」に記されているが戦後十年にもなる。

加藤氏は、貞泰の弟分を含めると領土加増になる。



米子城イメージ図  
(米子市立山陰歴史館内  
ポスターより)  
加藤貞泰、関ヶ原合戦  
から10年後  
山陰の伯耆国(鳥取県)  
米子城へ国替え

### (4) 弟平内光直、美濃で新たに旗本

● 『池田町史』旗本加藤氏の支配(316頁)・『六之井神社のあゆみ』(7頁)  
慶長五年、上杉征伐のとき、兄貞泰の人質として、関東に下向した。関ヶ原合戦では家康に従軍し、戦後の慶長七年、池田・安八・不破三郡の内三六四一石の采地を賜る。陣屋所在地が六之井

であつたので六之井加藤氏と称され、明治維新まで七代続いた。

池田郡	六之井村	611石920
	般若畑村	201石920
	草深村	397石120
	片山村の一部	370石836
安八郡	西結村	1444石014
	津布良村	235石345
	二木村	32石520
不破郡	府中村の一部	348石200

合計 3641 石

「慶長6年美濃一国郷帳」

二代目平内光直は、寛永十年(1633)、十八歳のとき、遺跡をつぎ、このとき御書院番に列した。翌十一年六月、安八郡の采地一七〇石余を、大野郡公郷村之内に移された。

● 『北藤録』卷之九 貞泰之伝(63頁)

中ニモ貞泰ハ弟平内光直ヲ人質トシテ関東へ差下スニ依テ、東照宮御感悦ノ余リ光直ニモ別ニ領地ヲ賜フ。美濃国大野郡公卿村ニ於テ三千七百石ヲ平内光直ニ賜フ。光直後従五位下ニ叙シ遠江守ニ任セラル。軍功并系譜別卷ニ記ス。(注・公卿村は二代目の采地)

● 『北藤録』系譜 卷之十九 龜流世系 遠江守光泰次男(241頁)

光直 平内 従五位下遠江守 母一柳藤兵衛女

東照宮石田御征伐ノ時供奉ス。力戦シテ首級ヲ得タリ。其抽賞トシテ、同七年壬寅、美濃国大野郡公卿村ニ於テ新タニ領地三千六百四十拾壹石ヲ賜ヒ世々コレヲ領ス。(注・公卿村は二代目の采地)

## (5) 本書に掲載の書状・禁制


年月日	資料名	差し出し	宛先	掲載頁
慶長4年3月9日	徳川秀忠書状	羽柴武蔵守 秀忠	加藤左衛門尉 御宿所	17
慶長5年7月7日	徳川家康朱印状 軍法事	徳川家康	大名	17
慶長5年7月20日	徳川家康書状	徳川家康	加藤左衛門尉	19
慶長5年7月20日	加藤太郎左衛門書状	加藤太郎左衛門	加藤左衛門尉	20
慶長5年8月3日	酒井忠世書状	酒井右兵衛大夫 (忠世)	加藤左衛門尉 貴居	21
慶長5年8月3日	徳川家康書状	徳川家康	加藤左衛門尉	21
慶長5年8月3日	永井直勝書状	永井右近大夫 (直勝)	加藤左衛門尉	21
慶長5年8月7日	徳川家康書状	徳川家康	加藤左衛門尉	23
慶長5年8月8日	徳川家康書状	徳川家康	石川備前守光吉 (貞清)	24
慶長5年8月12日	徳川家康書状	徳川家康	井伊部少輔 (直政) 本多中務大夫 (忠勝)	25
慶長5年8月日	織田秀信禁制	織田秀信	垣内正木郷寺内	27
慶長5年8月24日	井伊直政書状	井伊兵部少輔 (直政)	竹中丹後守 加藤左衛門尉 関長門守	29
慶長5年8月25日	加藤図書光政書状	加藤図書 (光政)	山対州 (山内一豊)	29
慶長5年8月日	池田輝政禁制判物	三左衛門 (池田輝政)	木田郷中	30
慶長5年8月28日	井伊直政書状	井伊兵部少輔 (直政)	加藤左衛門 関長門守 竹中丹後	31
慶長5年8月28日	本多忠勝書状	本多中務 (忠勝)	加藤左衛門尉	31
慶長5年9月3日	徳川家康書状	徳川家康	加藤左衛門尉 竹中丹後守	32
慶長5年9月3日	福島正則等連署書状	羽左衛門大夫 (正則) 羽三左衛門 (輝正) 本多中書 (忠勝) 井伊兵部少輔 (直政)	加藤左衛門尉 稲葉甲斐守 (道重)	33
慶長5年9月4日	徳川家康書状	徳川家康	石川備前守 (貞清)	34
慶長5年9月5日	徳川家康書状	徳川家康	加藤左衛門尉	35
慶長5年9月11日	本多忠勝書状	本多中務少 (忠勝)	加藤左衛門尉 陣	36
慶長5年9月19日	徳川家康朱印状	徳川家康	竹中丹後守	58
(年未祥)4月29日	徳川家康書状	徳川家康	加藤左衛門尉	58



(6) 家康からの書状数ベスト 10 に加藤貞泰

「歴史人」No.58 新説 大関ヶ原 2015年発行より引用

### 家康からの手紙を多く受け取った武将ランキング



**5位** 7通

**藤堂高虎**


7月1通/8月2通/9月4通

この戦いで一気にステップアップした藤堂高虎は4位。高虎からも家康へ熱心に手紙で情報を提供しており、家康からの手紙も多い。

**池田輝政**

7月0通/8月3通/9月4通

池田恒興の子で、家康の次女の婿。岐阜城攻めで軍功があり、戦後に「嫡殿」の所領は大幅増。書状は輝政へというより連名が多い。



**2位** 9通

**伊達政宗**

7月0通/8月6通/9月3通

東北で戦う(?)、政宗への手紙も多い。実際に上杉軍と対峙したのは最上義光だが、抜け目ない政宗の動向を家康は気にしていたのだ。

**浅野幸長**


7月0通/8月7通/9月2通

福島と同じく豊臣家恩顧の代表格で、五奉行のうち唯一東軍についた浅野行長。手紙の内容は戦闘の指示が多い。

**黒田長政**

7月1通/8月3通/9月5通

調略戦において特に重要な役割を担った長政とのやり取りは、内応の報告や密談の呼び出しなど、親密さが伺える。




**1位** 14通

**福島正則**

7月1通/8月7通/9月6通

豊臣恩顧の将の筆頭格。彼の去就が、東軍全体の士気・作戦に大きな影響力を持つことを知っていた家康は多くの手紙を出している。

---



**4通**

**真田信幸**

7月2通/8月1通/9月1通

同点が多いものの、真田家から一人東軍に参加した信幸がランクイン。家康から「神妙」である、とのお褒めの書状をもらっている。

**前田利長**

7月0通/8月2通/9月2通

利家亡き後の前田家を守る利長はこの位置。慎重な利長はあっさり東軍支持を打ち出し、戦後は加封され100万石を突破。

**福島高晴**


7月0通/8月2通/9月2通

正則の弟で、兄と一緒に清洲城からはじまる東軍の戦いに参戦。手紙の内容は主に、戦いに関する指示書がメイン。

**堀親良**

7月0通/8月2通/9月2通

東北で上杉方、おそらくは直江兼統が東軍対策のために計画した「上杉遺民一揆」の鎮圧に働いた。手紙は指示書がメイン。



**5通**

**京極高知**

7月0通/8月3通/9月2通

本戦では大谷軍と死闘を演じた高知。大津城で決死の籠城戦を展開した兄の高次ともども東軍に尽くし、家康を感激させた。

**妻木頼忠**


7月1通/8月3通/9月1通

大名ではない(7500石)頼忠だが、美濃の貴重な東軍勢力だった。家康は頼忠に上方の情報収集を指示している。

**加藤貞泰**

7月1通/8月2通/9月2通

関ヶ原周辺における西軍東軍勢力の中間に位置した西軍の城・大山村。貞泰はこれを開城させる交渉に働き、家康も気にかけていた。



**6通**

**最上義光**

7月1通/8月2通/9月3通

上杉討伐をめぐる7月のやり取りが多く、「やっぱり上杉攻めは止めて、三成を討ちに行く」という、義光にはショックな書状も含まれる。

**森忠政**

7月1通/8月4通/9月1通

信長の近習、森可成の六男。居城である川中島の近くで行われている上田攻めに関連する手紙が多く、真田の見張りのような役割だった。

## 180通の手紙で 家康は何を訴えたのか?

勝利の鉄則 ① 他人を動かす

(1) 味方になるよう要請するもの  
この時期、家康が諸將に出した手紙をみると、つぎの3つに分類できる。

(2) 具体的に指示・命令を伝えるもの  
書きつぶりも、単に「居丈高いさたかではなく、命令といっても押しつけたようないい方とはなっていない。特徴的な手紙を数点紹介したい。

(3) 働きに対する礼状  
働きに対する礼状

109

(7) 関ヶ原合戦の兵力

●『泰平の道 関ヶ原合戦に学ぶ』谷口玉泉著（藤井治右衛門「関ヶ原合戦」、陸軍参謀本部「大日本戦史」）

犬山城加勢衆の兵数七、七〇〇余人の内訳を、下記表「関ヶ原合戦出陣武将兵力」を基に推定する。（筆者）

武将名	領地	居城	禄高	兵数
加藤貞泰	美濃	黒野	四〇、〇〇〇	一、二〇〇
竹中重門	美濃	岩手	六、〇〇〇	一八〇
稲葉貞通	美濃	郡上八幡	四〇、〇〇〇	一、二〇〇
関一政	美濃	多良	三〇、〇〇〇	九〇〇
石川貞清	尾張	犬山	一、二〇〇、〇〇〇	三、六〇〇
その他（摂州旗本弓・鉄砲頭兩人など）				六二〇

- ・竹中重門は、五千石、武将兵力が一〇〇人と記されているが、六千石、一八〇人になるので兵数を一八〇とした。
- ・石川貞清の所領高は、犬山城主として一二、〇〇〇石、加えて木曾及び東濃の代官としての管轄地を含めると一二〇、〇〇〇石。貞清の本拠地であるので十二万石を採用とした。
- ・貞清は関ヶ原合戦で石田方に加わるが武将兵力の記載なし。
- ・大坂弓鉄砲頭は、信憑性に疑問もあり、その他とした。

関ヶ原合戦出陣武将兵力

東軍の兵力 (二〇〇石 三人)

武将名	領地	居城	禄高	兵数	陣地	年齢	備考
武將名	領地	居城	禄高	兵数	陣地	年齢	備考
堀尾忠氏	三府遠	沼津	一七〇、〇〇〇	五、〇〇〇	赤坂	57	
中村一栄	河津	津	一四五、〇〇〇	四、三五〇	根野	36	
水野勝成	濃美	根野	三〇、〇〇〇	九〇〇	根野	36	
西尾光教	河津	根野	二〇、〇〇〇	六〇〇	根野	56	
松重綱	濃美	根野	一〇、〇〇〇	三〇〇	根野	22	
柳直盛	尾遠	前田	三五、〇〇〇	一、〇〇〇	松村	35	
一柳信	尾遠	前田	四五、〇〇〇	一、〇〇〇	松村	35	
池田輝政	三府遠	沼津	一五二、〇〇〇	四、五〇〇	野塚	24	
浅野幸長	河津	津	二一七、〇〇〇	六、五〇〇	野塚	24	
山内一豊	津掛	川中	六八、六〇〇	二、〇〇〇	野塚	37	
有馬頼遠	津掛	川中	一〇、〇〇〇	三〇〇	野塚	55	
有馬頼朝	津掛	川中	三〇、〇〇〇	九〇〇	野塚	68	
有馬頼房	津掛	川中	三〇、〇〇〇	九〇〇	野塚	59	
分部嘉氏	濃勢	上野	三〇、〇〇〇	九〇〇	野塚	49	
市橋永昌	濃勢	上野	一〇、〇〇〇	三〇〇	野塚	43	
徳永勝美	濃勢	上野	三〇、〇〇〇	九〇〇	野塚	49	
徳永勝美	濃勢	上野	三〇、〇〇〇	九〇〇	野塚	49	
計			一、一五〇人	以上大垣城に備えし兵			
徳川家康	東江	戸	二、五五七、〇〇〇	三〇、〇〇〇	桃配山	59	
大久保彦左衛門	東江	戸	二、五五七、〇〇〇	三〇、〇〇〇	桃配山	59	
本多正純	東江	戸	二、五五七、〇〇〇	三〇、〇〇〇	桃配山	59	
柳生信昌	東江	戸	前備		桃配山	41	
奥平昌昌	東江	戸	前備		桃配山	29	
酒井重忠	東江	戸	大番備		桃配山	45	
酒井重勝	東江	戸	大番備		桃配山	51	
松井重勝	東江	戸	大番中組		桃配山	45	
西尾吉次	東江	戸	大番左組		桃配山	70	
酒井家次	東江	戸	遊軍備		桃配山	52	
板坂正則	東江	戸	祐筆		桃配山	39	
福島正勝	東江	戸	正則の子	六、〇〇〇	桃配山	39	左翼先鋒
福島重勝	東江	戸	家老		桃配山	16	
可児治重	東江	戸	第一隊長		桃配山		
祖父江法斎	東江	戸	物見頭		桃配山		
大野治長	東江	戸	高虎の弟	八三、〇〇〇	桃配山	45	左翼第二陣
藤堂高虎	東江	戸	高虎の弟	一〇〇、〇〇〇	桃配山	28	左翼第二陣
藤堂仁右衛門	東江	戸	高虎の弟	一〇〇、〇〇〇	桃配山	28	左翼第二陣
京極高知	東江	戸	高虎の弟	一〇〇、〇〇〇	桃配山	28	左翼第二陣
津田信成	東江	戸	高虎の弟	一三、〇〇〇	桃配山	39	第三陣









## (8) 国宝犬山城の存在は

### 貞泰ら無血開城のお陰

もし慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦の前哨戦で八月頃に、犬山城で徳川との戦があったならば、犬山城は戦場と化し炎上して、現在の国宝犬山城はなかった可能性も考えられます。これも東軍に味方して籠城・無血開城した貞泰らの行動の賜物だったと思っています。

## (9) 犬山城天守の築城年代について

平成三十一年（二〇一九）三月付の中日新聞記事に、国内最古とされてきた国宝重要文化財の丸岡城の天守建造時期が江戸時代の寛永年間（一六二四～四四年）だったことが分かり、文化庁によると一五九〇年代建立の松本城小天守のほか、一六〇一年の犬山城、一六〇六年の彦根城の順だという。

犬山城白帝文庫の筧真理子主任学芸員によると、

「犬山城の築城年代と変遷については諸説ありますが、昭和四十年に終了した解体修理の結果により、当初（天文期？）は二階二重、石川貞清もしくは関ヶ原合戦後の城主となった小笠原吉次の時代に三重目（三・四階）が増築、犬山成瀬家初代の成瀬正成の時代に南北面の唐破風を付加し、二重目屋根の破風（＝千鳥破

風）と妻壁位置を前方に出し、大棟の位置を下げて三重目の周囲に縁と高欄を廻らしたと考えられています。慶長六年（一六〇二）云々という説もいろんな本に書かれていますがその根拠は薄弱です。また石川貞清が金山城を移築したという説は、解体修理のときその痕跡が全く確認できなかったことから一般には否定されています。

さらに、城郭史からは現存の高石垣と白壁の建物は織豊系城郭の特徴であるため、十六世紀後半に（すでに建物があつたとしても）改築されたという主張もあります。

結局一概に言えないということですが、関ヶ原合戦のときは二重二階、もしくは改築されて三重四階だったことになりました。」



日本最古級の国宝犬山城天守  
2020年2月21日筆者撮影

## 犬山城歴代城主

web 犬山城より <https://inuyama-castle.jp/>

年代	城主・城大名	参考
天文6年(1537)	織田信康(織田信長の叔父)	
天文16年(1547)	織田信清(織田信康の子)	
永禄8年(1565)	織田信長の侵攻	織田信清、信長に攻められ犬山城落城
元亀元年(1570)	池田恒興(信長の乳兄弟)	
天正9年(1581)	織田信房(織田信長の子)	
天正10年(1582)	中川定成(織田信雄の家臣)	
※天正12年(1584)	豊臣秀吉が入城、戦後は加藤光泰(秀吉の家臣)	小牧・長久手の戦いで池田恒興(秀吉軍)が攻略
天正12年(1584)	武田清利(織田信雄の家臣)	秀吉、織田信雄に犬山城を返還
天正15年(1587)	土方雄良(織田信雄の家臣)	
天正18年(1590)	三好吉房(豊臣秀次の父)	
天正19年(1591)	豊臣秀勝(吉房の子)	
文禄元年(1592)	三輪吉高(吉房の義兄弟)	
文禄4年(1595)	石川光吉(秀吉の家臣)	関ヶ原の戦いまで城主
慶長5年(1600)	小笠原吉次(松平忠吉の家老)	関ヶ原の戦いの前哨戦で徳川軍(東軍)が攻略
慶長12年(1607)	平岩親吉(徳川義直の家老)	
慶長17年(1612)	平岩吉範(親吉の甥)	城代
元和3年(1617)	成瀬正成(尾張藩付家老)	二代将軍・徳川秀忠より犬山城を拝領
明治元年(1868)	251年間・成瀬氏城主9代続く	犬山藩成立

※ 天正12年 加藤光泰(加藤貞泰の父)は小牧・長久手の戦いで犬山城の在番

### (10) 犬山城に布陣した主な美濃武将について

● 『関ヶ原の歴史 No.327 2018年10月号』関ヶ原歴史を語る会発行  
「関ヶ原合戦図屏風の名場面」部分転載 提案 今井剛

一、**稲葉貞通** 関ヶ原の戦いでは、東軍に寝返り、郡上八幡城の救援に向かう。本戦後は加藤貞泰と共に西軍の長束正家が守る水口岡山城攻略で功を挙げ。美濃国八幡藩4万石から5万60石余の初代臼杵藩主となった。慶長8年(1603)57歳で死去した

二、**加藤貞泰** 東軍に寝返って井伊直政の指揮下に付く。美濃大垣城にて西軍と対峙後、関ヶ原の戦いでは黒田長政、竹中重門と共に岡山烽火場に布陣し、本戦では島津隊と戦う。本戦後は稲葉貞通と共に、水口岡山城攻略で功を挙げ、黒野城と4万石は安堵され、弟平内は美濃国内で3641石を賜り加増された。

三、**関一政** 関ヶ原では、東軍に寝返り、井伊直政隊に属して功を挙げ、関氏の故地である伊勢亀山に復帰を許された。慶長16年伯耆黒坂6万石に移封されている。慶長19年(1614)、大坂冬の陣、翌年の大坂夏の陣で共に京橋口を攻めて首級52を挙げるなどの活躍を見せた。



四、石川貞清 家康からの降誘を拒否して西軍に与し、居城の犬山城に稲葉貞通・典通父子、稲葉方通、加藤貞泰、関一政、竹中重門らと籠城した。

しかし東軍の中村一忠・一栄に攻められると、加勢の西軍将達は極秘に東軍の井伊直政に密書を送り、内応を約定して犬山城から引き上げた。貞清も、関一政に説得されて城を棄てるが、西軍本隊に合流。本戦では、宇喜多隊の右翼、口北野付近に陣し奮戦した。

改易され所領没収の上、死罪を申し渡される所、犬山籠城中に東軍に加担した木曾郷士らの人質を開放したことが評価され、池田輝政の働きかけにより、黄金千枚で除命された。

### (11) 加藤貞泰・戦後の事績

合戦後の加藤貞泰は、禄高四万石と黒野城は安堵となる。

織田秀信の岐阜城が廃城になり、徳川家康は長女亀姫の夫、奥平信昌に加納城の築城を命じ、加藤貞泰は普請奉行を命じられた。秀信領が加納藩に引き継がれ、加藤貞泰領も領地(村)の入替が行われた。

戦乱が収まり、領内の治水事業に取りかかり、慶長六年(1601)には揖斐川と長良川に囲まれた安八郡の墨俣や大明神村に洪水を防ぐための築堤を行う。

慶長七年(1602)には、石田三成の居城であった佐和山城が廃城になり彦根城の普請にも美濃の大名や旗本らと共に参加。慶長十三年(1608)には、岐阜城北西の長良川が三川に分流していた古々川を堰き止める築堤を行った。安八も含めこれらの堤は、領民から感謝され、左衛門尉の尉をとり「尉殿堤(じょうどのつみ)」と名づけられ後世まで引き継がれた。

慶長十五年(1610)、貞泰は城下町の発展を目的に、町屋敷に楽市の免許状を出し、諸役や税を五ヶ年免除の発令。

同年、城下の繁栄を目的に正木御坊など寺院を移した。しかし、まちづくり半ばで同年、伯耆国米子城へ二万石加増の六万石で国替えを命じられた。

国替えの理由は、領民の口伝によれば、長良川古々川を締め切る工事をしたが、加納藩主奥平氏に知られ、築堤を中止せざるを得なかった。また洪水の影響で、亀姫の化粧料近ノ島村に水が浸かり、亀姫の逆鱗に触れた為とも云うが定かではない。

貞泰は生涯で最も長い十六年間を美濃黒野で過ごした。



尉殿堤記念碑  
尉殿堤跡は岐阜市史跡  
則武新田天神社に2019年移築



安八町の尉殿堤  
安八町史跡



(12) 別冊歴史読本「野望! 武将たちの関ヶ原」 参戦武将 63 人の戦い 平成 20 年 (2008)

新人物往来社 発行より転載

### 竹中半兵衛の遺児

竹中重門は、今日では戦国時代の大軍師というイメージがすっかり定着してしまった竹中半兵衛重治の嫡男である。

重門が生まれたのは天正元年（一五七三）で、同七年六月に父重治が播磨三木城攻めの陣中に没した時、わずか七歳であった。同十年六月の本能寺の変では、重門の叔父の一人が信長の嫡男信忠とともに二条城で討死し、重治亡き後、竹中家を支えた叔父の久作も美濃地域での混乱に巻き込まれ戦死してしまった。幼い重門はその後見をいっきに失ってしまったことになる。

竹中家存亡の危機に手をさしのべたのは羽柴秀吉である。その秀吉への追慕の情が、後に重門をして秀吉の伝記『豊鑑』を著作せしめることになったのである。

重門の初陣は、天正十二年四月の小牧・長久手合戦で、同十六年四月には従五位下に叙任している。

関ヶ原合戦における重門の動向に強く影響を及ぼしたことが、ふたつある。ひとつは重門の領地が美濃地域の垂井にあったこと、そしてふたつめは重門の室が加藤光泰の娘であったことだ。

美濃岐阜城の主は織田秀信である。秀信の所領は現在の岐阜市域を中心とした十三万石

**竹中重門** 天正元年（一五七三）寛永八年（一六三二）。竹中半兵衛重治の子。豊臣秀吉に仕える。関ヶ原の戦いには東軍へ通じて密書を送り、小西行長を捕虜にする功をあげる。名古屋城普請に木曾山の材木伐採を奉行、大坂の陣にも出陣して豊後国府内二万石を領した。

西軍 ↓ 東軍

**土山公仁**  
岐阜市歴史博物館学芸員

ほどにすぎないが、織田家の嫡流ということもあり、美濃の領主たちは精神的な意味で秀信の与力だったともいえ、その動向が強い影響力をもっていた。

一方、加藤光泰は、文禄二年（一五九三）朝鮮在陣中に病没したが、石田三成とするとく対立し毒殺されたという説が流布するほどの三成嫌いで、関ヶ原合戦当時は、その跡を嗣いだ貞泰が美濃黒野城主だった。

### 犬山籠城

慶長五年（一六〇〇）七月二日、家康が主導した会津攻めに従軍するため越前敦賀を発した大谷吉継は、重門の居城岩手城にほど近い垂井に留まったまま動こうとせず、さまざまな憶測が流れた。『竹中系図』によれば、重門は加藤貞泰と協議し、その状況を逐一家康に報告していたという。

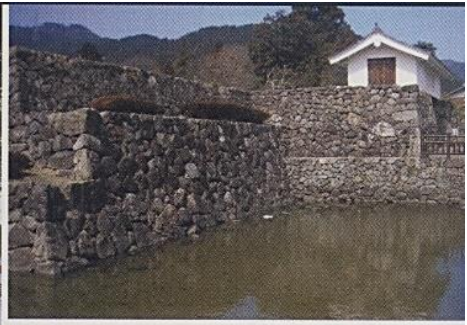
事実、貞泰は雑説のため出陣を延期する旨を家康に告げており、家康もそれを了承し、織田秀信と相談するよう七月二十日付の返書を出している。その秀信は、最終的に西軍に与することを決断し、美濃の領主たちの多くも西軍に加担することになったのである。しかしその一方で、加藤貞泰は弟光直を人質として家康のもとにつかわすなど、美濃衆はとうてい一枚岩といった状況ではなかった。

西軍の初期構想は、伏見城を攻略後、伊勢ルートと美濃ルートを制し、尾張で合流して





竹中重門と黒田長政の陣所跡 (関ヶ原町地域振興課提供)



竹中重門が築いた岩手城跡  
(岐阜県垂井町／垂井町教育委員会提供)

東方へ進出、尾張と三河の間で東軍と決戦するといふものであった。ところが、八月十四日に、会津攻めから反転してきた東軍先鋒隊の諸将が、福島正則の居城である尾張清須城に集結したため、防御ラインを美濃と尾張の国境である木曾川ラインまで後退させざるを

えなかつた。その拠点として重視されたのが、織田秀信の岐阜城と尾張の犬山城である。犬山城は、三成の娘婿でもあった石川貞清の居城であり、そこに竹中重門・加藤貞泰・稲葉貞通(美濃郡上八幡城主)・関一政(美濃多良城主)といった美濃の領主たちが援将として派遣されることになったのである。

## 犬山開城と関ヶ原の戦い

加藤貞泰は犬山に籠城してからも家康へ通報を続け、家康も八月十二日付で井伊直政・本多忠勝に書状を送り、犬山に籠城しているものの、人質を出してきた貞泰への対処を福島正則と協議するよう伝えている。犬山城に籠もるに西軍にあまり戦意がなかつたありさまは東軍へ筒抜けで、東軍先鋒隊は田中吉政ら一部を犬山城牽制に残しただけで、主力を岐阜城攻めのため安心して北上させることができたのである。

八月二十二日、東軍は木曾川まで迎撃に出てきた織田秀信の軍勢を一蹴すると、二十三日には無血開城に近い状況で岐阜城を占拠した。その翌日、井伊直政は犬山城に籠城している関一政・加藤貞泰・竹中重門に宛て書状を認めている。東軍がすでに岐阜城を攻略

し、その後巻として岐阜城の西方の合渡にまで出陣してきた石田三成勢を撃破したことを伝えたもので、犬山開城を暗に促したものであった。

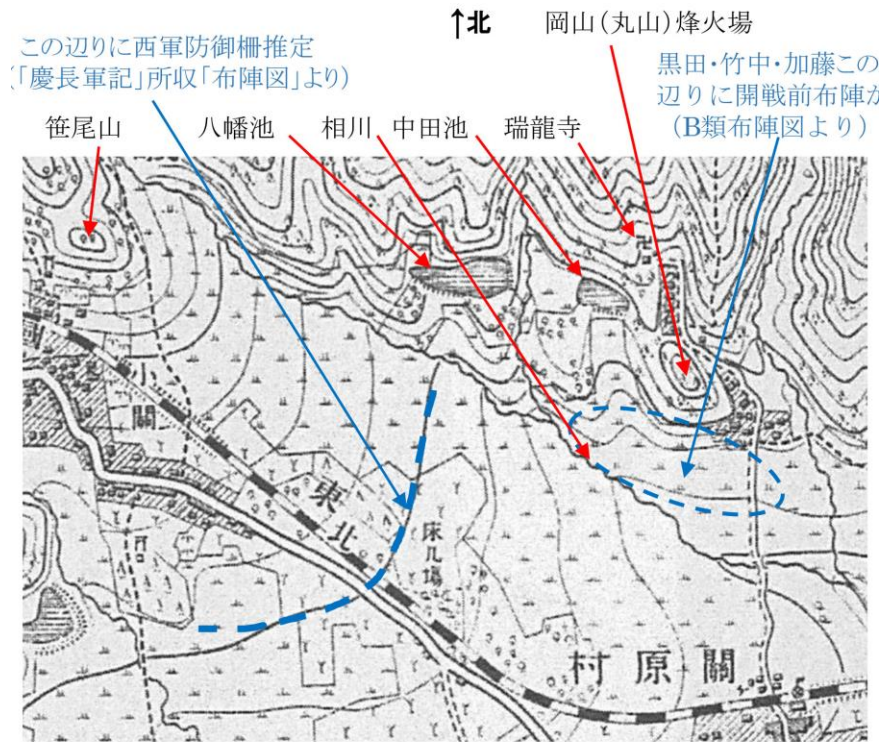
加藤貞泰と異なり、豊臣家への忠誠心も深かつた重門が、当初から家康に通じていたかは疑わしいが、犬山開城のとりまとめをしたのが重門と貞泰であったことは事実で、兩名からの報告をうけた家康は、九月三日付の書状でその忠節ぶりを褒めている。

その後、重門は岐阜に到着した家康本隊と合流し、九月十五日の関ヶ原本戦では、黒田長政とともに石田勢と戦って奮戦している。戦いに勝利した家康は、その激戦のあとも生々しい関ヶ原の戦場を去るにあたって、領地が近い重門に戦死者を弔うための首塚を造営させるとともに、戦乱で荒廃した神社の再建などを命じている。

西に向かつた東軍主力と同行せず、しばらく在地に留まつた重門は、その間に伊吹山中に逃亡していた小西行長を捕縛し、近江草津に進軍していた家康のもとに送りどけ、行長が帯びていた光忠の刀を改めて家康から下賜されている。

後に、重門の領内も関ヶ原の戦いで戦場となつたことなどを理由に、家康から千石の米を賜り、旧領も安堵された。現在、岐阜県史跡に指定されている竹中陣屋は、重門が築いた岩手城で、櫓門と石垣が現在も残っている。





明治27年(1894)測量 関ヶ原町地図(部分)  
大日本帝国陸地測量部発行  
「史跡関ヶ原古戦場保存管理計画策定報告書」92頁より転載



2018年4月現在の関ヶ原 Google Earthより転載

### (13) 岡山(丸山)烽火場の昔と現在

明治二十七年の地図では、笹尾山と丸山間は、一面水田で距離

約1000メートル。合戦当時は、どんな状況であったのか。丸山は関ヶ原を一望でき烽火場に相応しい地形。布陣図には小池村と相川間辺り、又は北国街道をまたいで、西軍の防禦柵が書かれている。現在は、岡山と相川間に関ヶ原バイパスが通っている。

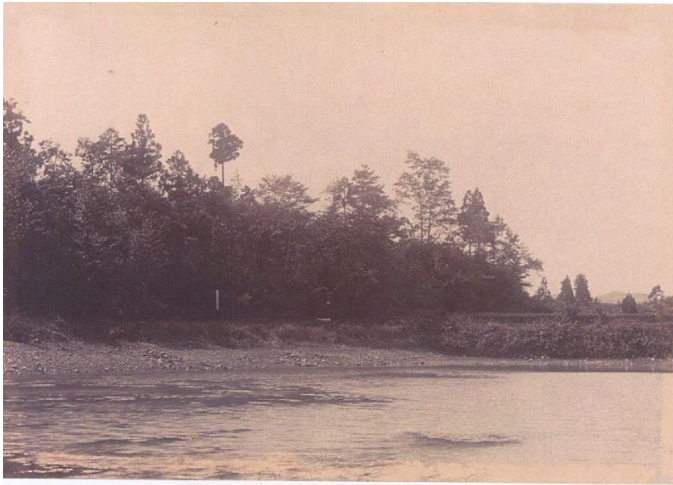


写真 73 丸山 岡山烽火場  
 岡山(丸山)烽火場  
 明治 39 年(1906)関ヶ原合戦 300 年祭の折に撮影  
 「史跡関ヶ原古戦場保存管理計画策定報告書」  
 から転載



中田池から望む岡山(丸山)烽火場  
 平成 27 年(2015)6 月 15 日筆者撮影



相川(合川)から望む岡山(丸山)  
 烽火場  
 この付近に布陣したと推定  
 平成 27 年(2015)6 月 15 日筆者撮影

明治二十七年の地図に、烽火場の北西に溜め池が二カ所ある。写真上は、中田池から南東側の岡山(丸山)烽火場を望んだ明治三九年の写真で、白い標柱は烽火場への入口のようである。写真中は、現在の丸山西側を中田池から撮る。土手上の道突き当たりが入口で、右側に丸山狼火場と北野神社へ、直進すると北野神社と瑞龍寺に行ける。東側の登り口二カ所と三ルートあり。岡山の金比羅神社(宇岡山)は讃岐の生駒一正が、関ヶ原に陣をしき、琴平神を祭って戦ったのを、戦後村人が貰うけて此地に祀ったと伝える。



烽火場からの眺望  
 令和 2 年 2 月 28 日撮影



丸山狼煙場  
 黒田長政  
 陣所古跡  
 竹中重門

丸山狼火場石柱  
 明治 39 年建立  
 平成 27 年(2015)1 月 16 日筆者撮影

第八部  
関連資料  
2



## ■ 徳川方に味方した理由の新説

### ◇ 通説

加藤家文書『大洲秘録』御家伝 貞泰(27頁)に「貞泰石田に恨あるにより関東の御味方となり」と記されている。

なぜ恨みがあるのかは、父加藤光泰が文禄二年(1593)朝鮮出兵(文禄の役)において軍監の役で甲斐国から一千名で出兵した。明軍との戦のなか石田三成らと戦術で対立となり、この時期に朝鮮で死去した。三成による毒殺説と病死説があるが病死説が正しいようである(同じ軍監で朝鮮に渡った前野長康の「武功夜話」には病死の様子が記されている)。

また三成が、光泰との不和により秀吉に上申した為、二四万石が四万石と大幅な減封で黒野へ国替えになったとも云う。

しかしこれらは徳川時代ならではの伝記で、石田三成は、恨まれるような人物ではなかったようでもある。

### ◇ 筆者新説・関白秀次事件の影響

徳川に味方したのは、当時の情勢や世の動向による要因も大いにあり、父光泰の死去原因や、減封・国替えが恨みのひとつかも知れない。しかし、それ以外に徳川に味方した別の理由があるようである。それは当時、触れられたくない事件があった。

関ヶ原合戦五年前の文禄四年(1595)、世継であった関白秀次が謀反の疑いをかけられ、秀吉の命で高野山に追放され自害。側近たちも割腹。秀次の正妻や妻子三十余人が京の三条河原で斬殺

された痛ましい事件がある。この出来事について、秀次にまつわることは、秀吉の命で聚楽第の解体などことごとく抹消された。秀次事件は、太閤秀吉の晩年の異常な行動からの出来事で、太閤の側近、石田三成らは秀吉の命にやむを得ず従ったのであろう。加藤家にも秀次事件は、間接的な影響があり、秀吉亡き後、三成らにも少なからず反感を抱いていたと想像する。

秀次事件は甲斐から黒野に国替えとなり二年目。黒野城築城中、改田村山田の城(現教徳寺)に仮住まいのときに起きた。関ヶ原合戦の五年前の出来事である。

秀吉が命じた関白秀次の側近(家老)に、一柳右近(可遊)(伊勢国桑名城主六万石)の名がある。『北籐録』や『大洲秘録』の加藤家系譜と、一柳家の「謎の武将 一柳 右近大夫可遊」ひしつやなき児玉和男著伊予史談会309号(1998)の系譜を合わせて調べると、当時両家は一族同様の姻戚関係であった。

右近は朝鮮の陣から帰国後、秀次の後見役に命じられていた。秀次事件後、ぬれぎぬを着せられた右近は「江戸の大納言殿(徳川家康)に御預かり」になり賜死、切腹させられた。連座切腹とも云うが妻の其の後は詳らかでない。家康に配慮されたかも分からない。

右近らは、諸記録から抹殺されてしまった。

『北籐録』加藤家系譜(233頁)光泰の姉は、「女子〓右近(濃州今泉橋詰人、姓氏・諱不レ伝)室。母姓氏不伝」としか記されていない。

## ◇ 一柳右近(可遊)とは

美濃のひとつやみき一柳氏は、伊予国の河野氏を祖とし、河野通直の子みちなお宣高と弟通方が美濃に来て土岐頼芸に仕えた。頼芸から一柳の姓を与えられ、宣高は厚見郡今泉村西野(現岐阜市西野町)に居を構え三百貫を領した。一柳宣高の子は直高と藤兵衛。直高の子が直末(市助)と直盛。藤兵衛の長男が一柳右近(大夫可遊)で西野に生まれる。

右近は、斎藤道三側に属し、斎藤義龍と長良川で戦う。後に羽柴秀吉に仕え、従兄弟の一柳市助と共に秀吉の黄母衣衆七人の一人。近江国長浜城付近に領地。天正十八年(1590)小田原の役に参加。天正十九年(1591)に伊勢国桑名六万石の領主となり、桑名城を築城。

文禄の役では朝鮮に渡航、船奉行を務める。朝鮮での加藤光泰遺言状に「委細の儀、一柳右近方へ申渡候」とあり、光泰の義弟でもある。帰国するまで右近が光泰部隊を統率した。帰国後は関白豊臣秀次の後見人になる。

## ◇ 右近と加藤家は一族同様

- 加藤家と一柳家は、加藤光泰の父景泰かげやすの頃から濃い姻戚関係。
- 右近の妻は、加藤光泰の姉(貞泰の叔母)。
- 右近の妹は、光泰の妻(貞泰の母)。
- 右近の長男は、加藤信濃守光吉(加藤光泰に養子)、黒野城下では重臣の家老。
- 右近の長女は、光泰家臣の児玉太郎右衛門(甲府奉行二、八

〇〇石で黒野城にも在城)の妻。

## ◇ 竹中家一族も秀次事件の被害者

犬山城に加勢し、貞泰と共に徳川に味方した竹中重門(父半兵衛)の妻は貞泰の姉である。

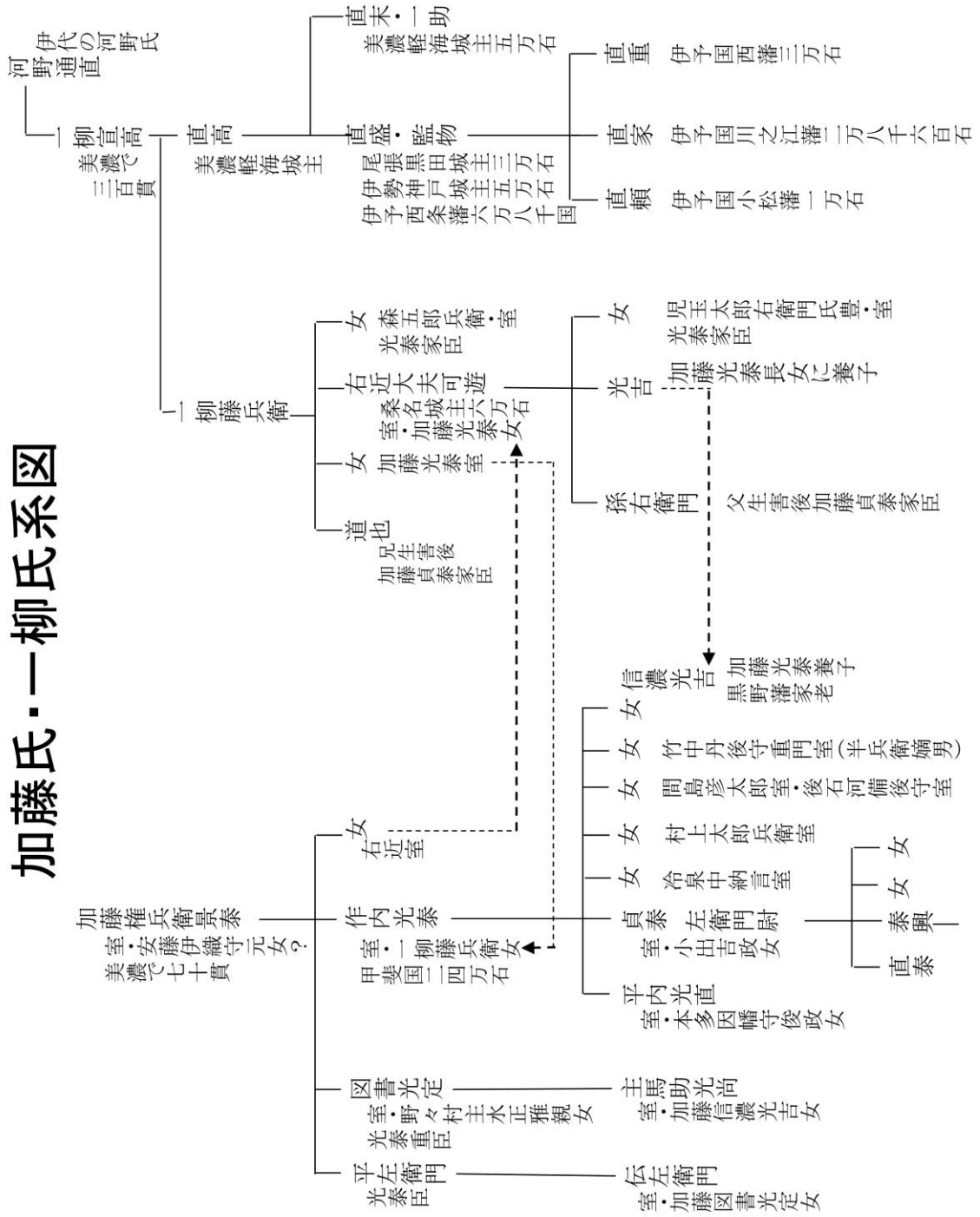
その竹中重門の一族、竹中重定與右衛門は秀次に仕える。娘おちよの於長は親戚でもある山内一豊の推薦もあり、聚楽第に入りお目付役で秀次に宮仕えし、秀次四男土丸君を誕生していた。秀次事件で母子(十八才・六ヶ月)ともども処刑を言い渡され生害。誠に無念な出来事であった。

## ◇ 秀次事件後

- 右近の弟一柳道也は、秀次公生害の時剃髪入道し、黒野に於いて貞泰に仕える。(黒野城下の家中屋敷図や慶長十四年御縄打水帳屋敷に道也の名あり)
- 右近の二男一柳孫右衛門(信濃の弟)は、父右近が生害の後、黒野に於いて貞泰に仕えた。

当時、加藤家・一柳家や竹中家の立場からすれば、この機会に仇を打ちたい思いも少しは背景にあったのではないだろうか。尚、秀次事件で被害者となった殆どの武将は、関ヶ原合戦において、徳川に味方したとも云う。

# 加藤氏・柳氏系図



引用文献 加藤氏は北藤禄「伊予史談会双書第6集より抜粋・編集」  
 一柳氏は謎の武将「柳右近可遊」伊予史談会309号より引用 編集  
 美濃国諸家系譜「安藤氏」(歴史伝承フォーラム 田中豊)より





## 貞泰公の関ヶ原まとめ

関ヶ原合戦の前哨戦から本戦に至る史料を時系列に並べることで、加藤貞泰の大凡の行程が分かってきました。

慶長五年（一六〇〇）六月一五日、家康が会津上杉討伐を諸大名に出兵を命じたが、貞泰は、岐阜城主織田秀信の去就から共に同行ができなかった。代わりに弟平内（十六歳）を人質に江戸へ送った。石田方へは、貞泰より叔父の加藤図書娘を貞泰の姫と偽り人質に、竹中重門も一人を送る。（兩人七、八歳の小児）

大坂方の指示で、石川貞清の犬山城に美濃の武将衆と共に入城。その頃、飛札にて江戸の家康に忠誠を誓う書状を取り交わす。

犬山城加勢衆は、七七〇〇人余と岐阜城守備隊六五〇〇の兵力より多かった。貞泰は加勢衆を説得し、徳川に味方するよう行動した。貞泰は二十歳の若輩、重門よりも八歳も年下。恐らく重臣の図書や信濃の支えと信頼も大いにあったと思われる。

犬山城に籠もる戦術で徳川軍の犬山城攻めはなくなり、八月二三日の岐阜城攻めは僅か一日で落城した。徳川方指示で、犬山城を出て、大垣城の押さえに岐阜と大垣城間の本田に陣を進めた。

家康は、岐阜城陥落の報で、九月一日、三万の兵で江戸を出発し、十三日岐阜に入る。翌十四日朝、家康は、貞泰領内木田の舟渡しを通り、芝原北方を経て正午頃、赤坂の岡山本陣に着陣。家康は、諸将と謁見。貞泰も竹中重門・関一政等と共に岡山に出向

き拝謁し忠義を約束。家康から関ヶ原への出陣を命ぜられる。

十五日早朝、岡山（丸山）烽火場の麓に黒田長政・竹中重門と共に布陣。朝八頃に開戦。貞泰は烽火場の麓、宝有地辺りから第二陣、或いは三陣に加わり、中筋の島津隊と戦闘。小早川秀秋の裏切りもあり、僅か数時間の激戦で決着した。

徳川方勝利の午後、水口城攻めを命ぜられ、翌日、佐和山城へ同行。水口城を攻め無血開城。その後、大坂に着き家康から御暇を下され、黒野へ帰る。

貞泰は、前哨戦の頃から徳川に味方し、本戦でも先陣で働き貢献した。戦後の論功では、禄高四万石と黒野城は安堵。弟平内は、美濃で新たに三六四一石の旗本を拝領、加藤家は加増に値する。

家康は、慶長六年（一六〇一）岐阜城を破棄し天下普請で加納城の築城を命じた。貞泰は普請に参加。慶長八年（一六〇三）からは、彦根城の天下普請に二八大名と九旗本が命じられた。貞泰と旗本の平内も普請に参加。領外での普請と共に、領内の統治や城下の整備、治水との戦いは、大変過酷で厳しい黒野城時代であったものと想像される。

貞泰は、生涯で最も長い十六年間滞在した黒野城を去り、慶長十五年（一六一〇）伯耆国米子城。その後、伊予国大洲城に国替。元和九年（一六三三）江戸屋敷で四十四歳の生涯を終えた。

関ヶ原の合戦で勝運を得た加藤家は、貞泰く幕末の泰秋まで十三代、大洲藩六万石大名で二百五十年間永続することができた。



10日	7日	5日	3日	9月1日	28日	26日	25日	24日	23日	22日	19日	16日
毛利輝元、吉川広家、伊勢より美濃へ、南宮山に着陣 家康、熱田着。秀忠、上田城攻撃中止、美濃へ向かう		家康、駿河清見寺着	大谷吉継ら越前衆、山中村に布陣 家康、小田原着	家康、岐阜城攻略の報を受け江戸城出發 犬山城加勢の八幡城主稲葉貞道と前八幡城主遠藤慶隆、 金森可重が八幡周辺で激突。両軍翌日和睦、稲葉は東軍に 転ずる		東軍、大垣城包圍戦開始	犬山城主石川光吉降伏	三成、近江勢田を守る熊谷直盛らを大垣に移動させる	黒田長政・藤堂高虎、田中吉政ら木曾川を渡り呂久川で交戦 毛利輝元、長束正家ら安濃津城攻略	池田輝政、木曾川を渡り織田秀信軍を破る(米野の戦い) 福島正則、木曾川下流から渡河して竹ヶ鼻城攻略	徳永寿晶、市橋長勝らが高木盛兼の高須城攻略	西軍丸毛兼利の福束城を徳永寿晶、市橋長勝らが攻め落城 させる
■ 本田に陣					■ 犬山城開城後の駐留				■ 犬山城に籠城			
		5日 家康から貞泰に礼状。犬山の問題、貞泰殿の知恵の働きで解決したこと 大変満足です。先頭にたつての参陣すばらしいことです。 清見寺に着きましたが、やがてそちらに着陣しますと返書	3日 福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政から、貞泰と揖斐の清水城主 稲葉通重に、牛牧村、本田村に布陣して大垣城の夜討等を命ずる		28日 本多忠勝から貞泰に書状。早々に本多陣所に来るように伝える	28日 井伊直政から加藤・関・竹中に、人質の事と、犬山城内の申し出の通り家 康に伝えた。約束の通り忠節を誓い、遅れないよう参陣を指示する	25日 貞泰の叔父加藤図書が山内一豊へ書状。石川貞清も降伏せざるを得な いので、近々城を出ると伝える。このことについては本多忠勝と井伊直政 から約束を交わしたので満足の報	24日 江戸を出た。速やかに城を出て帰順せよと指示	24日 以降 家康方の禁制、岐阜など周辺に発行	22日 朝、犬山城加勢衆犬山城を開城・駐留	15日 平内、小山の陣所で家康に拜謁。永井直勝、大久保長安から300人 分扶持と伝馬十五疋賜う。保養のため箱根温泉で療養	



10月1日	27日	24日	21日	19日	17日	15日	14日	12日	11日
三成ら京都六条河原にて処刑	家康、大坂城西の丸へ入る	毛利輝元、大坂城西の丸より撤去する	三成、大津の陣所へ護送	三成、伊香郡古橋村で捕縛される	春日中山にて小西行長捕縛される	家康、近江八幡より草津に入る	三成の佐和山城陥落	昼頃、西軍敗走し戦闘終わる 午後5時頃、家康、首実検。諸将を引見する 夜、小早川ら佐和山城攻めに向かう	三成の佐和山城陥落
						関ヶ原合戦		本田に陣	
						15日		14日	
						<p>夜、西軍大垣城より南宮山南から関ヶ原へ移動 午前2時ごろ、西軍が大垣城からの移動を知った家康は、関ヶ原への布陣を命ず 明け方、東軍関ヶ原へ到着。家康は桃配山に本陣を置く 午前8時頃、戦闘の火蓋切られる 小早川秀秋、東軍に寝返り</p>		<p>徳川主力は河渡から赤坂へ、家康は朝岐阜を發ち木田尻毛の舟渡しを渡り正午頃、赤坂着、岡山に布陣 小早川、松尾山に着陣 中村一榮、島左近と杭瀬川で戦い敗北</p>	
						15日		12日	
						<p>竹中重門、東軍の道案内 岡山烽火場附近に黒田長政・竹中重門・加藤貞泰着陣 加藤平内ら旗本衆は、桃配山の家康本陣前に布陣 二番隊に黒田長政・細川忠興・稲葉貞通・寺沢広高・加藤貞泰・一柳監物など 細川忠興・稲葉貞通・加藤貞泰は島津隊と取り結ぶ 同日午後、東軍勝利後、江州水口の城攻めを命じられ移動</p>		<p>家康、岐阜着</p>	
						17日		11日	
						<p>佐和山城攻めの家康にお共 この頃、貞泰・稲葉貞通の兩人、水口城攻め。城主長束正家、城を明け渡し合戦に至らず</p>		<p>本多忠勝から貞泰に書状と柿のお礼。家康が明日岐阜に来られるので来て下さい。取り次ぎしますのでご安心下さい。又清洲宛て書状のお礼 12日又は13日 貞泰、本田に陣中、岐阜で家康に拝謁か</p>	
						17日		11日	
						<p>貞泰、この頃大坂までお供。大坂にてお暇下され黒野に帰る</p>		<p>徳川主力は河渡から赤坂へ、家康は朝岐阜を發ち木田尻毛の舟渡しを渡り正午頃、赤坂着、岡山に布陣 小早川、松尾山に着陣 中村一榮、島左近と杭瀬川で戦い敗北</p>	

# 黒野城主 加藤左衛門尉貞泰・関ヶ原合戦の足取り

慶長5年  
(1600年)



「関ヶ原合戦図屏風」の部分  
岐阜市歴史博物館蔵

9月3日付 貞泰・竹中重門宛 徳川家康書状  
向方(甲斐)加藤貞泰(徳川氏)相模  
家康は、合戦までの7、8、9月、諸將に  
約180通の手紙を送った。  
この内貞泰宛5通は諸将の中で8番目。  
貞泰の動向、犬山城の重要性が伺える。

尾張国  
犬山城

尾張国  
美濃国

近江国  
安土城跡

近江国  
水口城

近江国  
甲賀

至摂津大坂城

黒野城  
伊賀川  
木方  
北条  
五右衛門  
尾川  
櫻尾川

本田  
本田城跡(本田村)  
本田

大垣城  
赤坂  
今須川  
今須

岡山城  
赤坂  
相山  
今須川  
今須

佐和山城  
米原  
天野川  
米原

水口城  
水口城(甲賀市公式サイトより)

甲賀

岩手城  
赤坂岡山陣跡  
(家康に貞泰より手紙)  
Googleより

岡山城  
伊吹山  
相山より

合戦場  
岡山(丸山) 砲火場より望む

合戦場  
岡山(丸山) 砲火場より望む

合戦場  
岡山(丸山) 砲火場より望む

合戦場  
岡山(丸山) 砲火場より望む

合戦場  
岡山(丸山) 砲火場より望む

加藤貞泰公肖像画  
大洲市歴史博物館蔵

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋など

加藤家の家紋など

加藤家の家紋など

加藤家の家紋など

加藤家の家紋など

石田方から徳川方に味方した理由  
加藤家の祖家伝に「貞泰、石田に恨み  
あるにより関原の御方となり」  
とあり。  
○通説  
●父光泰が朝鮮出兵(文禄の役)中に  
石田三成らと軍議で対立中に死去。  
三成による遺恨が流布。  
(病状が正しいようである)  
●甲斐国24万石から黒野4万石への  
降封と国替え。  
○新説  
秀次事件で加藤家親族の一部が近江  
三郡の策により切腹させられたのみ。  
貞泰が石田方の犬山城加勢衆を説得。

犬山城明け渡しの主役  
貞泰が石田方の犬山城加勢衆を説得。

戦後の論功賞  
○貞泰は、徳川に味方し貢献した功績  
で黒野城と領地を没収。  
○加藤家は、関ヶ原合戦に参  
陣し功賞を取る。慶長7年、黒野、  
安八、不殿三部の約3,641石の采地を  
賜う。原本加藤氏は幕末まで断絶。  
○加藤家は、弟方目めると加増になる。

戦後の論功賞  
○貞泰は、徳川に味方し貢献した功績  
で黒野城と領地を没収。  
○加藤家は、関ヶ原合戦に参  
陣し功賞を取る。慶長7年、黒野、  
安八、不殿三部の約3,641石の采地を  
賜う。原本加藤氏は幕末まで断絶。  
○加藤家は、弟方目めると加増になる。

戦後の論功賞  
○貞泰は、徳川に味方し貢献した功績  
で黒野城と領地を没収。  
○加藤家は、関ヶ原合戦に参  
陣し功賞を取る。慶長7年、黒野、  
安八、不殿三部の約3,641石の采地を  
賜う。原本加藤氏は幕末まで断絶。  
○加藤家は、弟方目めると加増になる。

戦後の論功賞  
○貞泰は、徳川に味方し貢献した功績  
で黒野城と領地を没収。  
○加藤家は、関ヶ原合戦に参  
陣し功賞を取る。慶長7年、黒野、  
安八、不殿三部の約3,641石の采地を  
賜う。原本加藤氏は幕末まで断絶。  
○加藤家は、弟方目めると加増になる。

戦後の論功賞  
○貞泰は、徳川に味方し貢献した功績  
で黒野城と領地を没収。  
○加藤家は、関ヶ原合戦に参  
陣し功賞を取る。慶長7年、黒野、  
安八、不殿三部の約3,641石の采地を  
賜う。原本加藤氏は幕末まで断絶。  
○加藤家は、弟方目めると加増になる。

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

加藤家の家紋 蛇の目紋

注意：地図は、現在の地形、河川名称です。  
作成 2015.10・追記 2017.05.21 黒野城と加藤家研究會 河口町三

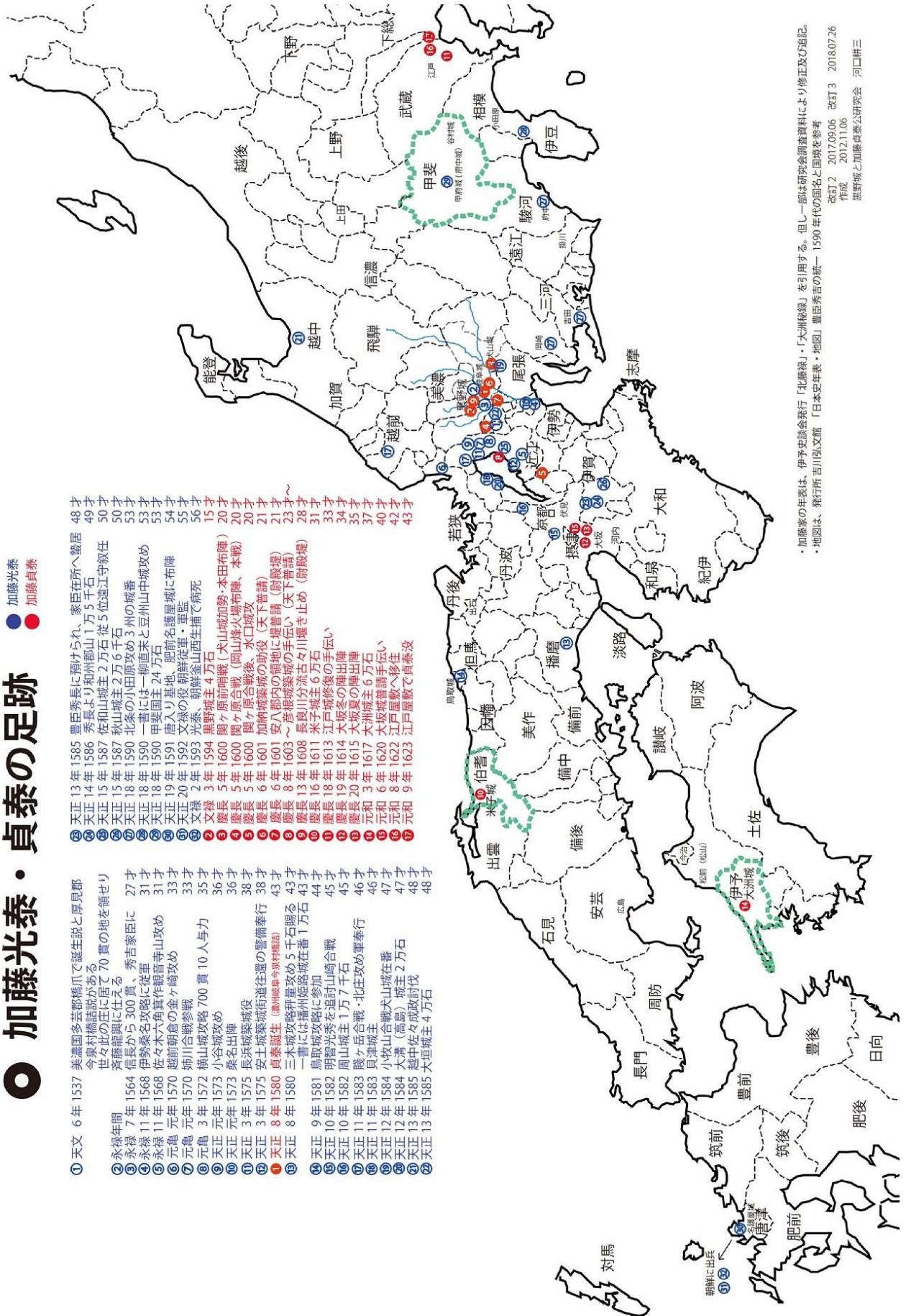


# 加藤光泰・貞泰の足跡

● 加藤光泰  
● 加藤貞泰

- ① 天文 6年 1537 美濃国多芸郡橋爪で誕生説と厚見郡今泉村橋詰説がある。世々此の庄に居て70貫の地を領せり
- ② 永禄7年 1564 斎藤龍圖に仕える
- ③ 永禄7年 1564 信長から300貫、秀吉家臣に
- ④ 永禄11年 1568 伊勢桑名攻略に従軍 31才
- ⑤ 永禄11年 1568 佐々木六角真作頼吉寺山攻め 31才
- ⑥ 元亀元年 1570 越前朝倉の金ヶ崎攻め 33才
- ⑦ 元亀元年 1570 姉川合戦参戦 33才
- ⑧ 元亀3年 1572 横山城攻略 700貫 10人 与力 35才
- ⑨ 天正元年 1573 小谷城攻め 36才
- ⑩ 天正元年 1573 桑名出陣 36才
- ⑪ 天正3年 1575 長浜城築城役 38才
- ⑫ 天正3年 1575 安土城築城街遣往還の警備奉行 38才
- ⑬ 天正8年 1580 貞泰誕生 (彦根城今取村橋詰) 43才
- ⑭ 天正8年 1580 三木城攻略 糧量攻め 5千石 賜る 43才
- ⑮ 天正9年 1581 鳥取攻略に参加 44才
- ⑯ 天正10年 1582 明智光秀を討討山崎合戦 45才
- ⑰ 天正10年 1582 岡山城主 1万7千石 45才
- ⑱ 天正11年 1583 幾ヶ岳合戦・北庄攻め 軍奉行 46才
- ⑲ 天正11年 1583 貞津城主 46才
- ⑳ 天正12年 1584 小牧山合戦 犬山城主 在番 47才
- ㉑ 天正12年 1584 大溝 (高島) 城主 2万石 47才
- ㉒ 天正13年 1585 越中佐々成政討伐 48才
- ㉓ 天正13年 1585 大垣城主 4万石 48才

- ㉔ 天正13年 1585 豊臣秀長に預けられ、家臣在所へ蟄居 48才
- ㉕ 天正14年 1586 秀長より和州郡山 1万5千石 49才
- ㉖ 天正15年 1587 和州郡山城主 2万石 従5位 遠江守 叙任 50才
- ㉗ 天正15年 1587 秋山城主 2万6千石 50才
- ㉘ 天正18年 1590 北条の小田原攻め 5州の城番 53才
- ㉙ 天正18年 1590 一書には一柳直末と豆州山中城攻め 53才
- ㉚ 天正18年 1590 甲斐国主 24万石 54才
- ㉛ 天正19年 1591 唐入り基地、肥前名護屋城に布陣 55才
- ㉜ 天正20年 1592 文禄の役 朝鮮従軍・重監 55才
- ㉝ 文禄2年 1593 光泰 朝鮮釜山西生浦で病死 56才
- ㉞ 文禄3年 1594 黒野城主 4万石 15才
- ㉟ 慶長5年 1600 関ヶ原前哨戦 (犬山城加勢・本田布陣) 20才
- ㊱ 慶長5年 1600 関ヶ原合戦 (岡山烽火場布陣・本戦) 20才
- ㊲ 慶長5年 1600 関ヶ原合戦後、水口城攻 20才
- ㊳ 慶長6年 1601 加納城築城の助役 (天下普請) 21才
- ㊴ 慶長6年 1601 安八郡内の領地に豊後請 (討敵場) 21才
- ㊵ 慶長8年 1603 ~ 豊後城築城の手伝い (天下普請) 23才
- ㊶ 慶長13年 1608 長良川分流血々々川堰き止め (尉殿堀) 28才
- ㊷ 慶長16年 1611 米子城主 6万石 31才
- ㊸ 慶長18年 1613 江戸城修築の手伝い 33才
- ㊹ 慶長19年 1614 大坂冬の陣出陣 34才
- ㊺ 慶長20年 1615 大坂夏の陣出陣 35才
- ㊻ 元和3年 1617 大洲城主 6万石 37才
- ㊼ 元和6年 1620 大坂城普請手伝い 40才
- ㊽ 元和8年 1622 江戸屋敷へ移住 42才
- ㊾ 元和9年 1623 江戸屋敷で貞泰没 43才



・加藤家の年表は、伊予史談会発行「北條線・大洲線」を引用する。但し一部は研究会調査資料により修正及び追記。  
 ・地図は、発行所 吉川弘文館「日本史年表・地図」豊臣秀吉の統一 1590年代の国名と国境を参考  
 改訂2 2017.09.06 改訂3 2018.07.26  
 作成 2012.11.06  
 豊野城と加藤貞泰公研究会 河口耕三



# 黒野城の歴史

室町		織豊時代		江戸時代		徳川外様大名		大洲	
天正八	一五八〇	秀吉、三木城陥落							
十	一五八二	本能寺の変・山崎の合戦							
十二	一五八四	小牧山合戦							
十八	一五九〇	小田原北条降伏、天下統一							
十九	一五九一	岐阜城主に豊臣秀勝 肥前名護屋城築城開始							
文禄元	一五九二	岐阜城主に織田秀信 文禄の役。伏見城築城開始							
二	一五九三	秀頼誕生							
三	一五九四	伏見城完成、秀吉入城							
四	一五九五	関白豊臣秀次事件							
五	一五九六								
慶長二	一五九七	慶長の役（朝鮮出兵）							
三	一五九八	秀吉、伏見城で死去							
四	一五九九								
五	一六〇〇	上杉討伐・岐阜城落城 関ヶ原の合戦							
六	一六〇一	加納城築城開始							
七	一六〇二								
八	一六〇三	徳川家康、江戸幕府開く							
九	一六〇四								
十	一六〇五								
十一	一六〇六								
十二	一六〇七								
十三	一六〇八								
十四	一六〇九								
十五	一六一〇								
十九	一六一四	大坂冬の陣							
二十	一六一五	大坂夏の陣・豊臣氏滅亡							
元和二	一六一六	家康死去							
三	一六一七								
室町		織豊時代		江戸時代		徳川外様大名		大洲	
						豊臣政権大名		徳川外様大名	
						黒野城主		加藤貞泰	
						貞泰、黒野に転封、黒野城主四万石 従五位下 左衛門尉貞泰叙任		貞泰、石田方犬山城に加勢。加勢衆を徳川方に導く。関ヶ原合戦参加	
						貞泰親族、秀次事件で被害被る		貞泰、加納城普請助役。安八郡で堤修復	
						黒野城ほぼ完成		貞泰の弟平内、濃州で三千六百石拝領	
						貞泰、黒野城に入城		三之丸搦手土塁と外堀築造	
								貞泰、彦根城の普請に加わる	
								貞泰、長良川に耐殿堤を築堤	
								貞泰、領内の検地実施	
								貞泰、黒野城下に築市。正木坊を移転	
								伯耆国米子に転封、米子城主六万石	
								貞泰、左近大夫将監に改任	
								貞泰、大坂冬の陣に出陣	
								貞泰、大坂夏の陣に出陣	
								貞泰、伊予国へ転封・大洲城主六万石	

## 黒野城跡



「黒野城跡」と城下町全景

日本ドローン安全飛行推進協会撮影

黒野城は文禄3年（1594）、豊臣秀吉の命で、父光泰（甲斐国 24 万石）の家督を相続した加藤貞泰（15 才）が、4 万石に減封・国替えになり黒野城を築いた。一代 16 年間在城した。

平城で本丸を中心に二の丸、三の丸と三重の堀に囲まれた輪郭式の曲輪。規模は東西約 1000 m、南北約 800m。外堀の土塁は、防御に適した凹凸形状の横矢構造。要所には門、神社や寺院が風水思想で配置されていた。本丸の土塁と堀や一部の外堀遺構が現存する。



「黒野城跡」岐阜市史跡

本丸跡は約 110m 四方の方形。その土塁は高さ約 5m、幅約 15m の堀に囲まれ、昔の面影を残している。入口は枳形虎口で織豊系城郭の特徴がある。城門南側の土塁・公園・橋は、昭和時代に造成されている。発掘調査で枳形虎口に石垣遺構や豊臣にゆかりの菊丸瓦が出土。



# 研究会の「関ヶ原」活動

## 歴史案内看板(電柱)協賛

岐阜新聞 2016年(平成28年)10月22日 土曜日 地域版 22

### 「黒野のお殿様」知って 一代限りの城主・加藤貞泰

岐阜市の団体 関ヶ原町に説明看板

戦国末期から約15年だけ岐阜市黒野地区に存在した黒野城と一代限りの城主加藤貞泰を顕彰する市民団体が、関ヶ原古戦場跡のある不破郡関ヶ原町に、城主関ヶ原お殿様のあざなを模した説明看板を設置した。メンバーは「東軍側で参陣した黒野のお殿様の認知を高め、と期待している。(古家政徳)

市民団体は「黒野城」を原典で「岡山烽火」と加藤貞泰公研究会「過」に布陣したことを(河口研三倉)。加広めよと、電柱の広とされる付近に、黒野城の案内看板を新設した。研究会では「黒野

関ヶ原町では、町と中部電力などが連携し電柱の広告看板に「関ヶ原合戦」に加わった武将の紹介や豆知識、クイズなどを載せる取り組みを進めている。

また、地元の黒野城跡でも月中旬、外堀の土塁が築かれたこととされる付近に、黒野城の案内看板を新設した。研究会では「黒野

「黒野のお殿様」の説明看板を出した「黒野城と加藤貞泰公研究会」のメンバー(不破郡関ヶ原町)

加藤貞泰  
加藤光泰の嫡男で美濃黒野城主の貞泰は、義兄の竹中重門と共に東軍に属した。本戦では黒田・竹中隊らと岡山烽火場に布陣し東軍の勝利に貢献。



### 烽火場に加藤貞泰「蛇の目紋」旗

## 紙芝居『関ヶ原』制作・上演

中日新聞 2018年(平成30年)8月3日(金曜日)

### 黒野城主 加藤貞泰「関ヶ原」の活躍

#### 住民有志が紙芝居に

岐阜市黒野地区在住の住民有志(約25人)が、黒野城跡(黒野山)で紙芝居の制作・上演を行った。紙芝居は、黒野城の歴史や加藤貞泰の活躍を描いた。制作には、黒野城跡の歴史を伝える黒野山公園の歴史資料館が協力した。

紙芝居の制作には、黒野山公園の歴史資料館が協力した。紙芝居は、黒野城の歴史や加藤貞泰の活躍を描いた。制作には、黒野城跡の歴史を伝える黒野山公園の歴史資料館が協力した。

9日お披露目会 前哨戦の新説も

このお披露目会では、研究会の歴史資料に基づき、前哨戦の新説も紹介された。研究会では、黒野城跡の歴史を伝える黒野山公園の歴史資料館が協力した。



## 「関ヶ原秋の武将イベント」初参加



2019. 10. 19 古田肇岐阜県知事と記念写真



引用文献

(順不同・敬称略)

史料(刊本)

- 〔岐阜県史〕史料編 古代・中世一
- 〔岐阜市史〕通史編 近世
- 〔北藤録〕伊予史談会双書第6集
- 〔大洲秘録〕伊予史談会双書第7集
- 〔愛知県史〕資料編13
- 〔慶長前記〕
- 〔愛知県史〕通史編上巻
- 〔慶長見聞記〕
- 〔犬山里誤記〕
- 〔関ヶ原町史〕通史編上巻
- 〔不破郡史〕上巻 竹中家文書
- 〔穂積町史〕通史編
- 〔池田町史〕通史編
- 〔武家事紀〕中巻 山鹿素行先生全集刊行会(1916)
- 〔関ヶ原大條志〕三・四 享保20年(1735)
- 〔国史大系 徳川実記〕第二編 吉川弘文館
- 〔石田軍記 全〕国史研究会 大正3年(1914)
- 〔関ヶ原合戦史料集〕藤井治左衛門著 昭和54年(1979)
- 〔慶長見聞書〕
- 〔石川忠総留書〕
- 〔大垣藩地方雑記〕
- 〔谷川七左衛門覚書〕
- 〔加藤家文書〕
- 〔内府公御陣場覚書〕
- 〔徳川十五代史〕
- 〔続々群書類従第三〕明治40年 国書刊行
- 〔天下人の時代〕平成27年度春季特別展 岐阜県博物館友の会(2015)
- 〔月刊西美濃わが街2009一月号〕庶民の関ヶ原合戦
- 〔関ヶ原合戦を読む 慶長軍記 翻刻・解説〕井上泰至編(2019)
- 〔関原軍記大成〕第2・3巻 国史研究会 大正5年(1916)

- 〔関ヶ原〕平成29年度春季企画展 岐阜県博物館友の会(2017)
- 〔関ヶ原合戦と美濃〕谷口央著
- 〔関ヶ原関連年表〕
- 〔綿考輯録〕第二巻 忠興公(1) 細川護貞監修 汲古書院(1988)
- 〔改正三河風土記〕下 桑田忠親監修 秋田書店昭和52年(1977)
- 〔関ヶ原合戦図志〕神谷道一著 明治25年(1892)
- 〔NHKカルチャーラジオ〕関ヶ原合戦と直江兼統 笠谷和比古編
- 〔特別展 葵の時代「徳川将軍家と美濃」〕(2016) 編集・発行 岐阜市歴史博物館・岐阜新聞・ぎふちゃん
- 〔関ヶ原合戦展〕タリイピアセンター歴史民俗資料館(1999)
- 〔郷土の武将 竹中半兵衛〕タリイピアセンター歴史民俗資料館(2011)
- 〔戦国時代のたらい〕タリイピアセンター歴史民俗資料館(2014)
- 〔南宮山攻防戦〕タリイピアセンター歴史民俗資料館(2016)
- 〔博物館だよりNo.90〕岐阜市歴史博物館 研究ノート 土山公仁記(2015)
- 〔六之井神社のあゆみ〕丸山幸太郎著(2013)
- 〔歴史人No.58〕新説 大関ヶ原 180通の手紙で家康は何を訴えたのか? 泰平の道 関ヶ原合戦に学ぶ 宝蔵寺発行 谷口玉泉著
- 〔井伊軍志〕「木俣記録」井伊達夫著(1989)
- 〔別冊歴史読本 野望 武将たちの関ヶ原 竹中重門〕土山公仁記(2008)
- 〔史跡関ヶ原古戦場保存管理計画策定報告書〕(2010)
- 〔武功夜話〕前野家文書 新人物往来社(1988)
- 〔伊予史談会309号〕「謎の武将 一柳右近大夫可遊」児玉和男著(1998)
- 〔美濃国諸家系譜〕歴史伝承フォーラム田中豊(2006)

文献・論文・その他

- 〔徳川家康文書総目録〕徳川黎明会
- 〔別府大学紀要〕第53号 抜刷 白峰旬著(2012)
- 〔別府大学紀要〕第53号 抜刷 白峰旬著(2012)
- 〔別府大学大学院紀要〕第14号 抜刷 白峰旬著(2012)
- 〔別府大学大学院紀要〕第14号 抜刷 白峰旬著(2012)
- 〔別府大学史学研究会『史学論叢』第42号 抜刷 白峰旬著(2012)
- 〔別府大学史学研究会『史学論叢』第42号 抜刷 白峰旬著(2012)
- 〔別府大学大学院紀要〕第15号 白峰旬著(2013)
- 〔関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察〕

- 〔加藤光泰貞泰軍功記・曹溪院行状記 語釈付〕郷孝夫著（2011）
- 〔関ヶ原御合戦物語〕大垣市立図書館所蔵 宝永三年（1706）
- 〔関ヶ原合戦図屏風〕平成30年土曜講座 土山公仁
- 〔関ヶ原の歴史No.264 2014年4月号〕関ヶ原歴史を語る会
- 〔関ヶ原の歴史No.327 2018年10月号〕関ヶ原歴史を語る会
- 〔WEB 犬山城〕
- 〔岐阜市 仏心寺 腰掛石〕写真
- 〔岐阜市史の扉をひらいて〕吉岡勲著 昭和59年大衆書房発行
- 〔木田だより令和2年3月〕木田歴史文化研究会 後藤信義記
- 〔歌川広重 越中富山舟橋図〕
- 〔フリー百科事典ウィキペディア〕
- 〔Google Earth〕衛星写真（2018）
- 〔垂井の文化財2019〕垂井町文化財保護協会
- 〔紙芝居 関ヶ原〕研究会制作

肖像画・書状・古文書

- 〔岐阜市 円徳寺所蔵〕織田秀信肖像画
- 〔愛媛県大洲市曹溪院所蔵〕加藤貞泰肖像画 二幅
- 〔東京大学史料編纂所所蔵〕加藤光泰肖像画
- 〔岐阜市 立政寺所蔵〕徳川家康肖像画 二幅
- 〔岐阜市 専長寺所蔵〕池田輝政禁制（判物）
- 〔関ヶ原町歴史民俗資料館所蔵〕加藤貞泰・竹中重門宛徳川家康書状（判物）
- 〔明泉寺旧記 過現二世牒〕垂井町岩手明泉寺所蔵
- 〔吉田家の系譜〕羽島郡岐南町徳田 正村英司所蔵
- 〔伊藤氏系譜〕岐阜市黒野 伊藤定一所蔵
- 〔慶長五年岐阜軍記〕愛知県図書館デジタルライブラリー
- 〔大野家文書・六字之御名号由緒書〕岐阜市下鶴飼
- 〔大野家文書・先祖の由緒書〕岐阜市下鶴飼

絵図・布陣図

- 〔岐阜県歴史資料館所蔵〕「細見美濃国絵図」
- 図①『日本戦史 関原役』参謀本部編纂
- 図②『高山公実録』「関原戦場圖」
- 図③『岐阜県図書館所蔵』「濃州関ヶ原合戦図」

- 図④〔国立公文書館所蔵〕『慶長軍記』所収「関ヶ原戦場之図」
- 図⑤〔国立公文書館所蔵〕『武家事紀』所収「関ヶ原役圖」
- 図⑥〔愛媛県大洲市立博物館所蔵〕『北藤録』所収「濃州関ヶ原合戦之図」
- 図⑦〔大垣市立図書館所蔵〕『関ヶ原御合戦物語』所収図
- 図⑧〔岐阜県図書館所蔵〕「慶長之役古戦場之図」
- 図⑨〔岐阜県図書館所蔵〕「関ヶ原合戦図」
- 図⑩〔岐阜県図書館所蔵〕「関ヶ原御陣図」
- 図⑪〔岐阜県図書館所蔵〕「関ヶ原軍陣立ノ図」
- 図⑫〔垂井町教育委員会 タルイピアセンター所蔵〕「垂井陣取図」
- 図⑬〔長野市松代 真田宝物館所蔵〕「関ヶ原御陣所図」
- 図⑭〔垂井町岩手 菁峯記念館所蔵〕「関ヶ原合戦陣の図」
- 図⑮〔関ヶ原原町 歴史民俗資料館所蔵〕「御合戦場」
- 図⑯〔岐阜市 座間秀明所蔵〕「関ヶ原合戦図」
- 図⑰〔岐阜市 座間秀明所蔵〕「慶長之役古戦場之図」
- 図⑱〔国立公文書館所蔵〕「関ヶ原御陣図」
- 図⑲〔名古屋蓬左文庫所蔵〕「関ヶ原役布陣之図」
- 図⑳〔武家事紀〕「關箇原役圖（津軽本）」
- 図㉑〔明泉寺所蔵〕『美濃古領侍伝』所収「関ヶ原御陣備之図」
- 図㉒〔滋賀県米原市柏原 成菩提院所蔵〕「関ヶ原合戦陣形図」

屏風・絵巻

- 〔前田土佐守家資料館所蔵・標本大山市〕「四戦場之図屏風」
- 〔関ヶ原町歴史民俗資料館所蔵〕「関ヶ原合戦図屏風」
- 〔鳥取県 渡辺美術館所蔵〕「関ヶ原合戦図屏風」
- 〔岐阜市歴史博物館所蔵〕「四戦図屏風」
- 〔岐阜市歴史博物館所蔵〕「関ヶ原合戦図絵巻」
- 〔岐阜市歴史博物館所蔵〕「関ヶ原合戦図屏風」

寄稿・編集にご協力いただいた皆様方（初版含む・五十音順・敬称略）

伊藤定一・内海清明・大野忠行・寛真理子・國島京子・栗田勝蔵・熊崎詰一  
郷和彦・郷孝夫・後藤信義・座馬秀明・柴橋正直・関谷太治・高木優榮  
田邊伸行・土山公仁・名知勲・信田朝次・正村英司・山田広志・矢本哲也

本書は、地域の事業者様などの寄付金にて印刷・製本しました。

黒野城主 加藤左衛門尉貞泰

## 関ヶ原合戦の史料研究

初版発行 平成二十七年（2015）七月十八日（42頁）

改訂第二版 令和二年（2020）八月一日

発行者 黒野城と加藤貞泰公研究会

編集 会長 河口 耕三

〒 五〇一・一一一四 岐阜市今川四六四の三

☎〇九〇・一七八六・六五六四

メール [kouzou301@yahoo.co.jp](mailto:kouzou301@yahoo.co.jp)

印刷・製本 ヨツハシ株式会社

情報・問合せ 「黒野城と加藤貞泰公研究会」のホームページ

又はフェイスブックをご利用下さい

## Ⅱ 研究会創立十周年記念誌 Ⅱ